沓津遺跡

Matawakka Site

Rishiri-cho, Hokkaido 1978

Matawakka Site

*カバーに使用したカット

カバー1・ソーメン文（貼付式浮文）土器

カバー4・亦稚貝塚（9－2）の位置を示す地図

カバー4の袖・海獣線刻文土器

カバー1の袖・海獣線刻文土器に刻まれたオットセイのパターン

亦稚貝塚

Matawakka Site

Rishiri-cho, Hokkaido 1978

北海道利尻町教育委員会

遺跡付近航空写真

序

利尻町では，昭和51年７月，文化庁，北海道教育委員会の御指導を得て，利尻町内に存在する埋蔵文化財包蔵地分布調査を実施しました。その成果は,「利尻町の埋蔵文化財」として，すでに報告しております。

この報告は，当町教育委員会が主体的に取り組んだ最初のものであり，当町の埋蔵文化財保護行政の出発点として位置付けできるものであります。そうした意味において，昭和52年４月に，文化財埋蔵地の一つであります亦稚貝塚を発掘調査するに至ったことは，まさに，当町における埋蔵文化財保護行政の一歩が確実に示されたものであります。

今回の調査は，宗谷バス株式会社沓形ターミナル待合所の老朽化に伴ない改築されることから，急遽発掘調査にいたったものであります。調査の結果，オホーツク文化を解明するうえでの貴重な数多くの資料が出土しました。それらの資料は利尻島の古代文化を考察するために重要な役割を果すものであると思われます。

おわりに，調査期間中，悪天候にもかかわらず，一日も休むことなく調査を担当して下さいました岡田淳子先生とスタッフの方々，また，調査に理解と協力を惜まれなかった宗谷バス株式会社と惣万組，さらに関係機関の方々に深く感謝いたしますとともに，この報告書の成果をもとにして，利尻町の文化の向上に役立ててまいりたいと思います。

昭和53年４月

利尻町教育委員会

教育長　小　島　光　男

目　次

序

第一章　遺跡と調査の概観 …… 1

1．遺跡の位置 …… 1

2．過去の調査 …… 3

3．発掘調査の経緯と方法 …… 3

4．調査日誌（抄） …… 6

5．調査の要約 …… 8

第二章　遺構と遺物の記録 …… 12

1．発掘区と層序 …… 12

2．第1ブロックの層位と遺物 …… 16

3．第2ブロックの層位と遺物 …… 33

4．第3ブロックの層位と遺物 …… 38

5．住居遺構と伴出遺物 …… 58

6．続縄文等下層の遺物 …… 64

7．表面採集の遺物 …… 71

8．昭和25年の調査 …… 77

第三章　動物遺存体 …… 81

1．はじめに …… 81

2．動物遺存体の概要 …… 83

3．ま と め …… 96

第四章　文化史的位置について …… 98

1．北および南との交流 …… 98

2．島内他遺跡との関係 …… 102

挿図目次

第１図　亦稚遺跡位置図…… 2
第２図　遺跡付近地形図…… 4
第３図　発掘区平面図…… 9
第４図　層序断面図…… 13
第５図　第１ブロック出土土器実測図…… 18
第６図　第１ブロック出土土器実測図…… 19
第７図　第１ブロック出土土器実測図…… 21
第８図　第１ブロック出土土器片拓本…… 22
第９図　第１ブロック出土土器片拓本…… 24
第10図　第１ブロック出土土器片拓本…… 25
第11図　第１ブロック出土石器実測図…… 27
第12図　第１ブロック出土石器実測図…… 28
第13図　第１ブロック（１～10）・第２ブロック（11～13）出土石器実測図…… 30
第14図　第１ブロック出土骨角器実測図（６・７縮尺$\frac{1}{6}$）…… 31
第15図　第１ブロック（１～６）・第２ブロック（７～15）出土骨角器実測図…… 32
第16図　第２ブロック出土土器実測図…… 34
第17図　第２ブロック出土土器片拓本…… 35
第18図　第２（３・５）・第３（１・２）ブロック出土小形土器，土製品実測図…… 36
第19図　第２ブロック出土石器実測図…… 37
第20図　第２ブロック等出土骨角器実測図…… 39
第21図　焼骨付近遺物出土状態平面図…… 40
第22図　第３ブロック出土土器実測図…… 42
第23図　第３ブロック出土土器片拓本…… 43
第24図　第３ブロック出土土器片拓本…… 47
第25図　第３ブロック出土石器実測図…… 49
第26図　第３ブロック出土石器実測図…… 50
第27図　第３ブロック出土磨製石器実測図…… 51
第28図　第３ブロック出土大形石器実測図…… 53
第29図　第３ブロック出土砥石実測図…… 54
第30図　第３ブロック出土鹿角製品実測図…… 56
第31図　第３ブロック出土（１～12）・表面採集（13～19）骨角器実測図…… 57

第32図　住居址実測図…… 58
第33図　住居址内上層出土土器片拓本…… 60
第34図　住居址内出土土器片拓本…… 61
第35図　住居址内出土石器実測図…… 62
第36図　住居址床面出土石器実測図…… 63
第37図　ススヤ式(左)・縄文(右)土器実測図…… 64
第38図　ススヤ式土器片拓本…… 66
第39図　ススヤ式・縄文土器片拓本…… 68
第40図　縄文土器片拓本…… 70
第41図　表面採集土器実測図…… 72
第42図　表面採集土器片拓本…… 73
第43図　表面採集石器実測図…… 76
第44図　昭和25年度発掘地点平面図…… 77
第45図　昭和25年度出土骨角器実測図…… 79
第46図　利尻島内オホーツク文化の遺跡分布図…… 102

図版目次

巻頭図版	遺跡付近航空写真	
第一図版	海獣線刻文土器	119
第二図版	ソーメン文（貼付式浮文）土器	121
第三図版	発掘区域全景（上）・貝層断面（下）	123
第四図版	住居址（上）・焼骨付近土器出土状態（下）	124
第五図版	第１ブロック出土土器（⅓）	125
第六図版	第２ブロック出土土器（⅓）	126
第七図版	第３ブロック出土土器（⅓）	127
第八図版	小形土器・土製品（1/1）	128
第九図版	彫刻ある鹿角製品（Ａ）	129
第十図版	彫刻ある鹿角製品（Ｂ）	130
第十一図版	骨角器―尖頭具等（½）	131
第十二図版	骨角器―骨斧等（⅓）	132
第十三図版	打製石器―鏃・槍先（½）	133
第十四図版	打製石器―ナイフ・スクレイパー・錐（½）	134
第十五図版	打製石器―つまみ付ナイフ（石匙）（½）	135
第十六図版	磨製石器―石斧（½）	136
第十七図版	磨製石器―砥石・石錘（⅓）	137
第十八図版	土器片文様―縄線文（1/1）	138
第十九図版	土器片文様―刻文（1/1）	139
第二十図版	土器片文様―沈線文（1/1）	140
第二十一図版	土器片文様―浮文・型押文（1/1）	141

第一章　遺跡と調査の概観

Ⅰ．遺跡の位置

亦稚（マタワッカ）貝塚は，利尻島沓形にあり，正式の地名は北海道利尻郡利尻町沓形字緑町と本町にまたがっている。

利尻島は北海道本島の北西，日本海上に位置し，本島との最短距離は約20km，更に北西10kmには礼文水道をへだてて礼文島をみることができる。利尻島は周囲約50kmの円形に近い楕円形の火山島で，中央には，標高1719mの利尻山がそびえ，沓形は西の山裾に位置している。

亦稚貝塚は現在の沓形市街地の南寄り沓形岬の根元で遠浅の小湾に面し，海岸線からわずか100mくらいで，標高５～６mの緩傾斜の砂洲上に存在する。この沓形岬は冬の強くて寒い北・北東の季節風を防ぐため，遺跡のある地は島内でも四季を通じてもっともおだやかな所の一つとなっている（第１図)。

マタワッカという地名は『島物がたり』（時雨1948）に〝この土地の磯に一つの湧水があり，その井戸を中心に強力なアイヌの酋長が居を構え，水を護って勢を張っていたので，地名もそこからでているのである。マは「冬」，ワッカは「飲料水，湧き水」でマタワッカは冬も凍らぬ飲料水のある所，冬も水の湧く所の意である〟とあり，一年中飲料水の不足しない所と記されている。昭和10年11月の字名改正まで，この辺一帯を泉町と称していたのもこのためと思われる。

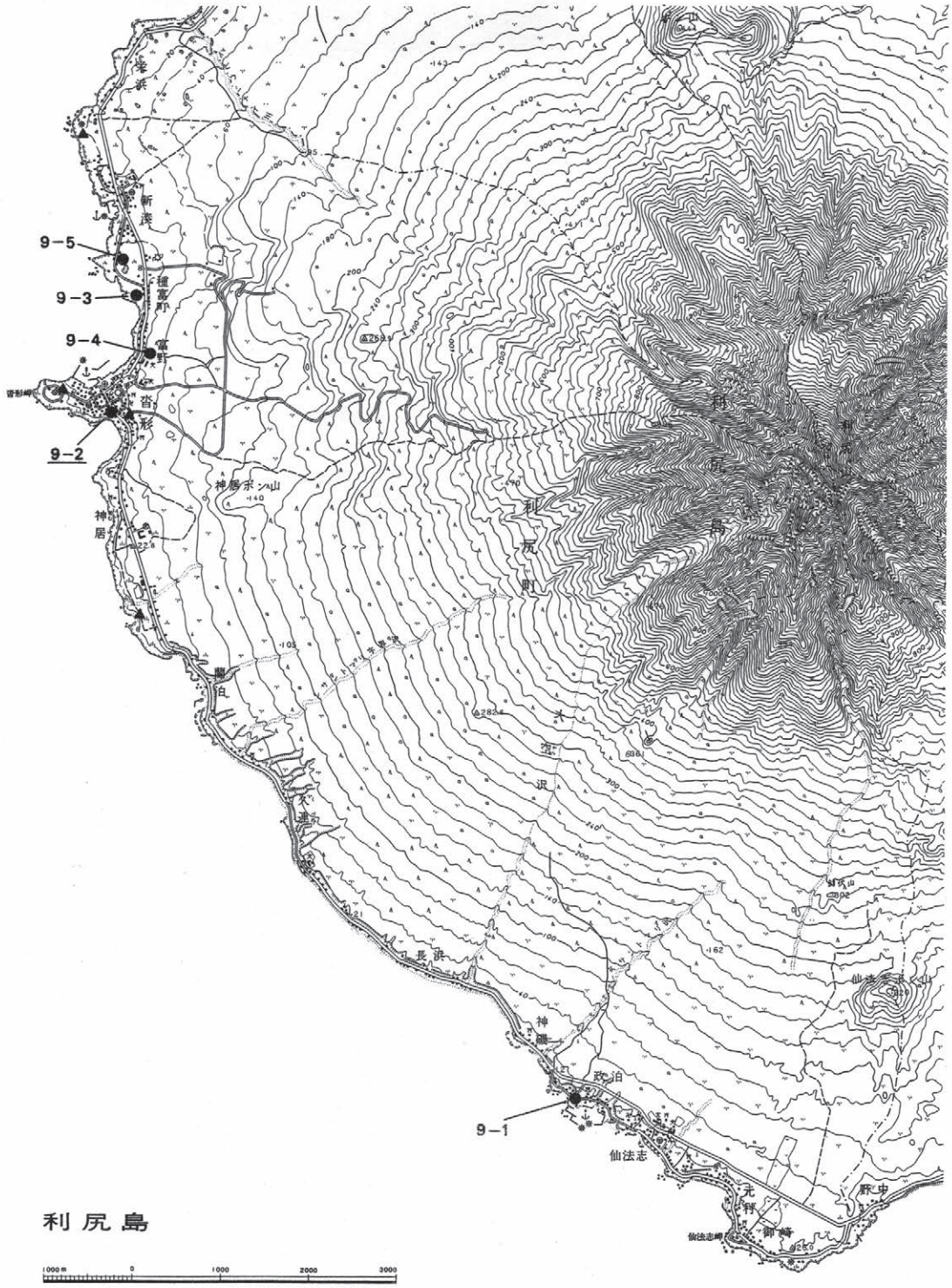
利尻島では山の降水が伏流となり，一旦地下にもぐって海岸付近に湧き出るところが数多くあるが，ここもその一つで，最近までこの湧水（井戸）は使われていたという。また遺跡の北西部にゆるやかな窪地があり，町の古老によると，かつてそこは沼だったというが，今回の地形測量の結果でもそれは裏付けられ占地の一因と考えられた。

この遺跡は，昭和43年発行の文化庁全国遺跡地図（北海道）に№1574として紹介されており，また北海道教育委員会埋蔵文化財包蔵地一覧表に登録番号Ｈ－09－２として登録されているものである。昭和51年度には利尻町教育委員会の埋蔵文化財包蔵地分布調査によってその範囲が確かめられた。

今回の発掘場所は宗谷バスKK利尻営業所が所在する，利尻町沓形字本町79番地である。

遺跡の分布範囲はおよそ東西120m，南北80m，（約10,000m²）と推定され，分布範囲からみて利尻島の遺跡としては大きなものと言える。標高が５～６mであるが，遺跡範囲には火山の溶岩による小さな岩山や大きな岩石があちこちに散見されており，平坦部分はごくわずかである。

現在，遺跡の範囲は航空写真（白線で囲われた範囲）で見られるように，分布地のなかを南北に道々が横切っており，遺跡の中心部と推定される所は，宗谷バス利尻営業所，バスターミナル，バス車庫等になり，その周辺部も民家や道路になっているので，全容を把えることはほとんど不可能であろう。（北風・岡田）



第１図　亦稚遺跡（９－２）位置図

本図は建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の５万分の１

地形図を縮図複製したものである。「昭53道複第107号」

2．発掘調査の経緯と方法

1977年４月，亦稚貝塚内に位置する宗谷バス株式会社沓形バスターミナル事務所及び待合所が建物の老朽化に伴い全面改築されることになった。すでに基礎工事のため機械で掘り上げられた土の山に，かなりの数のオホーツク式土器片や獣骨片などの遺物がみられたので，利尻町教育委員会は即刻工事の一時停止を求めた。一方工事区域内を調べたところ，オホーツク式土器片をはじめとして石器・骨角器等多数が採集され，その範囲は工事区域全域におよび，遺構の存在や良好な包含層の残存も考えられた。

町教育委員会は，ただちに北海道教育委員会の指示を仰ぐとともに，宗谷バス株式会社，工事請負業者惣万組と協議に入った。島内唯一のバスターミナルとして島民の陸上交通を担っている場所であり，もし長期間に亘って使用不能となれば，バスの運行を麻痺させるおそれもでてくる。また国立公園内に位置するため近々迎える観光シーズンにも備えなければならない。さらに工期の延長は工事の面でも短いシーズン中にやりくりがつかなくなる。これらの問題をかかえて埋蔵文化財を守るために緊急発掘調査をすぐにでも行わなければならない，というのが実情であった。

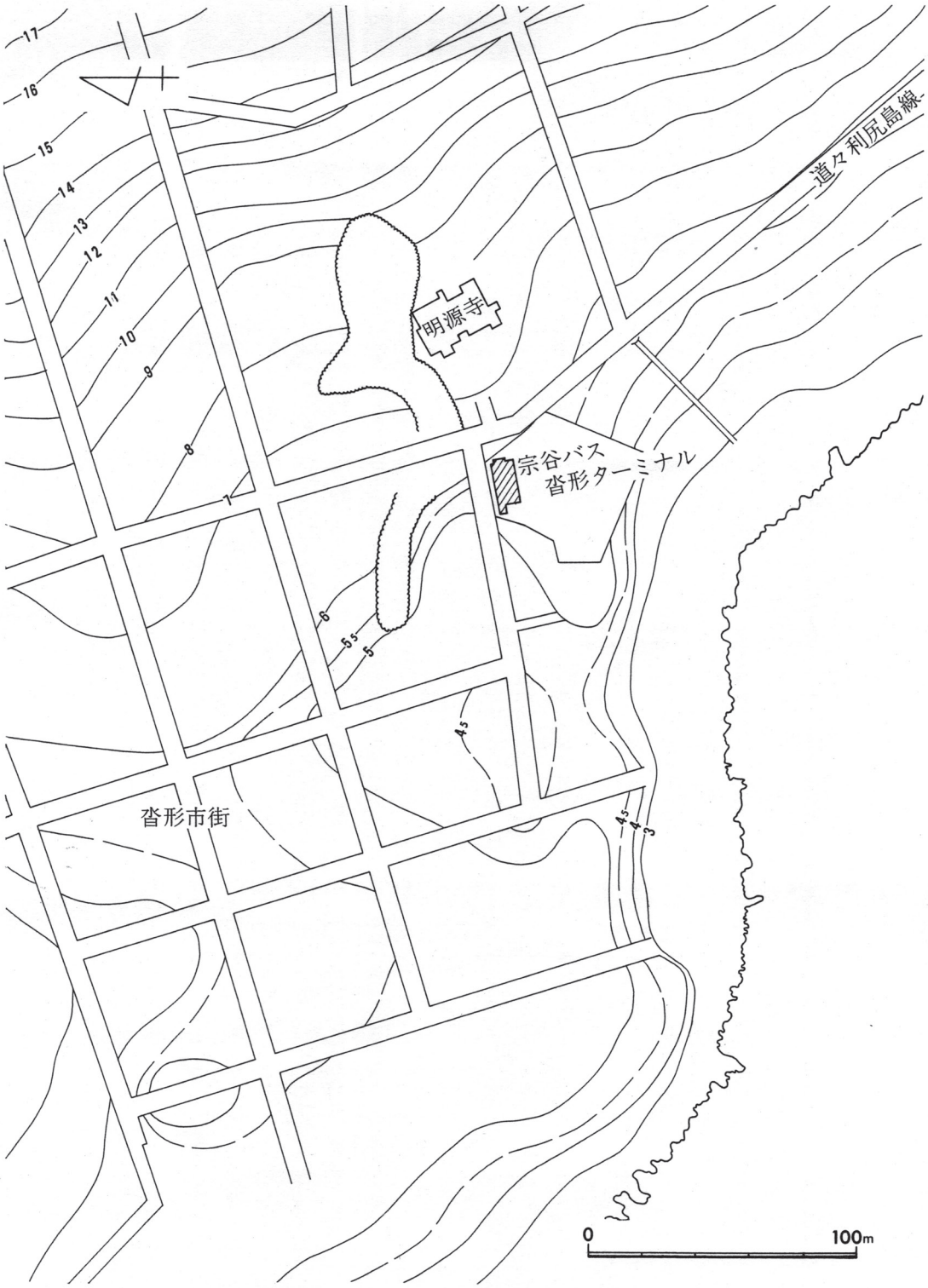
幸い関係者の理解が得られ，教育長が札幌に出向くなど慌だしく準備が進められた。岡田淳子を主任とし椙田光明・西谷栄治を調査員とする態勢が整えられ，町教育委員会の職員総出で調査を開始したのは４月17日になっていた。

発掘区域は工事区域内に限られ，面積約140m²，約16m×8.5の長方形の区画で，区域外は現状保存を原則とした（第２図斜線内が発掘区域）。すでにパワーシャベルで掘り上げられた土や礫を整理することから作業は始められたが，これに丸２日を費した。採集された遺物も数多く，表面採集の遺物としてまとめて報告してある。驚くほどの量の大形礫と土砂を取り除くと，包含層は意外に少なくなっていた。基礎工事のためにパワーシャベルで縦横に掘られた溝は，火山灰の無遺物層に達し，約４m間隔の枡目だったので，これを利用し４m×４mのグリッドを15設定した。グリッドにはそれぞれＡからＯまで記号をつけ，堆積断面の観察が終った部分から自然層位による分層発掘を試みた。

調査は４月17日から５月10日までを当てたが，４月末までに発掘を完了して現場を開け渡し，地形測量などは後にまわすよう考えていた。ところが天候が思うにまかせず，北西の季節風が吹き荒れ，時々雪にも見舞われる有様だったので，テントをかけ，石油ストーブを焚きながら調査を継続する始末となった。それでも予定通り調査が終了したのは，町教育委員会職員の連日の奮斗と，授業を終らせ午後には馳けつけて参加した利尻高校の北風先生，遠方から来町指導された道教育委員会の畑宏明氏をはじめ，多くの町民の方々の助力の賜だったと思う。（西谷・岡田）

3．過去の調査

マタワッカ貝塚の名は古く明治34年の東京人類学会雑誌にあらわれている。坪井正五郎の「北


17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5.5
5
4.5
4
3
明源寺
宗谷バス
沓形ターミナル
道々利尻島線
沓形市街
0
100m

第２図　遺跡付近地形図

海道利尻貝塚発見の海獣牙製の人形」という論文がそれで，以来，異国のひびきをもつ「マタワッカ」の名は多くの人々の知るところとなった。

論文のなかで著者は，発掘者藤井秀の書面を引いて，氏が明治33年７月30日に海獣牙製の人形を発掘した顚末を記している。また，同貝塚より発見の海獣像をもつものがあることも付記されているので，当貝塚は当時付近では良く知られており，かなり手がつけられていたものと思われる。

この人像は荷物輸送中に荷物ごと紛失し，坪井正五郎氏も実見していない。しかし，実測図と添え書があり，それによれば，「高さ曲尺二寸八分　重さ十六匁　面側の黒点は浅き凹窩なり　色は古き骨又は歯牙の如くにて淡褐色　滑沢あり……人夫某之を掘出し過ちて右膊を傷く」と述べられている。坪井正五郎氏は，この牙像がエスキモーの牙像に類例を求め得るとして，エスキモー文化とのつながりを示唆した。その後，網走・根室・礼文などでも同種の牙像が発見され，それについての研究もなされている。

それから30年，利尻島の考古学的調査は本格的に行われずに過ぎたらしく，次にみられる文献は昭和８年の名取武光による「利尻・礼文両島に於ける考古学的調査報告」（史前学雑誌５－３）および名取・後藤寿一共著の「利尻・礼文島紀行」（蝦夷往来11）であるが，これにもマタワッカ貝塚についての記事はない。この時の調査では，利尻島の東半分，オタトマリ（沼浦）からオトンドマリ（大磯）までを調査しながら，西半分には至っておらず，マタワッカが調査されずに終ったのは残念であった。

さらに20年近くを経て，昭和25年夏，早稲田大学の大川清（現国士館大学教授）によって亦稚・種屯内両貝塚が調査されたことが，新岡武彦により速報された（新岡1951)。10行たらずの小報ではあるが，「炉址やカラフトイノシシ（ブタ）頭蓋多数，および北海道産鹿角破片の発見があった」と記されている。この調査について大川清氏より未刊の論文を拝借したので掲載させていただくが，約２坪の試掘で，層は深かったが人工遺物の発見は少なく自然遺物が多かったとのことであった。しかしここで多数のカラフトブタの存在を確認されたことは大きな発見であった。この調査のすぐ後北海道大学医学部教授だった故児玉作左衛門が，貝塚の一部で人骨を発掘したという。当時発掘を見学した地元の人々によって伝えられているが，文献には接していない。この発掘に立会った新岡武彦氏にお話を伺ったところ，写真記録に留めたが，あまり大きな調査ではなかったという。また，宗谷バス利尻営業所々長によれば，沓形ターミナルの待合室を建設した際，道道利尻島線に面した入口付近から人骨が掘り出されたとのことであった。

昭和43年，大場利夫は「北海道周辺地域にみられるオホーツク文化」（北方文化研究３）のなかで亦稚貝塚にふれ，名取武光がオホーツク文化の遺跡と言っているが，すでに壊滅したようだと述べている。

昭和44年には，菅正敏が北海道遺跡調査員として，６月14～15日，21～22日の４日間を費やし，利尻島の遺跡の現況及び確認調査を行い，その結果を「宗谷地方の先史文化ノート(2)」（北海道考古学５）として発表した。これによれば，亦稚遺跡の大部分はバスターミナル建設のために埋

めたてられ20cm程度土をかぶっていること，明源寺の境内となった部分は現状のまま維持されていること，オホーツク式土器とススヤ式土器が出土していることなどが記されている。

7年後の昭和51年夏，利尻町教育委員会が主催して遺跡の分布調査を行ったが，これを担当した私は，菅正敏氏とほぼ同様の結論を得た。バスターミナルは水平に整地されているので，道々利尻島線に沿う部分では約20cm，西寄りの海に近い部分では，1m余も土盛りされている。明源寺境内も，道々沿いすなわち本堂の前庭は土盛りされ，遺物を表面採集することはできなかった。しかし明源寺に向って右隣の小さな畑には実に多くの遺物が散布し，バスターミナルの周辺一帯でも遺物を採集した。これらのことから遺跡はかなり広く，中心部と考えられるバスターミナルと明源寺の一部では，遺物が埋土の下に残されているであろうと考えられた。なお明源寺住職清水章延氏の話では，境内の溶岩の山のなかに洞があり，かつて完形に近い甕と石器を掘り出したとのことだったので，その場所を調べると 1.5m四方の石室状の溶岩洞があり，西に向って開いている。現在，当時の遺物は町の教育委員会に保管されている。

亦稚貝塚は古くから名前が知られていたにも拘らず，その内容がはっきりしていなかったので，昭和52年春，今回の調査が行われ，遺跡の性格が少しでも解明されたことは幸いであった。(岡田)

4．発掘日誌（抄）

4月17日　曇り

午前11時に沓形に到着し，さっそく現地の状況を見る。現場は基礎打ちのために溝が掘られ，地表面から残っている部分はほとんどなく，中央に約4m×5mの広さが三ヶ所残存するだけであった。断面の観察によれば下部に貝層等の包含層がみられたが以前の攪乱が著しく，また上部は，バスターミナル建設の際の埋立土が厚く被っている状態であった。午後から上部の埋立土の排除にあたった。（G・Hグリッド）

4月18日　曇り時々雨　南西の強風

昨日に続き埋立土の排除作業を行った。埋立に使われた大きな火山岩・土砂の搬出が周囲の溝や雨にさまたげられ思うようにはかどらない。途中雨のために作業が一時中断した。

4月19日　雨時々雪　南西の強風

雨のため作業を中止して基礎工事により掘りあげられた遺物の整理を行った。

4月20日　雨のち雪

東側の埋立土の排除を終わり（G・Hグリッド）グリッドの杭打ち作業を行なった。一辺4mのグリッドで中央に残された部分がグリッド内におさまるように設定した。南北に3列，東西に5列全てで15グリッドに分けた。北側の列を東から西へA～E，中央をF～J，南側をK～Oと名付けた。午後は雨のため作業を中止した。

4月21日　晴れのち曇り

南側の壁に残る旧基礎の埋立土を排除して断面を観察できるようにした。西側のE・J・Oグ

リッド部分と東側のＡ・Ｆ部分の埋立土の排除を終え，発掘に先だちＦ・Ｇ・Ｈグリッド部分の断面の実測を行なった。

４月22日　晴れ

東側のＡ・Ｆ・Ｇグリッドと排土の関係上北西隅のＤグリッドから調査を始めた。Ａ・Ｆグリッドは黒色土・茶褐色土を剝ぎウニの層の上部まで掘った。Ｇグリッドは茶褐色土を剝ぎ魚骨層の上部まで掘った。Ｄグリッドは旧基礎の埋立土を排除後，黒色土そして褐色土を掘り進んでいった。

４月23日　曇りのち雨雪

Ａ・Ｆグリッドはウニの層を剝ぎ茶褐色土上面まで掘るが，ウニ層中およびウニ層下にまとまった土器の出土があった。Ｇグリッドはウニ層・魚骨層・焼土層等の互層を掘ってゆくがいずれも部分的な広がりで層自体も薄い。Ｄグリッドは昨日に続いて褐色土・茶褐色土を掘った。Ｃグリッドも始めたが基礎打ちの溝で削られ包含層はＤグリッド寄りにしか残存していない。黒色土層の下部は炭化物の層となっていて炭化物層から小形甕形土器が出土した。

４月24日　曇りのち晴れ

Ａ・Ｆグリッドは茶褐色土を掘りローム面まで下げ終った。茶褐色土中には大きな火山岩が多く入っていた。Ｇグリッドは茶褐色土の上面まで終了した。貝層等の互層は北に向って傾斜して堆積しＡ・Ｆグリッドとも連続する。層中からは良好な骨角器が出土した。Ｄグリッドは茶褐色土を除きローム面まで終った。ローム面上，ローム面に近い部分から石器が数多く出土した。

４月25日　晴れ

Ａ・Ｆグリッド北側断面の実測を行う。Ｇグリッドは茶褐色土を掘り進む。Ｅ・Ｊ・Ｏグリッドをローム面まで掘り下げる。Ｅ・Ｊグリッドは貝層をはさまず，また攪乱が著しい。ＥグリッドもＤグリッドと同様にローム面上から石器が出土した。Ｏグリッド南側には厚い魚骨層が堆積し下底には焼土，炭化物の層が互層になっていた。この互層中から土器３個体が出土した。次に発掘するＩグリッドの西・北側の断面を実測した。

４月26日　晴れ

Ａグリッドの残存部分とＧグリッドはローム面まで掘り終る。Ｂ・Ｋ・Ｌグリッドの清掃をして東側のＡ・Ｂ・Ｆ・Ｇ・Ｋ・Ｌグリッドを終了した。Ｄ・Ｅ・Ｊグリッド間のセクションベルトをとり払った。Ｉグリッドは黒色土層を掘り始めた。Ｃ・Ｄ・Ｅグリッド北側断面を実測した。

４月27日　晴れ

Ｉグリッドで茶褐色土を掘り始めたところ南側でローム層がすぐに露出し北側が落ちこむことが明らかになった。Ｃグリッドの茶褐色土を剝ぐとＣ・Ｄグリッド間に落ちこみがあり，Ｄ・Ｉグリッドにまたがった遺構の存在がはっきりした。Ｎグリッドはほとんど攪乱部分で南側壁寄りが下り包含層がわずかに残されていた。Ｏグリッドから続く焼土，炭化物の互層が南へ傾斜してのびていた。Ｋ・Ｌ・Ｍグリッドの南側壁の断面を実測した。

４月 28日　晴れ

D・Iグリッドの遺構はローム面の精査により周溝，柱穴，炉が存在し住居址であることが明らかになった。Nグリッドは，ローム面まで下げたところゆるやかに南側へ傾斜していた。Hグリッドを掘り始めた。黒色土層から茶褐色土層に掘り進む。黒色土層の下部は炭化物の層となっていて，大形の土器破片がまとまって出土した。Hグリッド北側の断面を実測した。

4月29日　晴れ

Hグリッドのベルトをとり払った。黒色土下部の炭化物層の上から小形土器が4個体まとまって出土した。また土器の周囲には焼骨が多量にあり，その中に鹿角製の彫刻角器が含まれていた。住居址の測量およびN・Oグリッド南壁の断面を実測した。

4月30日　晴れ

住居址南東壁に発見されたピットを掘った。E・G・Oグリッド西壁の断面を実測した。住居址のセクションを実測して発掘を終了した。

5月2日～7日

地形測量・遺物の水洗を行った。地形測量は商店，住宅街のため道路面の高低を計り地形を復元した。　　（椙田）

5．調査の要約

発掘区の状況　発掘区域(約8.5m×16m)の四囲の壁には貝層が現れていたが，発掘した部分にはほとんど貝層がみられなかった。それは，発掘区域がかっての建物の土台の跡だったので，すでに破壊された部分があったものと思われる。また，貝層が小範囲毎にまとまっていたために，丁度この部分が貝層の少ないところだったとも考えられる。

地層は全般に東の山側が高く，西の海側へ向って次第に低くなっているが，堆積層もこれに従い，高低差は約1.5mもある。

堆積層は大きく四層に分けられる。

表土層……黒色土，陶磁器片等を含む。

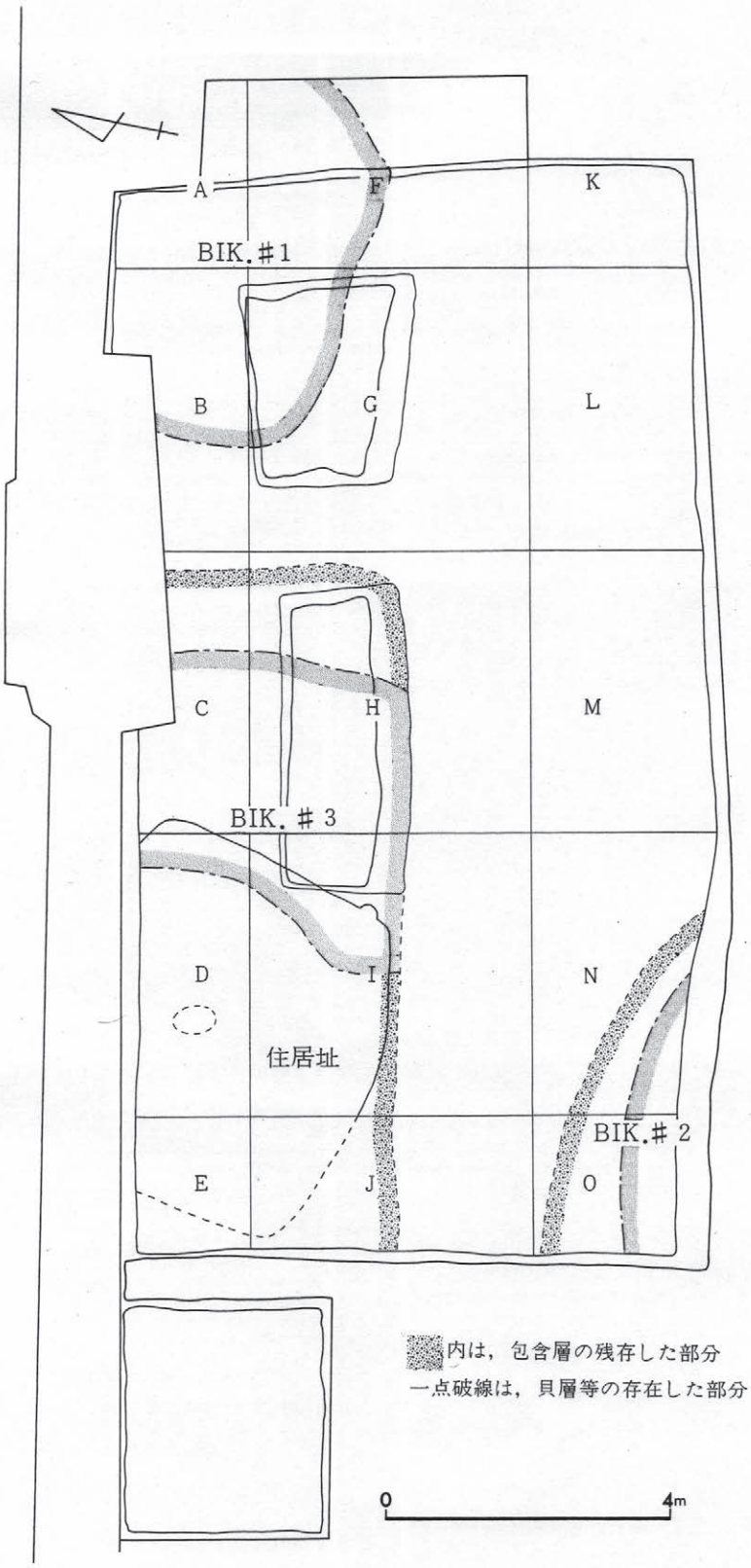
オホーツク文化層……黒褐色土，貝・魚骨を含む。

ススヤ式文化層……茶褐色土，縄文土器片散見。

火山灰層……黄褐色，無遺物層

模式的に示せば上記のように大別され，黒褐色土層と茶褐色土層が調査対象となったが，黒褐色土層はさらに魚骨・貝などの部分的な層に細別された。

オホーツク文化層　遺物の集中度から三ヶ所のまとまりが知られたので，それぞれ第1ブロック（Blk．＃1），第2ブロック（Blk．＃2）　第3ブロック（Blk．＃3）と呼ぶことに


A
F
K
BIK.#1
B
G
L
C
H
M
BIK.#3
D
I
N
住居址
BIK.#2
E
J
O
内は，包含層の残存した部分
一点破線は，貝層等の存在した部分
0
4m

第3図　発掘区平面図

した。（第３図）。

第１ブロックはＡ・Ｆ・Ｇグリッドにまたがり，発掘区域の北東端に位置する。遺構は無いが，オホーック文化層が上下２層に分けられ，下層はウニ，魚骨等の厚い純層となって，骨角器・人骨の遺存が確められた。人骨は10歳位の小児の頭骨片及び下顎の一部で埋葬のあとはみとめられない。オホーツク式土器は，口唇下に並ぶ外からの円形刺突文と櫛状工具による施文，刻文の組合わせをもち，三つのブロックのなかではもっとも古い。特に，復元可能な土器が数個発見されたなかに赤色塗りの土師器小鉢一個が発見されたことは注目に値いする（第５図）。伴出土器は刺突列のある，いわゆる十和田式土器に近いもので，刻文をもつ土器も，きれいに磨かれたものは少ない。Ａ・Ｆグリッドの厚い層をなすウニ殻はエゾバフンウニとキタムラサキウニで，現在の島の名産品と同じであった。ウニ殻層はＧグリッド一海方向にむかって急傾斜し，Ｇグリッド内では薄い層が散見される程度となって消滅する。動物遺残ではアシカ等の海獣が比較的多い。

第２ブロックは発掘区域の南西端でＮ・Ｏグリッドにまたがる。魚骨貝層と黒色炭化層，灰白色・褐色の灰層などが互層をなし，茶褐色土に落込み状の遺構をつくっていた。落込みの縁が直線状なので，あるいは遺構の一部かと考えられたが，発掘区の端だったので，今回の調査での確認は不可能であった。復元可能な大型土器三個（第16図）の出土もあり，注意すべき地点である。土器は沈線と刻文の組合せで，表面は箆磨き・ナデによってきれいに調整され，焼成もよい。層位的に第１ブロックの土器よりも新しいものである。魚骨層から出土した魚はニシンとホッケが多く，また獣骨ではカラフトブタが圧倒的に多い。昭和25年に大川清氏が発掘したＢ地点は，ここと非常に近接しているが，そこからもカラフトブタの骨が多数出土しているので一連のものと思われる。

第３ブロックは発掘区の北西部４分の１を占め，Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｈ・Ｉ・Ｊグリッドにわたっている。貝層は非常に薄いが，黒色の砂層や土層のなかから興味深い発見があった。ソーメン状の貼付文，海獣の線描文，無文の三個の小型完形土器が一ヶ所からかたまって出土し，その下に焼けた獣骨の破片が長径70cmの楕円状に30cmの厚さをもって堆積していた。この骨のなかには，クマの四肢骨，キタキツネの顎骨，タカ・ワシの骨など，他の地点ではほとんど見られないものが目立つていた。なかでもこれらの焼骨に混って，多数の海獣とクマを浮彫りにしたトナカイ(rein－deer）の角製品が２点発見されたことは特筆すべきである。周囲は破壊された部分が多く，はっきりした遺構を把握することは出来なかったが，付近に小さなピットや大形土器片，無数の黒耀石の剝片があり，他の場所とは違う様相を示している（第21図，第四図版）。土器片はソーメンを主とする貼付文，自由な線描きの沈線文，摩擦式浮文が多く，土器は赤焼きで焼成がよい。層位的に第１ブロックのものより新らしく，第２ブロックとの間には攪乱部があって判定に苦労したが，やはり新らしいと考えられた。今回調査した部分では最も新らしい時期のオホーツク文化と言うことが出来る。

以上を整理すると次のようになる。

地　　点	土　　器	特　　徴
第 3 ブロック	貼付文・線描文	焼骨をもつ遺構
第 2 ブロック	刻文＋沈線	カラフトブタ多
第 1 ブロック	円形刺突列・刻文	土師器伴

ススヤ式土器出土層　黒褐色土とその下の茶褐色土の境は遺物が上下して混り合っているが，茶褐色土の下半はいわゆるススヤ式土器の包含層となる。しかし，これも単純ではなく，縄文後期から晩期，続縄文など各時期の土器片が同じ層に散見される。これらの土器片は数も少なく，時期としてのまとまりがない。ことに数の上では比較的多い縄文後期の土器片は全体に磨滅がひどく，本来この位置にあったものとは思われない。ススヤ式土器も器形を実測できるものは一個のみであったが，発掘区全面から多くの破片が出土した。発掘区域北西部分のＤ・Ｅ・Ｉ・Ｊグリッドにかけて見出された住居址の床面でススヤ式土器片を確認したことも加え、ススヤ式土器の文化層と考えた。

土器は変化が明瞭なので分類可能であるが，石器は変化に乏しく，土器と同じような時期分類はできなかった。ここで問題なのはつまみ付ナイフである。この特徴的なナイフは山内清男により縄文文化特有のものとしてとらえられてきたもので，たしかにそれ以外の文化のなかには見られていない。そのつまみ付ナイフが30本余発見された。この数は発見された縄文土器片に比べて異常に多い数で，住居址内からの発見もある。同じつまみ付ナイフでも全面がきれいに押圧剝離されているものと，周囲だけを簡単に再調整したものとがあり，また形の上でもタイプ分けが可能である。この資料は縄文時代に続く時代にもある種のつまみ付ナイフが使われたことを示唆しているのではなかろうか（第十五図版）。

住居址　茶褐色土層から黄褐色の火山灰層に掘り込まれた竪穴住居址で，出土遺物はすでに述べだように，ススヤ式土器片および石器15点（鏃，ナイフ等）で，あまり多いとは言えない（第34，36図）。一部分発掘区域外にはみ出し，道路にかかるので全体を調査できなかったが，一辺約５ｍの胴張り不整四角形プランをもつらしい。海側は低くなっているため壁はなく，溶岩塊が壁の役を果していたものと思われる。壁下をめぐる溝と床面中央やや東寄りに炉址がある。柱穴は全面を掘っていないため全体を把握できないが，北東と南東の角に１本ずつと，炉址の南に１本はっきりしたものが認められた。ススヤ式土器を出す住居の発見は未だ少なく，台地上のみ知られていたので，もしこれがススヤ式の住居ならば，海岸に近く標高４ｍ足らずの低地にある住居は初めての発見といってよいであろう（第34図）。

（岡田）

第二章　遺構と遺物の記録

Ⅰ．発掘区と層序

発掘部分は宗谷バス沓形ターミナル待合所建設用地の東西15.5m，南北8.5mの約130㎡と建設用地と道々利尻島線間にわずかに残された部分の5㎡を合わせた範囲にあたる。5㎡の部分は待合所が建設された時点で遺跡としての価値を失なうと考えられるので今回の発掘範囲に含めた。すでに述べたが基礎打ち用の巾1.5mほどの溝が掘られ中央に三ケ所島状に包含層が残存している状態であった。こうした状態から発掘区の設定は残存している部分が中心に入るように4mのグリッドにした。東西に5列，南北に3列，計15のグリッドに分け，北側のグリッド列を東から西へA～E，中央をF～J，南側をK～Oと連続して名を付した（第3図）。

当初は中央のG・H・Iグリッドで溝に切られていない部分は包含層が残存していると思われたが古い時期の基礎がG～Jグリッドに走り南側半分は破壊されていた。このため旧地表面から残っている部分はA・Fグリッドの道々寄りの部分，G・Hグリッドの北半分に限定された。また，地形の傾斜により層の下半が残存した部分としてC・D・E・I・JグリッドとN・Oグリッドの南西寄りの部分の2つの範囲に限られた。C～E，I・Jグリッドは住居址の掘込みと北西への傾斜によって，N・Oグリッドは南西側への急傾斜によって残されたものである。

以上のような発掘区の状態により包含層が分断され相互の関係が把握しにくいものとなっている。比較的よく残されている発掘区外縁の層序，そして発掘区内の層序の状態について述べ，最後に両者の関係を見て全体の層の広がりを把握してゆくことにする（第4図）。

断面図Ⅰ　発掘区南壁断面

1　層――黒色土。貝・魚骨，陶磁器・鉄片を含む。

2a層――魚骨層。

2b層――魚骨・貝等を多量に含む黒褐色土。

2c層――魚骨を少量含む黒褐色土

2d層――純貝層

2e層――炭化物・白色粘土の層

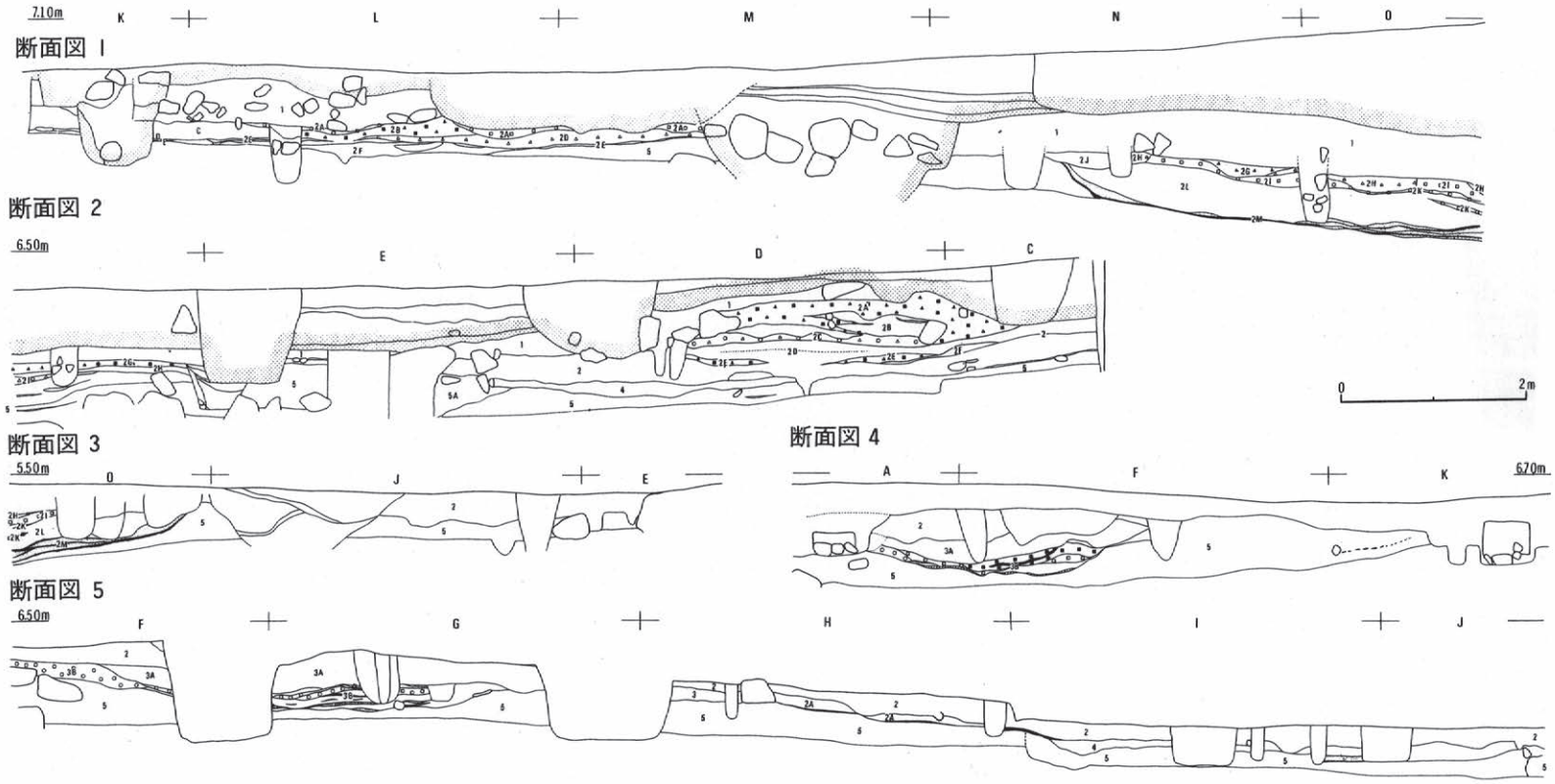
2f層――白色砂層

2g層――黒色混貝土層

2h層――アワビ等純貝層

2i層――ローム層を混じえた魚骨層

2j層――ロームを混じえた茶褐色土層



第4図　層序断面図　　上より断面図1～5　水糸の高さは標高

２ｋ層――魚骨層

２ｌ層――魚骨を含んだ黒褐色土層

２ｍ層――焼土・炭化物の互層

５　層――茶褐色土層

断面図１では中央の大きな攪乱部分の東側と西側に分けて記述する。ドットから上部は埋立土で１層が旧表土層の黒色土となっている。Ｌグリッド付近の１層は掘り返した下部の貝層や瀬戸物の破片等を非常に多く含んでいる。Ｋ～Ｏグリッド部分では全体に１層下が直接貝層になり多少の差はあるが貝層等をまきあげている。Ｋ・Ｌ・Ｍグリッドの２ａ層はとぎれながらも最上部に位置している。Ｌグリッド部分の２ｂ層はＫグリッド側へ行くにしたがい漸移的に魚骨の含有量が少なくなり２ｃ層へと移行している。２ｄ層の貝層はＭグリッド方向に厚味を増している。Ｍグリッドの２ｅ層は２ｆ層の砂層上から５層の茶褐色土上面に連続している。２ｆ層はＫ・Ｌグリッドに堆積しているがとくにＬグリッド中央部が厚い。またＫ・Ｌグリッドでは直接ローム層上に堆積しているがＭグリッド寄りでは茶褐色土の上に乗っている。このＫ・Ｌ・Ｍグリッド部分は平坦で，炭化物・粘土等から住居跡の可能性も考えられる。

Ｌグリッドから始まり厚味を増していた茶褐色土がＮグリッドで掘り込まれたように落ちこみ発掘区外までのびている。落ちこみはゆるやかに傾斜しており自然のものか人工的なものかはっきりしない。掘りこみ部分に２ｇから２ｍ層の堆積が見られる。2g・２ｈ・２ｉ・２ｊ・２ｋ等の層が上部に集まり，２ｌ層が堆積して落ちこみの大部分を埋めている。落ち込み部分の下底には2m層の焼土･炭化物層の互層が周囲から流れ込んだように落ちこみぎわに厚く堆積している。２ｉ，２ｊ層のようにローム土を混じえている層の存在は，他の部分で人為的な掘りこみがあったことを示すものであろう。断面全体としてＫ～ＬグリッドとＮ・Ｏグリッド部分では上部に貝層等，間に黒褐色土，下部に炭化物層とよく類似している。

断面図２　発掘区北壁断面

Ａ・ＢグリッドとＬグリッドの東側半分はすでに道路と旧基礎により失われている。また，Ｃ・Ｄ・Ｅグリッド部分も道路との間に50cmほどの幅で包含層が残存しているにすぎない。

発掘区北壁断面の各層の性質は以下の通りである。

１　層――黒色土。貝・魚骨等下層のものと陶磁器片・鉄片を含んでいる。

２　層――黒褐色土。貝・魚骨等を少し含む。

２ａ層――茶褐色混貝土。魚骨・破砕貝を多量に含む。

２ｂ層――黒褐色土。魚骨等を含む。

２ｃ層――ウニ殻と破砕貝を主体としている。

２ｄ層――貝層。

２ｅ層――黒色混貝土。魚骨・貝（アワビ等）を多量に含む。

２ｆ層――白色粘土層。

２ｇ層――茶褐色混貝土。破砕貝・ウニ殻・魚骨等を含む。

２ｈ層――黒　土層。少し魚骨を含む。

２ｉ層――魚骨・破砕貝（アワビ）を主体とした層。

４　層――褐色土層。砂を多く含んでいる。

５　層――茶褐色土層。

５ａ層――黄褐色土層。

ドットから上部は近代の埋立土で黒色土・黄褐色火山灰，石炭ガラ等が堆積している。ドット以下の第１層は旧表層で南へ傾斜している。Ｃ・Ｄグリッド部分では黒色の色調を呈しているがＥグリッドから南側になると褐色味を帯びてくる。Ｄグリッド部分とＥグリッド南側部分の２ヶ所に魚骨・貝層等が現われる。Ｄグリッド部分では表土下に２ａ層の茶褐色混貝土，２ｂ層の黒褐色土をはさみ２ｃ層の貝層がありこれらが堆積してＤグリッドからＣグリッドにかけて高く盛りあがった部分を作っている。この部分は全体の層の状態から見て盛りあがりが不自然であり新しい時期の再堆積の可能性がある。火山岩の入っているレベルの２ｂ層が表土層で２ｃ層からが自然堆積と思われる。

下層には２ｄ層，２ｅ層が薄く堆積している。２ｄ層は貝の破砕したものが薄く点列状に広がり，貝の上部の黒色土は非常に固くしまった土になっている。２ｅ層は左右２つに分れ中央部に向い低くなっている。Ｃグリッドに近い層の末端は２ｆ層の粘土層の上にのっている。この粘土層の下面は赤く変色している。

２層の黒褐色土層は２ｄ・２ｅ層を含みながら30cmほどの層厚をもって広がりＥグリッドの中ほどで消滅する。４層は住居址の覆土のへこみに堆積しているらしく住居址の上部に分布する。５層はローム層の上面に堆積している。住居址の覆土も５層であるが覆土外との区別がつかなかったので同一にしてある。Ｃグリッド部分では２層と５層間に炭化物の層が入っている。

Ｅグリッド南側の地点では１層の表土層の下に２ｇの茶褐色混貝土，２ｈの黒色土をはさみ２ｉ層の貝層と続き５層の茶褐色土となる。５層中には炭化物層が薄く３～４層西側に傾斜してゆく。またここでは幅70cm深さ50cmほどの土壙断面がみられる。土壙は２ｇ層上面から切りこみ覆土はウニ殻の純層と黒色土の互層とから成っている。５層の下面は大部分火山岩となっている。

断面図３　発掘区西側断面

この断面は埋立土が除かれたもので同時に表土層も失なわれている。Ｏグリッド部分は断面図２のＮ・Ｏグリッドに見られた２ｇ～２ｍの各層がＯとＪグリッドの境までゆるやかに立ちあがっている。１層の黒色土はＪグリッドの大きな攪乱をはさんでなくなっている。Ｊ・Ｅグリッドでは２層と５層が堆積するだけになり，２層は褐色味をもち，５層は灰色味をもっていて断面図２のＣ～Ｅグリッドの色調と少し異なっている。

断面図４　発掘区東側断面

この断面は埋立土及び表土層は除かれている。北と南端は旧建造物の基礎が入っている。層の

状態は大まかに5層の茶褐色土の凹みに2層・3a層・3b層が堆積した状態となっている。2層は黒色土で若干魚骨を含んでいる。堆積は凹み部分に限られ上部は表土層に接する。3a層は魚骨を含んだ茶褐色土，3b層は魚骨・ウニ・焼土・炭化物・粘土等が薄い互層となって堆積したものである。5層はA・Fグリッド間が薄く周囲が厚くなる。とくに南側は厚く堆積して表土層に接する。Kグリッド部分の5層中に炭化物の薄い層がみられた。F・Kグリッド部分の5層上部には表土層のレベルから貝層等の堆積はなかったようである。

断面図5　F・G・H・I・Jグリッド北側断面

Fグリッド部分は断面図4により層自体の説明を行なったので除く。2層・3層とも5層の傾斜に沿ってGグリッド側へ傾いている。2層は平均した厚みを保っているが3a層は厚みを減じて100cmほど東側でなくなる。3b層は魚骨・ウニ焼土等の薄い互層の中からウニ殻の層が20cmほどの厚みをもって東側へ続いてゆく。他の層は50cmほど東側でなくなる。5層はGグリッド側が最も薄い部分となっており除々に東側へ厚くなっている。東側では火山岩が突出している。

Gグリッド部分もFグリッドと同様の2層，3層，5層の順に堆積している。2層の黒色土は下部に魚骨を多く含んで褐色がかっている。Fグリッドの3a層に続くものと思われるが明確に区別ができなかった。3層は魚骨・ウニ・焼土・炭化物・粘土等の薄い互層となっている層を一括して呼んだ。3層は5層のくぼみ部分に限られ西側$\frac{1}{3}$あたりで5層が厚みを増しなくなる。3層，5層はFグリッドから連続するものである。

H・I・Jグリッド部分は2層の黒色土，2a層の褐色土，4層の褐色土，5層の茶褐色土の順に堆積している。2a層は褐色土であるが部分的に性質が少し異なっている。Hグリッドの東側部分は魚骨を含みGグリッド側に類似しているが石をはさみ西側は砂を含んでいる。とくに断面に土器が現われている部分は焼骨，焼土を多量に含んでいる。石から西側の2a層下面には炭化物の層がある。4層も褐色土で砂を含み2a層に類似しているが連続しない。4層はI・Jグリッド部分の住居址上に広がっている。5層の茶褐色土は傾斜に沿って一定の厚みで堆積している。住居址の部分であるが住居址内外の茶褐色土は区別できなかった。　（椙田）

2．第Ⅰブロックの層位と遺物

A・Fグリッドは発掘部分では最も地形的に高い部分で埋立土も旧表土層も薄い。Fグリッド南側は表土層から直接5層の茶褐色土層になっている。2層の黒色土層はA・Fグリッド北側に分布しており，とくにGグリッド側に厚くなり堆積している。この黒色土層は攪乱を著しく受け，厚く堆積しているGグリッド側に攪乱を受けない部分が残されていた。黒色土の下は薄い魚骨層が広がりウニ層に続いている。魚骨層・ウニ層の上面のGグリッド寄りの部分から第5図1～3の土器，第11図1，3，6，10，12，20，第13図4の石器が出土している。土器はウニ層の傾斜に沿ってGグリッド側に傾いて出土した。

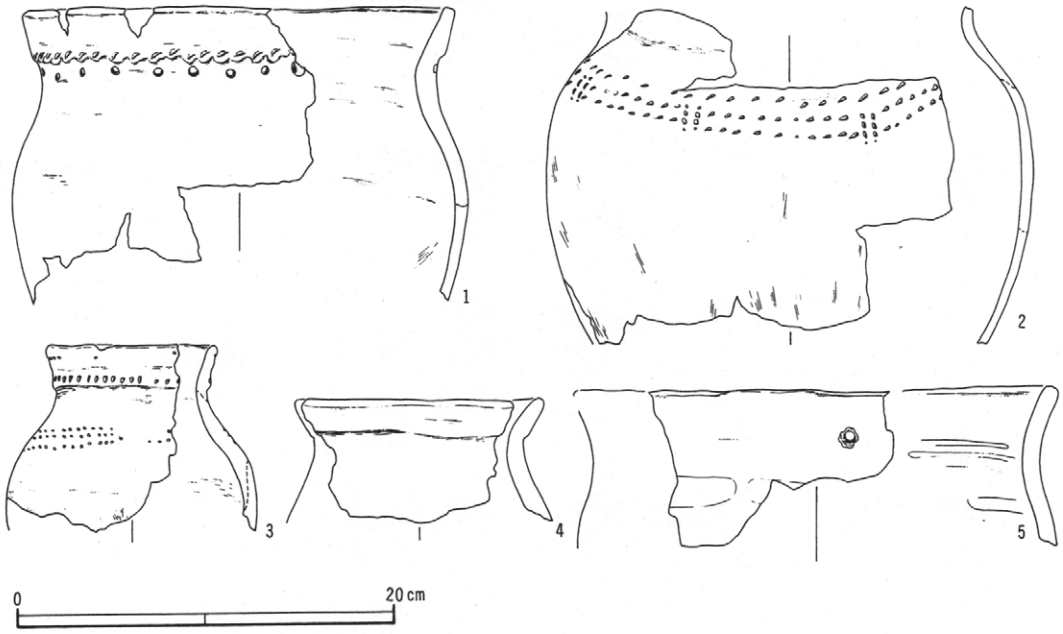
ウニ層はAグリッドとFグリッドの北東隅に分布しGグリッド側が薄く中央が20cm位の厚みをもちA・Fグリッドの壁部分では10cm位に厚みを減じる。この層の末端はGグリッドに島状に分布するウニ層に続くものと思われる。A・Fグリッドを中心に廃棄されたものと考えられる。ウニ層の下には薄い魚骨層があり，ウニ層より分布が広くFグリッドの中頃まで広がる。また断面でみられた焼土炭化物・粘土等の薄い互層は低いGグリッド寄りの部分だけに堆積していた。魚骨層は粉状になっていた。魚骨層の下は5層の茶褐色土になっており，この層の上面から遺物がまとまって出土した。第6図1・3・8・10・11の土器第14図3,5の骨角器が出土している。土器はAグリッドとFグリッド北側に集中して出土した。層の傾斜に沿って破片の状態で同じ面上には大きな火山岩も出ている。骨角器はFグリッド中央のGグリッド寄りに集中して見出された骨の中にまじって出土した。A・Fグリッドの骨角器はこの部分だけにしか出土していない。

5層の茶褐色土は炭化物・魚骨・骨片等を散慢に含んでいる。この層には著しく大きな火山岩が多数入りこんでおり遺物は石の間から多数出土した。火山岩の大部分は茶褐色土中にあるがA・Fグリッドの北東側の部分はローム層中から出ている。北東側以外にも所々にローム層中から突き出ている。ローム面はFグリッドの東側が高くなっている。

GグリッドもA・Fグリッドから連続した層になっている。5層の茶褐色土がGグリッドの北東端を中心にすり鉢状にくぼんでおり上部の層が傾斜して堆積している。2層の黒色土には柱穴の攪乱が多く入って一部は下層の魚骨の層中に及んでいる。黒色土中からは土器片・石器が出土したが，まとまって出土したものはなく散在した状態であった。黒色土は北側に向って徐々に厚みを増している。この層の下部は魚骨等を多く含んで茶色味を帯びている。3層は魚骨，ウニ・焼土・炭化物・粘土などが黒褐色土中に薄く互層になって入っている層である。これらの薄い層は広がる範囲が狭く連続していない。3層はグリッドの南・西側の5層の高くなった部分には広がらずすり鉢の低い部分にのみ堆積している。この層中には獣骨等大きな骨が多く含まれるがとくに注意するような出土状態はなく個々の骨が関連をもたずに出土している。また遺物も多く出土している。骨角器が目立ち第14図1～4・6，第15図2・6が出土している。石器は第11図11～13・16第12図1・6・16が出土している。土器も出土しているが破片が多くまとまったものはない。土器片はA・Fグリッドの3層から出土した土器に接合している。5層の茶褐色土層はグリッドの北東隅が最も薄く周辺に向って厚くなる。層中からは土器片・石器が多く出土した。土器は第7図1が器形のはっきりしたものであるが上層出土の破片も接合している。他は破片でオホーツク土器・ススヤ式土器，続縄文・縄文土器等が混じっている。石器が多く第11図10・14・17～22・24～26，第12図2・4・5・7・9～15・17・19～23，第13図2～4，6～8・10が出土している。

土器（第5～7図）

第5図1は口縁から胴にかけて$\frac{1}{3}$残存している。口縁が外反し肩部に最大幅をもつ。口縁部は段がついている。文様は段部分に爪先でつまんだ指圧式浮文があり，段下に円形刺突がめぐる。



第5図　第Ⅰブロック出土土器実測図

口縁部は横位のナデ，以下は不統一に行なわれている。色調は燈褐色。胎土は細かな砂粒を多く含んでいる。

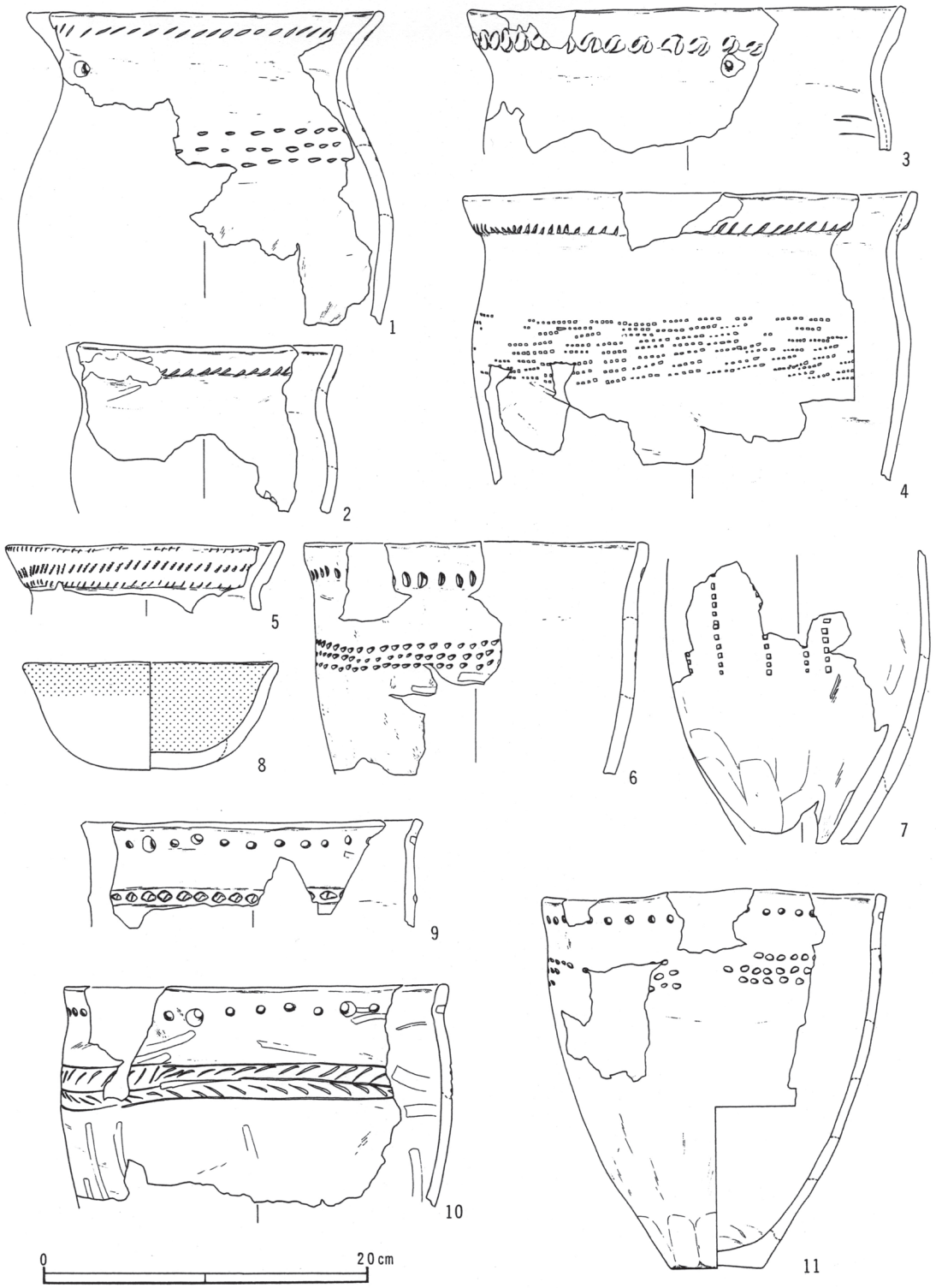
2は胴部$\frac{1}{3}$ほど残存している。胴は丸く張り肩部に文様をもっている。文様は三角形の浅い列点状の刺突が3列めぐり，下段2列を6単位に分けて櫛歯状の型押文が入る。型押文は4個2列並んである。外面は肩部が横位のナデ，以下縦位のナデとなっている。内面は指頭によるナデが行なわれている。肩部まで炭化物が付着している。色調は黒色。胎土は精選された細かな砂粒を含んでいる。

3は小型の壺で胴上半$\frac{1}{3}$が残存している。口縁が少し外反し胴が大きく張っている。口縁の上端と下端に刻文に近い刺突が行なわれ，肩部には3段に円形の刺突が行なわれている。全体に炭化物が付着して一部文様が埋められている。色調は褐色。胎土は細かな砂粒を含んでいる。

4は口縁部破片。口縁が厚く段をもち文様はない。

5は口縁部破片。口縁は外反している。無文で外面には指頭によるナデ，内面は横位の荒いナデが行なわれている。全体につくりが粗雑である。器壁は厚い。色調は黒灰色。胎土は細かな砂粒を含んでいる。

第6図1は口縁から胴部にかけて$\frac{1}{3}$残存している。口縁が大きく外反し胴部が膨らむ。口縁と胴部の径はほぼ同じである。口縁上部と肩に文様が施されている。口縁部はヘラ状工具による鋭い刻文がめぐる。肩部は丸棒工具により三段の列点が施されている。炭化物が口縁部内面と外面の



第6図　第1ブロック出土土器実測図

肩に付着している。口縁部には横位のナデ，以下は不統一に行なわれている。色調は燈褐色。胎土は細かな砂粒を多く含んでいる。

2は口縁から胴部の破片。口縁は外側に開き先端が少し内曲する。最大幅は口縁と胴部にある。口縁の下部が若干肥厚しており，この部分にヘラ状工具による鋭い刻文が施されている。口縁の内面に炭化物が付着している。色調は黒色。胎土は細かな砂粒を多く含む。

3は口縁部の大形破片。口縁は外反しゆるやかなカーブで肩部へ連続している。口縁下に指頭により浮文状につまみ出された文様が施されている。口縁内側に炭化物が付着している。外面は横位のナデ，内面は横位のヘラナデが施されている。色調は燈褐色。胎土は細かな砂粒を多く含んでいる。

4は胴上半が残存している。段をもつに短い口縁が外反している。肩部へは直線的に続いている。口縁の段部分に刻文が施され，肩部には櫛歯状の型押文が横位に幅広く押されている。口縁内面に炭化物が付着している。口縁外面には横方向のナデ，内面はヘラナデが施されている。

5は口縁部が半分残っている。口縁は外に開き，段をもつ。文様は口唇外側と段部分にヘラ状工具による刻文が施されている。口縁の中頃には櫛歯状の型押文が押されている。口縁内側には炭化物が付着している。色調は黄褐色。胎土は細かな砂粒を含んでいる。

6は口縁部から胴部まで½残存している。口縁部が少し外側に開きなめらかに胴部へ移行している。文様は口縁部と胴上半部に施文されている。口縁部は爪先で刺して刻文状に施文している。胴部は先端の尖った工具で3段に刺突している。口縁部内面に炭化物が付着している。色調は灰褐色。胎土は大粒の砂粒を多く含んでいる。

7は胴部が半分残存している。底部は小さなもののようである。文様は胴部に列点の型押文が縦に施文されている。内面に炭化物が付着している。色調は灰黒色。胎土は細かな砂粒を多く含む。

8は埦形土器。ほぼ完形。口縁端が外側に反り底部へは丸くつづく。口縁部外面と内面はナデが施されている。底部はヘラナデが行なわれ口縁・底部間は指頭による整形となっている。外面は口縁部，内面は全面に朱が塗られている。色調は明褐色。胎土は細かな砂粒を多く含んでいる。

9は口縁が⅓ほど残存している。口縁端が外側に折られ以下は垂直になっている。口縁下の曲折部分に連続した円形刺突が施される。口縁下部には幅の広い隆線がめぐる。隆線上は爪先で等間隔につぶされている。口縁内面に炭化物が付着している。色調は灰褐色と黒色。胎土は細かな砂粒を多く含む。

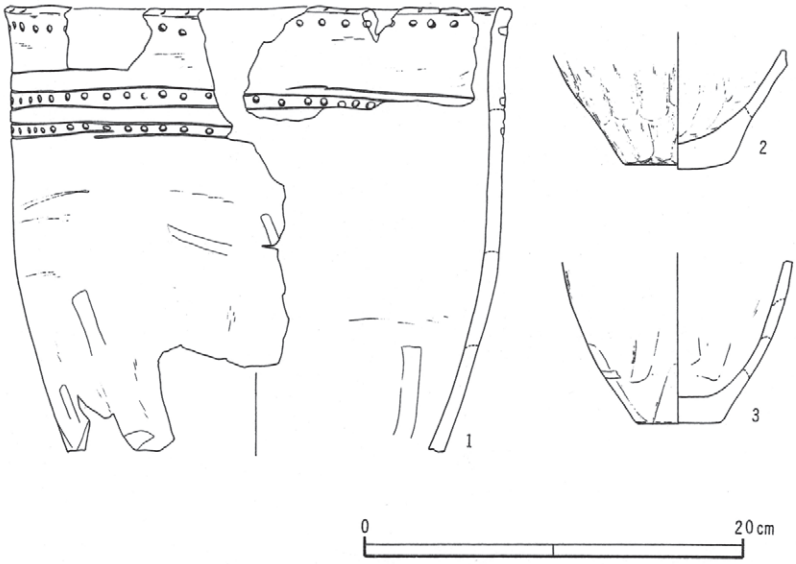
10は口縁から胴上半にかけて⅓ほど残存している。口縁下が若干くびれ口縁・胴の径はほとんど変らない甕形土器。文様は口縁下のくびれ部分に円形刺突が行なわれている。径5㎜ほどの棒状のもので施文し内面に瘤をもっている。肩にあたる部分に沈線3本をめぐらし，沈線間に刻文を綾杉状に施文している。沈線は細く浅い。刻文はヘラ状工具により深くきざまれている。口縁部の内面に炭化物が付着している。色調は褐色。胎土は精選され砂粒を多く含んでいる。

11は口縁から底部まで半分残存している。口縁下が少しくびれるだけでほぼ砲弾形をしている。

文様は口縁下に浅い円形刺突が施され裏面に瘤が出されている。下部には不整な円形の刺突が3段に施されている。口縁下と下部の刺突は異質なもので下部のものは浅く押した程度である。炭化物が口縁の内外面に付着し下部の刺突は所々埋没している。色調は灰褐色。胎土は細かな砂粒を含んでいる。

第7図1は口縁部から胴部まで½残存している。器形は口縁端が少し外に折れ，全体として砲弾形を呈する。文様は口唇部・口縁部・胴上部に施文されている。口唇部はキザミが入れられている。口縁部は細い竹管による円形刺突が施文され，裏面に瘤が残っている。胴上部は4本の沈線と沈線間に竹管の浅い刺突の組合った文様になっている。口縁内外面ともに炭化物が付着している。色調は灰褐色・胎土は精選された細かな砂粒を含んでいる。

2・3は底部である。



第7図　第Ⅰブロック出土土器実測図

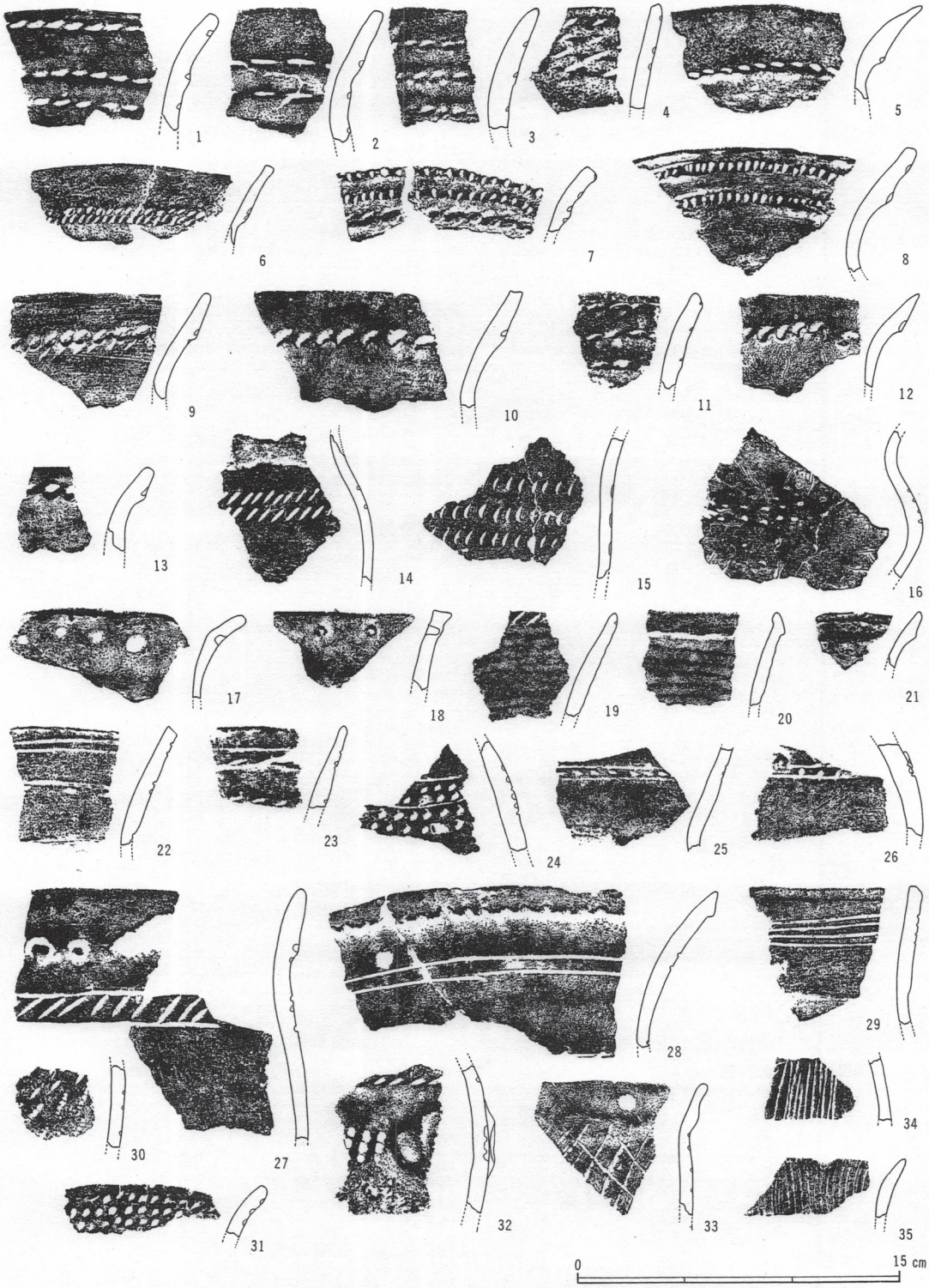
土器片拓本（第8～10図）

第8図1～8，14～16は刻文の施されたものである。1～5は工具を押しつけた施文方法で幅の広い大きな刻文となっている。4は斜めに施文されているが他は横位に施文されている。施文部分はいずれも少し隆起した部分に行なわれている。4が外傾し他は外反した口縁部である。

6～8は隆起部分に細かくキザミを入れている。いずれも口縁部で外反している。8はとくに外反が著しい。

14～16は肩部に刻文が施文されたものである。14は斜めの鋭い刻文，15は爪先により三日月形をしている。16は刻文ではなく列点であるがこの仲間に含めた。

9～13は爪先により刻みをつけつつ一方に粘土を隆起させ浮文状にしたものである。いずれも口縁部で9～11は外傾し，12・13は外反している。



第8図　第Ⅰブロック出土土器片拓本

17は大きく外反する口縁下に円形刺突が施されている。18は外傾する口縁部裏面から刺突が施され外面に瘤が出ている。

19～21は摩擦式浮文である。19は口縁端にキザミをもつ。21は一条しか浮文がない。

22～27は沈線に刻文が加わった文様である。22・23は刻文が大きく横位で沈線に沿って施文されている。24～26は沈線間に列点を入れている。26は円形の貼付がつく。27は沈線間に斜めの大まかな刻文を入れている。太い竹管により円形の刺突を口縁下にもっている。

28・29は横位にめぐらされた沈線をもつものである。

30は型押文。5つ並ぶ列点を一単位とし斜めに押されている。

31は列点文。32は刻文，型押文，貼付文が組合せになっている。33は沈線による格子目文が施文されている。

34・35は擦文土器。34は縦位の沈線と斜めの沈線が施文されている。35は竹管状のもので行なわれた整形痕が著しく残っている。

第9図1～7は刻文土器である。1は「く」の字に曲がる口縁部である。文様は口縁部に棒状工具を押しつけた刻文があり，肩部に細長い斜めの刻文が施文されている。2・4も1の口縁部と同様の刻文が施されている。3は大きく外反する口縁部で口縁端に三角形の刻文が施文されている。5・7はヘラ状工具による鋭い刻文が施文されている。6は口縁端が鋭い刻文で口縁下が棒状工具による丸味をもった刻文となっている。

8～12は指頭により粘土を隆起線状につまみ出した指圧式浮文である。8・9は刻文に似て指先で粘土を一方に押しつけている。8は口縁が少し外反し胴部が大きく張り出す器形である。肩部にはヘラ状工具による鋭い刻文が2段にわたり施文されている。10～12は2本の指で粘土をつまむようにしている。

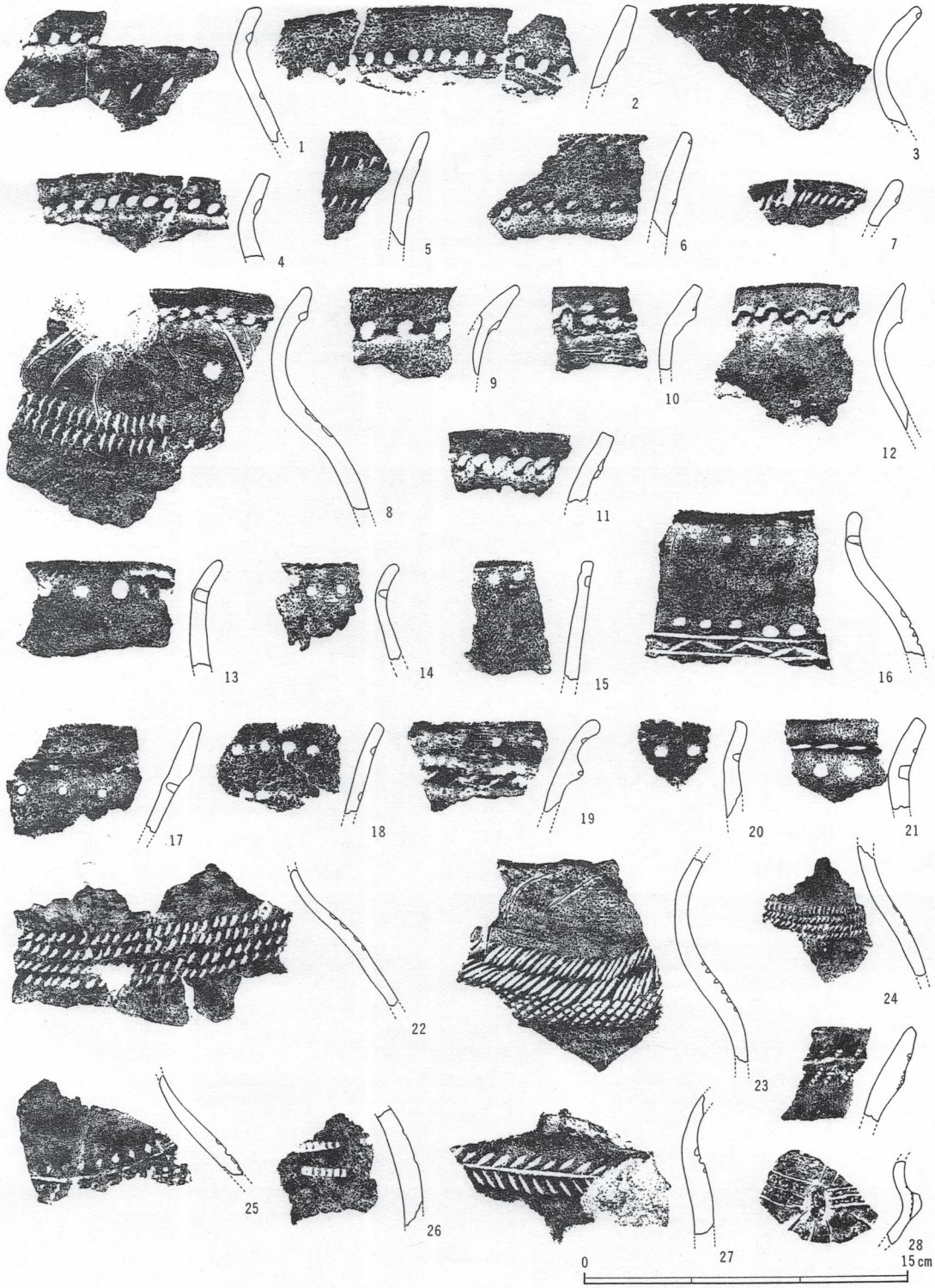
13～21は円形刺突を有する一群である。13～15・17・20は口縁下に円形刺突のみをもつものである。13・14は外反した口縁の屈曲部に刺突を行っている。13は内面に瘤が残る。15は外傾した口縁で内面に瘤が残る。17は刺突の上に肥厚する部分がある。

16・18・19・21は円形刺突に他の文様が付随するものである。16は肩部に浅い円形の列点と平行沈線に「ハ」の字状に施文された刻文をもっている。18は刺突が2段に施文されている。刺突は浅い。19は円形刺突の下に刻文が施された隆起線をもっている。21は横位の刻文が施文されている。

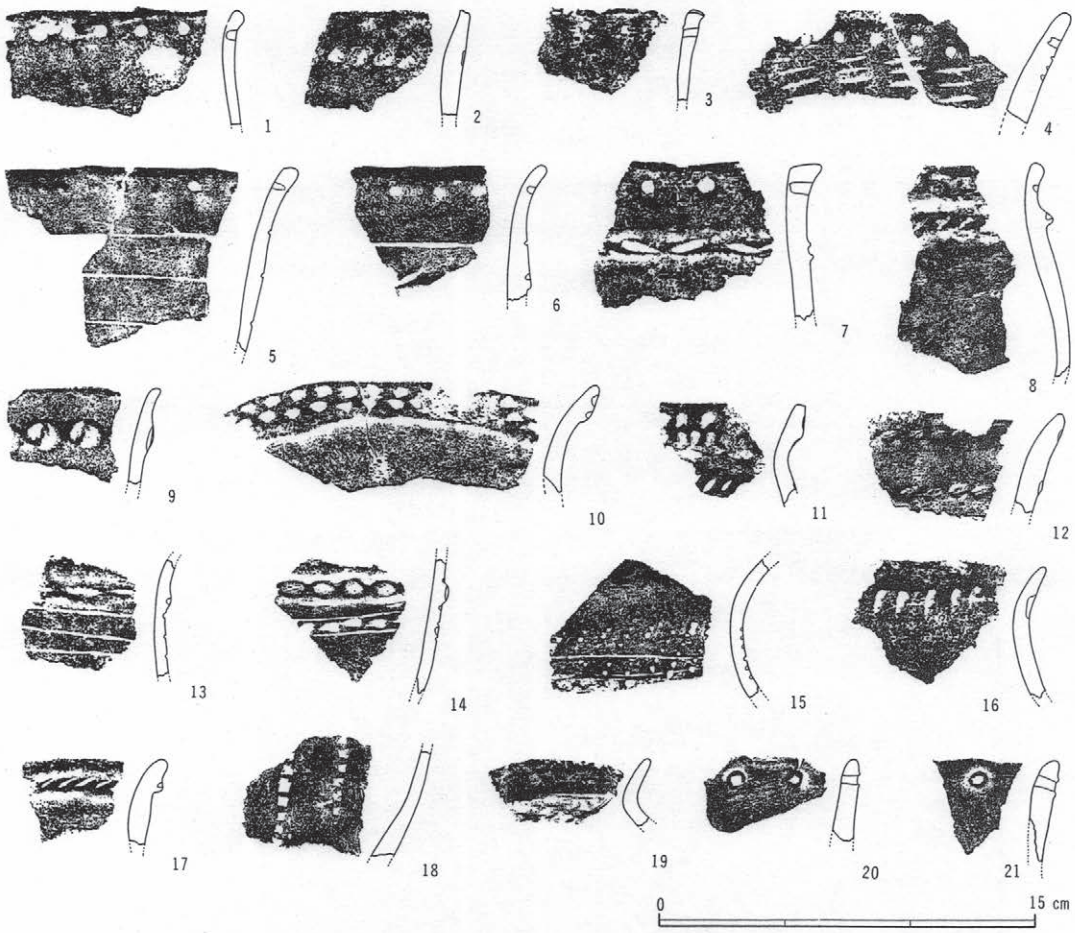
22～27は肩部の破片である。22は爪先による刻文を4段に施している。23はヘラ状工具による細長い刻文を斜めに2段施し，列点の型押文を下に施文している。24は細かな刻文を4段施文している。25は沈線と列点が組み合せになっている。26は四角い列点の型押文。27は沈線の上下にヘラ状工具による刻文を施文している。

28は口縁の隆起部分に列点の型押文が施文されている。29は楕円の隆起と平行沈線間に列点を施したものである。

第10図1～8は円形刺突を有するものである。1～3は円形刺突の他に文様をもたないもの，



第９図　第Ｉブロック出土土器片拓本



第10図　第Ⅰブロック出土土器片拓本

4～8は文様をもつものである。2は刺突が非常に浅く円形刺突の仲間からはずれるかもしれない。3は口唇部に竹管で押さえたようなキザミが入る。円形刺突はきわめて細い。4はヘラ状工具による刻文で横位に細長く施文されている。5は刺突が内面からで外面に瘤が突き出ている。幅の広い平行沈線が3本施文されている。6は沈線と細長い刻文の組合せ。7は隆起線上に棒状工具を横位に押しつけ施文している。8は隆起線上に斜めの刻文を施している。

9・11・12は指圧式浮文で9は指頭で「の」の字状の隆起部にしている。11は指先で突くように施文している。12は指先で斜めに施文し，下部に隆起部をもつ。

10は外反した口縁で口縁部に段をもつ。段部分に列点が施文されている。

13～15は沈線をもつ一群である。13は平行沈線と隆起上の横位の刻文が組み合わさっている。14は隆起を指頭で押しつぶした文様と平行沈線間に列点を施す文様からなる。15は平行沈線と細かな列点をもつ。

16は外反する口縁部に縦の刻文をもつ。

17は隆起線上に刻文をもつ文様。

18は四角い列点の型押文。19は無文。

20・21は無文で口縁に内面から刺突が行なわれ外面に瘤をもつ。

石器（第11～13図）

第11図1～9は石鏃。1・2・3・5・6は細かく丁寧な剥離で薄身に仕上げられている。比べて4・7・9は粗雑な剥離である。4は幅広な形状で身が厚い。7は茎がつく。8は表面は先端に裏面は周縁全体に剥離を加え形を整えている。表裏面に第一次剥離面を多く残している。

10～16は石鏃より大形で銛先として用いられたと考えられるもの。11，12はほぼ同形である。基部は無茎で若干えぐりが入る。12は基部から3条の剥離が最後に入れられている。装着のためと考えられる。13は基部のみ。15は先端部分の剥離面・稜が磨滅している。14は荒い剥離で調整されている。全体に剥離の稜が磨滅し，とくに基部が著しい。銛先鏃ではないと考えられる。16は先端を欠損している。基部端に少しえぐりが入り12と同様の基部をもっている。10は基部を欠損している。

17は先の尖ったナイフ。全体の$\frac{2}{3}$に細かな剥離が加えられ刃部となっている。残りは荒い剥離のまま で基部を形づくっている。

18は拇指状のスクレイパー。一面に自然面を残した一次剥片を用い，打点部分を除いた三方に剥離を加えている。

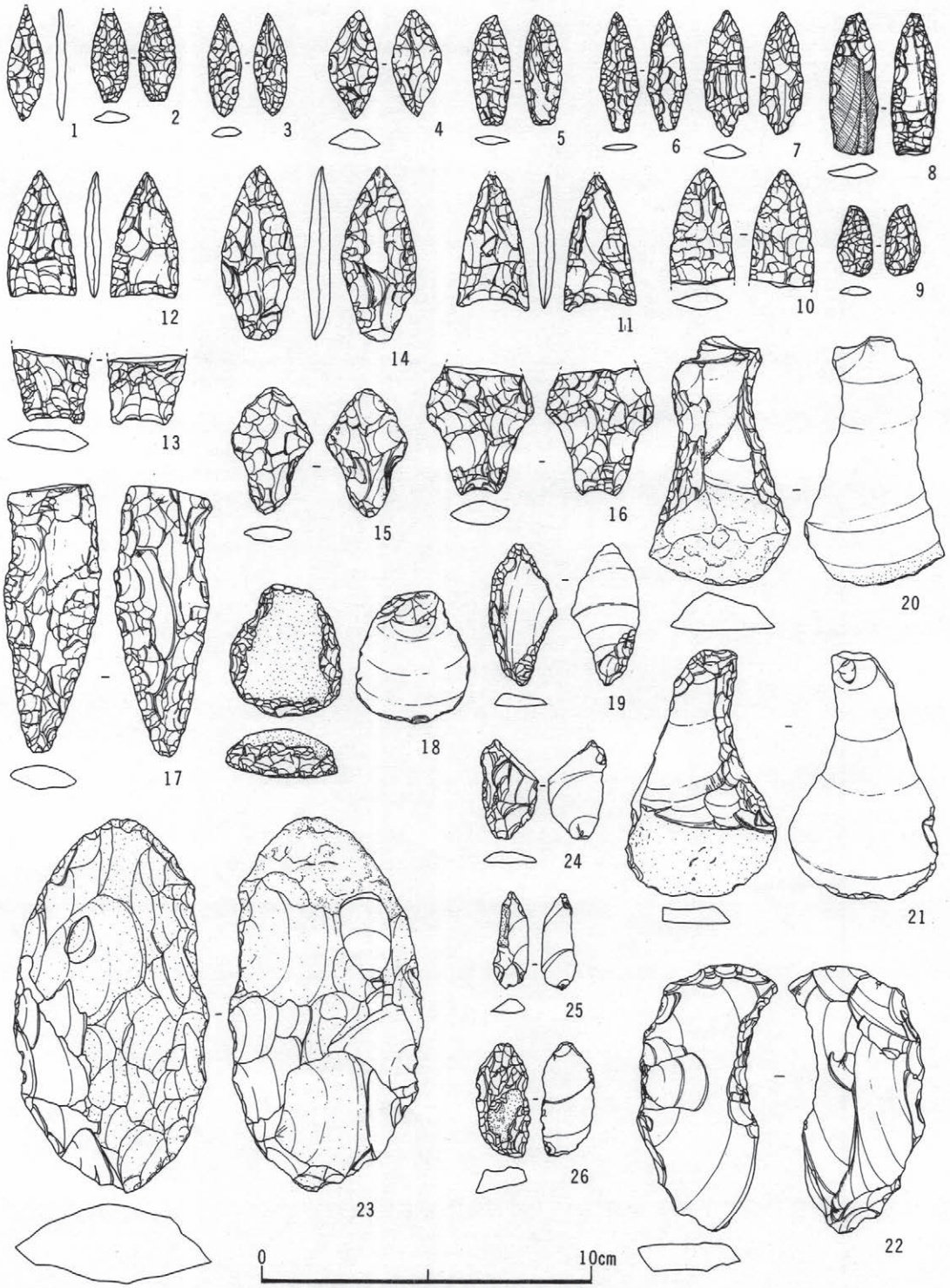
19～22はサイドスクレイパー。19は薄い剥片の片面に周囲から調整を加えている。（20・22は背面側のみ剥離を加えている。）20～22は内弯した刃部をもつサイドスクレイパーである。いずれも片面のみ調整が加えられている。20・21は背面側，22は主剥離面側である。20は両サイドに刃部をもっている。

23は周辺から大まかな剥離が加えられ，握斧状になっている。全体にタールが付着している。24～26はメノウ製で，他のものとは時期が異るものであろう。

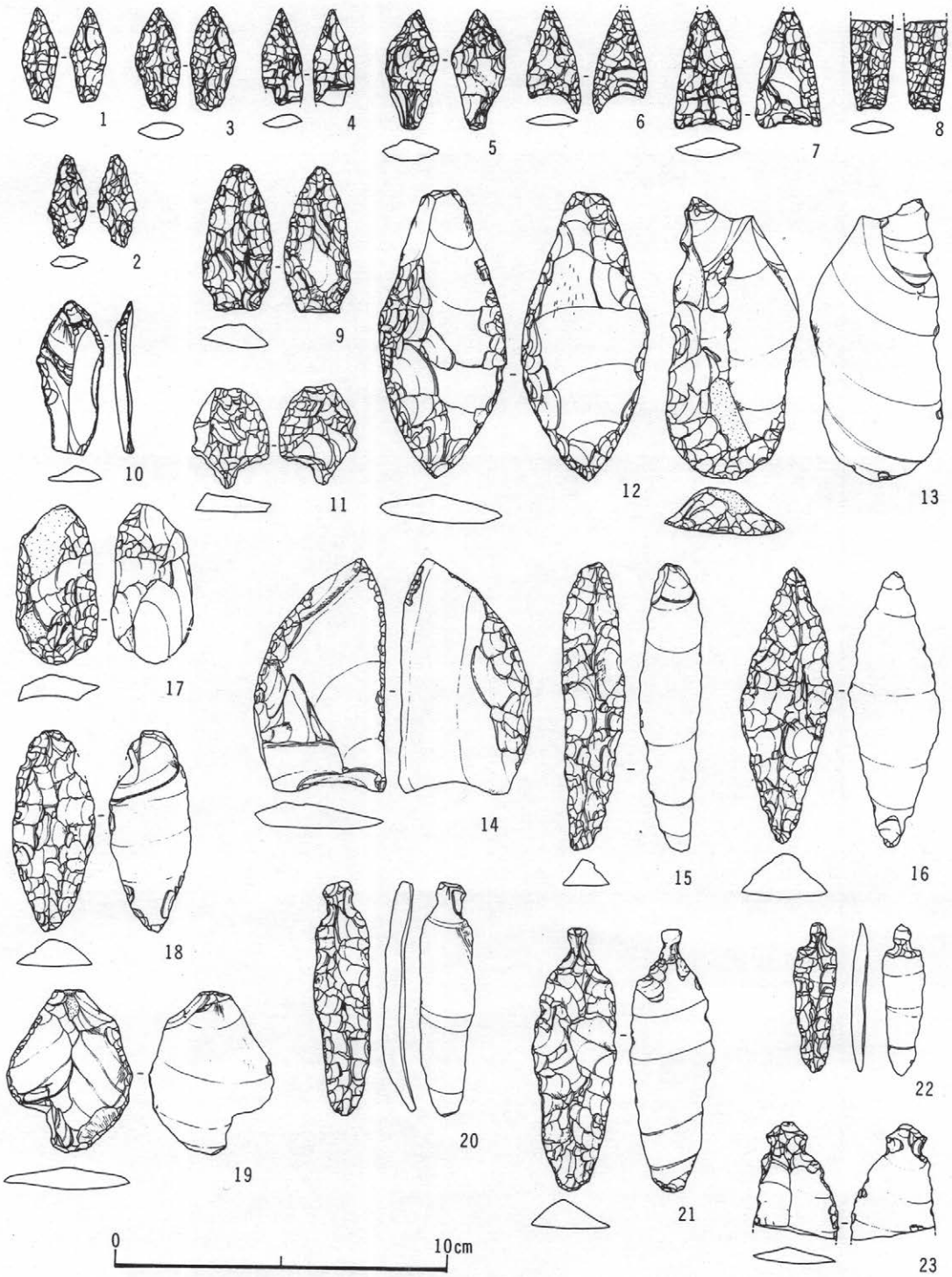
第12図1～6・8は石鏃。1・4・6・8は細かな丁寧な剥離が加えられ身の薄い仕上げになっている。2・3・5は荒い剥離が加えられている。5は先端だけとくに丁寧な剥離が加えられている。6は片方の脚が長い形状になっている。

7・9は銛先鏃。7は二等辺三角形の形状。9は基部欠損。先端が丸味をもち，縦断面では反りがありあるいはナイフの機能を持っていたことも考えられる。

10～12・14～23はナイフ的機能を持つものと考えられる。10は薄い剥片の周縁に細かな剥離を加えている。11は片側が欠損している。欠損していない側ではえぐりこみがある。12は先端が鋭く尖がり槍状を呈する。調整の剥離は周縁に限られ基部は片面のみである。15・16・18は片面に調整を加えたもので断面が三角形を呈する。18は木の葉状で，15は細長く，16は両端が尖り菱形をしている。15は下端部に細長い剥離が加えられておりエンドスクレイパーとして用いられた可能性もある。14は薄い剥片を利用したもので直線部に細かな剥離が加えられ，反対側は大まかな



第11図　第1ブロック出土石器実測図



第12図　第Ⅰブロック出土石器実測図

剝離で薄くしている。20～23は所謂つまみ付ナイフでいずれも片面加工である。22は小形である。

第13図２～５は磨製石斧である。２～４は小形のもので５は大形のものである。２は礫の一角を用いている。大きな剝離で形を整えた後磨いている。刃は直刃であるが表面からの磨き方が著しい。３は片面に礫の自然面を残した剝片を用いている。やはり大まかな剝離で形を整えた後磨いている。４は小円礫を用いている。大まかな剝離と磨きで形を整えている。刃は直刃。刃こぼれが片側のみにみられる。全体に磨かれている。刃部は大きく剝がれているが,剝がれた後も使用したらしく剝落面が丸くなっている。

６は石錘。長軸の両端を打ち欠いている。

７は打製石斧か。周囲から剝離を行い形を整えている。

８・９は砥石。８は２面に砥いだ痕がみられる。ともに中央が浅くくぼんでいる。９は全面に砥いだ痕跡がみられる。面的に砥いだ跡，断面三角形の鋭い砥ぎ痕，丸い砥ぎ痕等がみられる。

10は截切用の石鋸（ノコギリ）か，両面磨かれ，角の部分がとくに著しく磨かれている。

２層出土遺物第11図　２・５・７・８，

３層出土遺物第11図　１・３・４・６・９～12・20，　第12図２・４・９，第13図　４～６

５層出土遺物第11図13・16～19・21～26，　第12図１・３・５～８・10～23，　第13図１・３・７・８・10

第13図９はＦグリッド攪乱層出土。

骨角器（第14～15図）

第14図１は刺突具。先端を斜めに長く切っている。火熱を受けたらしくさけ目が入り屈曲している。

２は骨斧。幅広の先端をもち，柄にはつくり出しがある。荒い整形痕を残している。

３は骨斧。刃部に向って広がる大きな先端をもつ。柄の部分は段がつき細くなり，つくり出しがある。

４は骨斧か。大きく欠損しているが先端部は薄くなり磨滅している。

５は棒状のもの。一端は欠損している。両側辺に加工痕がある。

６はオットセイの肩胛骨。内側に削った痕が残されている。

７は棒状のもので先端部が磨滅している。

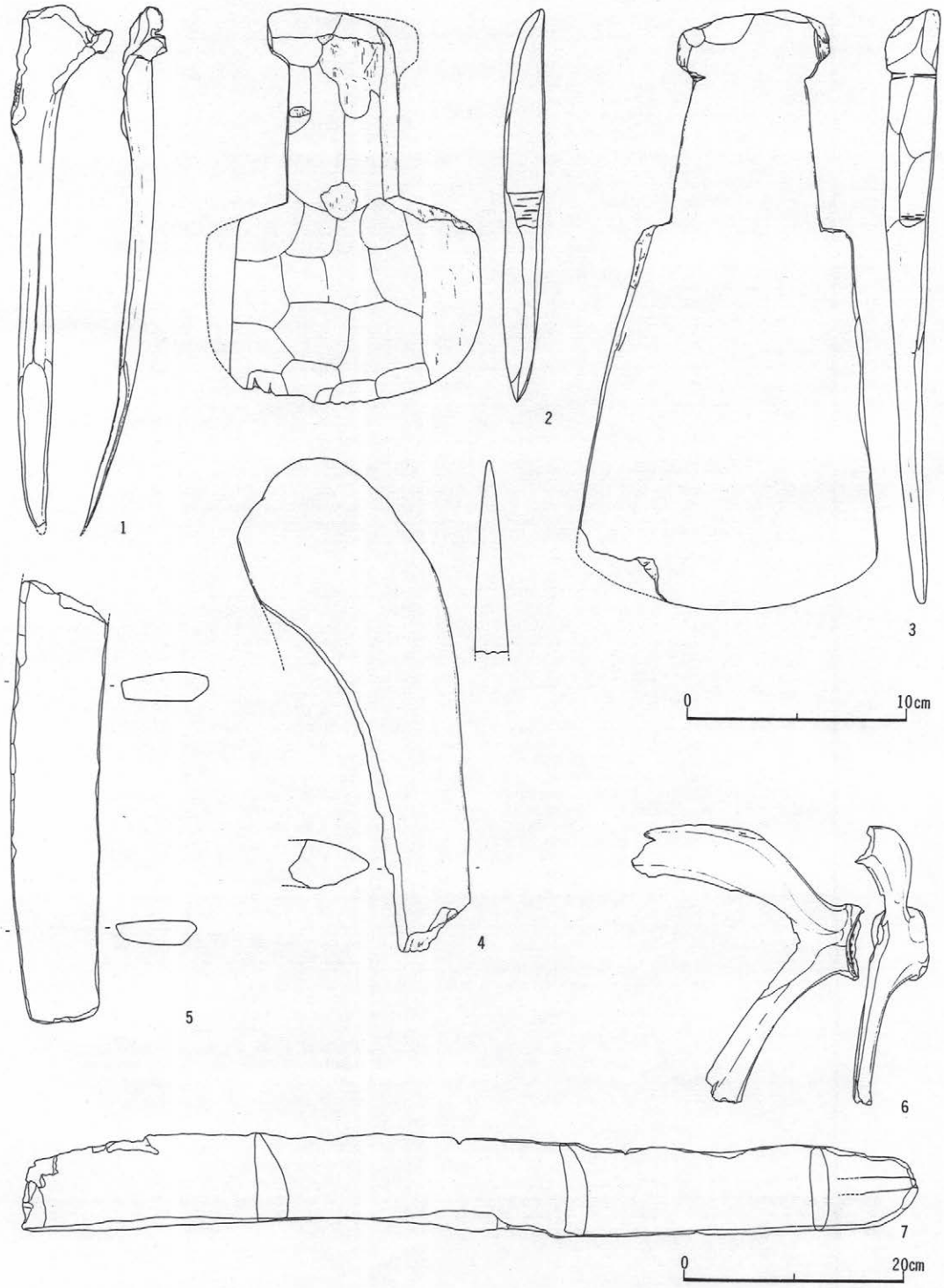
第15図１は銛頭の未成品である。全体に荒削りの痕が残っており，完成品であれば穿がたれる筈の孔がない。先端は切り込みが入れられ石器が装着できるようになっている。先端と逆鈎部分は孔を穿ってから切りこみを入れたように末端部が丸い。

２は尖頭具。基部の一面が平担に削られ,横位の整形痕を残し装着部としている。装着面を垂直にすると外側に反っている。

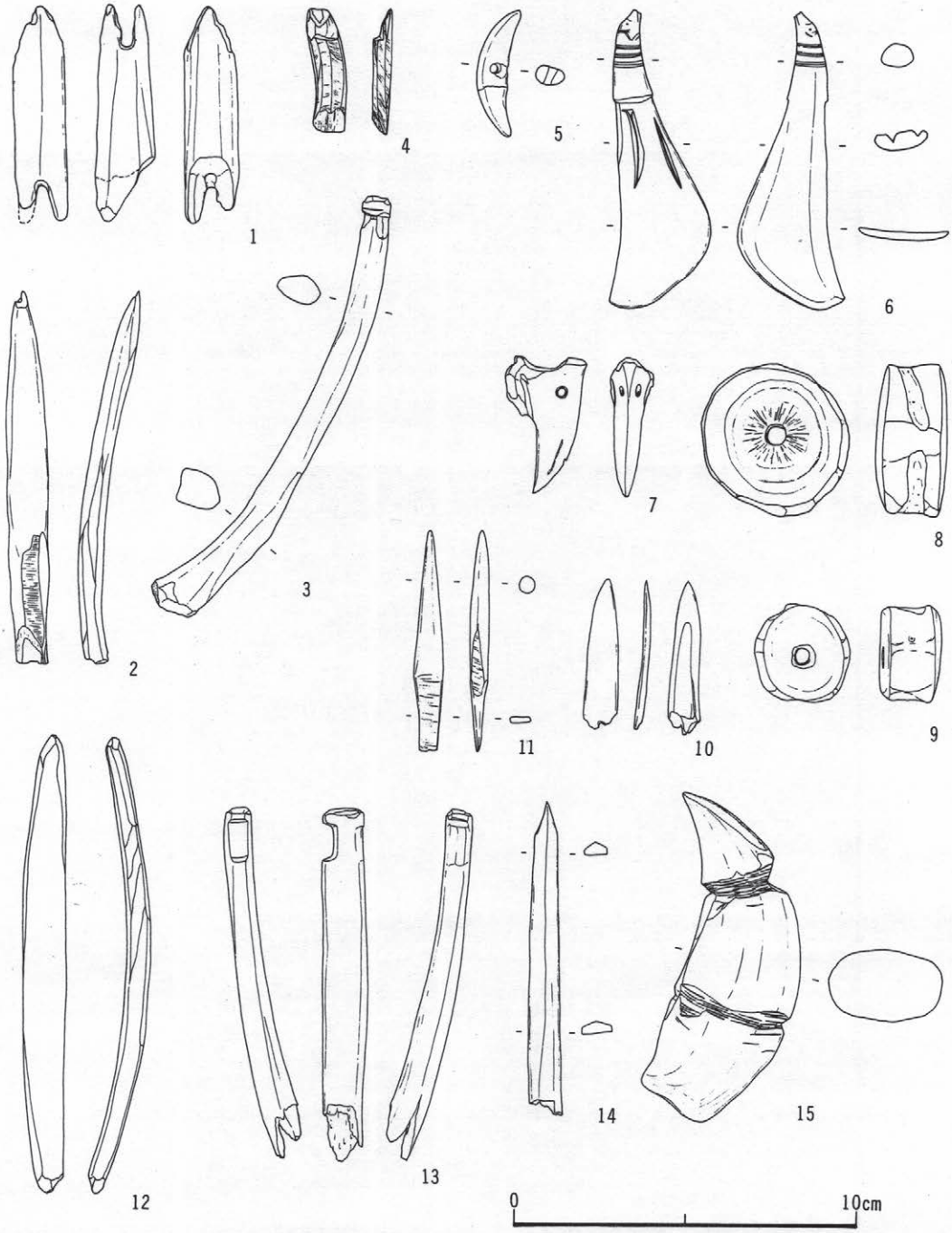
３は釣針。棒状の一端にえぐり込みを入れている。

４は多面に磨かれ，先端は一方向から切ったように磨かれ，のみ状になっている。

第13図　第１ブロック（１～10）・第２ブロック（11～13）出土石器実測図



第14図　第Ⅰブロック出土骨角器実測図



第15図　第1ブロック（1～6）・第2ブロック（7～15）出土骨角器実測図

5は犬歯製の装身具。中央に一方向からの穴が穿がたれている。

6はスプーンか。先端部は断面が丸く動物の頭部が刻線で描かれている。ヘラ部分は素材の外側を残して扁平に仕上げられている。ヘラの内側基部には2本の切り込みが入れられている。

第20図4はGグリッド魚骨層出土の海獣骨製骨器である。磨かれておらず，形もよくないが，ヘラ状の道具である。

第1ブロック出土の骨角器は，攪乱層から出土した第15図1・2を除いて，すべて3層中から出土したものである。（椙田）

3．第2ブロックの層位と遺物

N・Oグリッドでは層の上部が基礎のための溝で攪乱され，落ちこみ部分の下底と発掘区の壁を垂直にした50cmほどの部分が発掘の対象となった。落ちこみはN・Oグリッドに円孤状に広がり発掘区外の南・西側へのびている。2h層・2i層の貝層・魚骨層は南側断面部分で20cmの厚みをもつが西側断面でわかる通り壁ぎわの狭い範囲に限られている。これらの層中からは遺物の出土が少ない。2l層の黒褐色土が壁ぎわで50cmほどの厚みをもちほとんどの遺物はこの層から出土した。2l層は湿気の多い土で魚骨が多く含まれていた。2l層の下は焼土・炭化物の層で落ちこみの傾斜部分に厚く堆積し，平担な部分では薄く焼土・炭化物が互層となっていた。第16図2～4は発掘区の隅のこの層中からまとまって発見された。落ちこみ自体は立ちあがりは漸移的であり，底面も凹凸があり住居跡のような遺構ではない。しかし，自然の力により茶褐色土が掘られる要因は考えられず人為的なものと見ている。

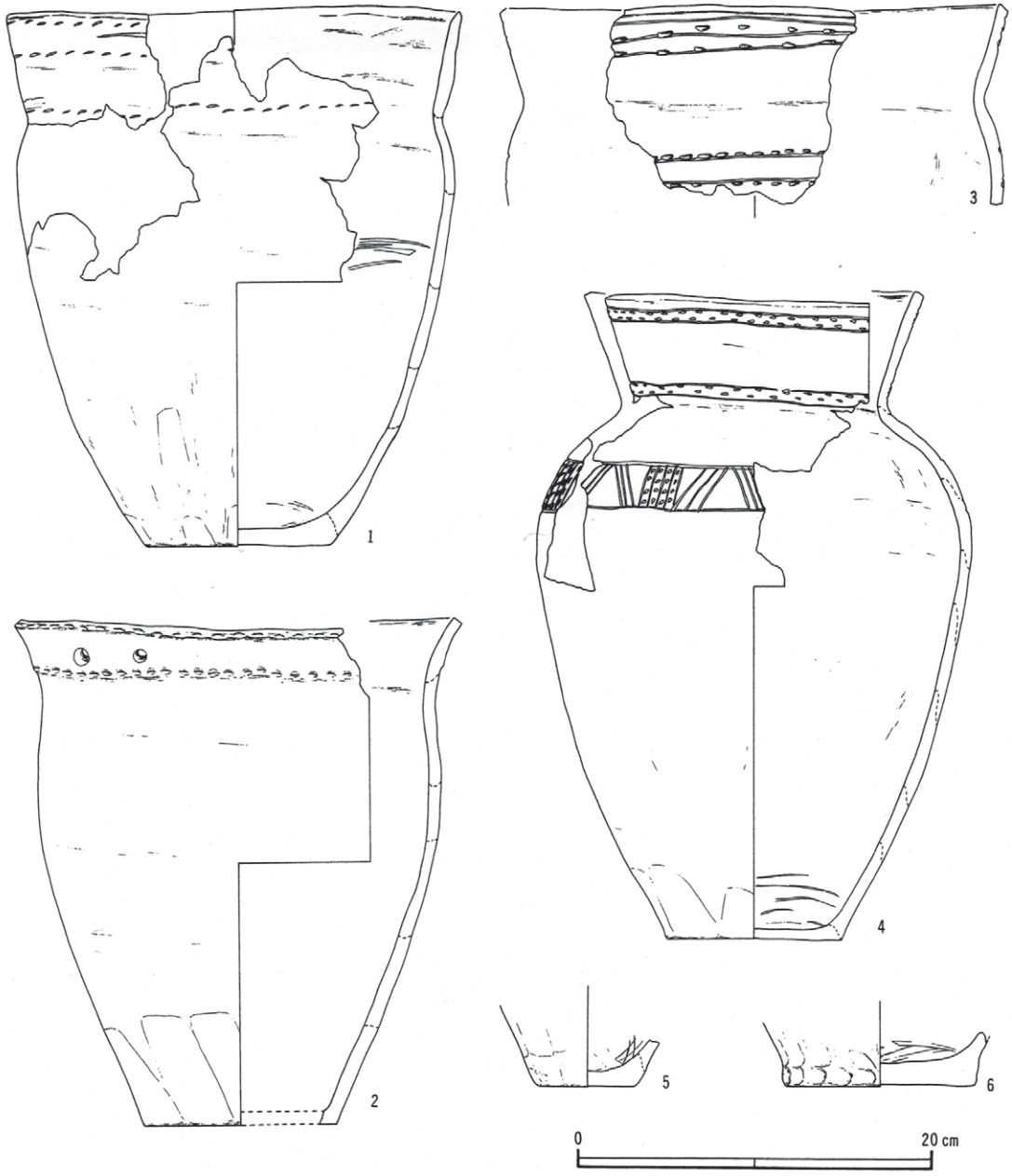
土器（第16・17図）

第16図1　最大幅を口縁部・肩部にもつ甕形土器。頸部が少しくびれ口縁は外に開いている。肩から底部へは少しふくらみをもって移行している。口縁上端，中位・頸部に刻文がめぐっている。刻文を施した後整形が行なわれ刻文はつぶれている。表裏面ともにヘラナデが行なわれた後口縁部にヘラミガキ，底部にはヘラケズリが施されている。色調は胴上半が黒褐色，下半が燈褐色となっている。胎土は細かな砂粒を多く含んでいる。

2は最大幅を口縁部にもつ。口縁は外反し胴上半がはり，直線的に底部へ移行する。口唇・口縁中位に刻文が施されている。口縁下の部分は段をもち，段の上に文様が施されている。刻文の上部には粘土が瘤状に残っている。表裏面ともナデが加えられ，表面の底部付近はヘラケズリが行なわれている。色調は黒色・灰黒色・胎土は細かな砂粒を多く含む。

3は口縁部破片・口縁は外に開き丸い肩をもつ。口縁の上部と肩部に文様をもっている。口縁部分は三条の沈線と沈線間に列点，肩部は2条の沈線の外側に列点がつけられている。沈線の断面は丸く列点は棒状工具の先端を押しつけたものである。口縁上部と肩部に炭化物が付着している。色調は灰黒色，胎土は細かな砂粒を含んでいる。

4は最大幅を肩部にもつ壺形土器。口縁は外に開き頸部がくびれ肩部は大きくはり出している。



第16図　第２ブロック出土土器実測図

底部へは少しふくらみを持ちながら移行する。口縁部の上端・下端および肩部に文様がみられる。口縁上・下端の文様は２条の沈線と沈線間に２列の列点の組合せとなっている。肩部は幅広い２条の沈線間に３本の沈線を組にした「ハ」の字間に縦に４本の沈線をひき，間に列点を入れた文様が充塡している。沈線は細く鋭い。列点は丸棒状のもので斜めに突いている。器壁の内外面ともナデが行なわれている。底部にはヘラケズリが見られる。ナデは施文後に行なわれている。

色調は灰褐色。胎土は細かな砂粒を多く含んでいる。

5・6は底部破片。

第18図3は小型の手づくね土器で上半を失っている。頸部には隆起線が一条めぐり，隆起線上にはヘラによるキザミがつけられている。色調は黒色。胎土は細かな砂粒を含んでいる。

第17図1～3は刻文の施された土器片で刻文の上・下端一方に粘土瘤を残すもの。1は口縁に2段，2は口縁の屈折部，3は肩部分に施文されている。

4は摩擦式浮文。口縁上端に刺突がある。

5は円形刺突が口縁部にある。

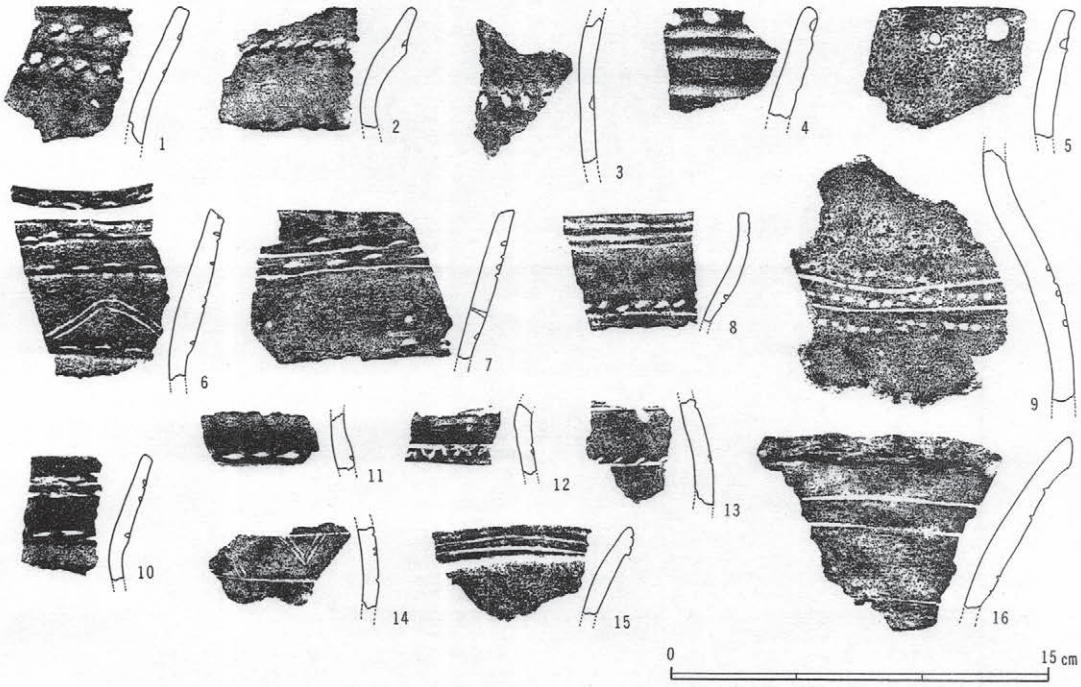
6～13は沈線と刻文が組合わさった土器である。6は摩擦式浮文状の微隆起の上に横に長い刻文が，3段施され刻文間に波状の平行沈線が入れられている。口唇部にも刻文が施されている。7は口縁下部に細い貫通孔列がある。8は内弯した口縁部，9は器壁が厚い。沈線と円形の列点の組み合せとなっている。12・13は沈線と沈線に接する刻文をもっている。

14は二本の沈線上下から平行沈線による三角形が交互に施文されている。

15は外反する口縁部。口縁上端の肥厚部に沈線をもつ。

16は沈線のみ。

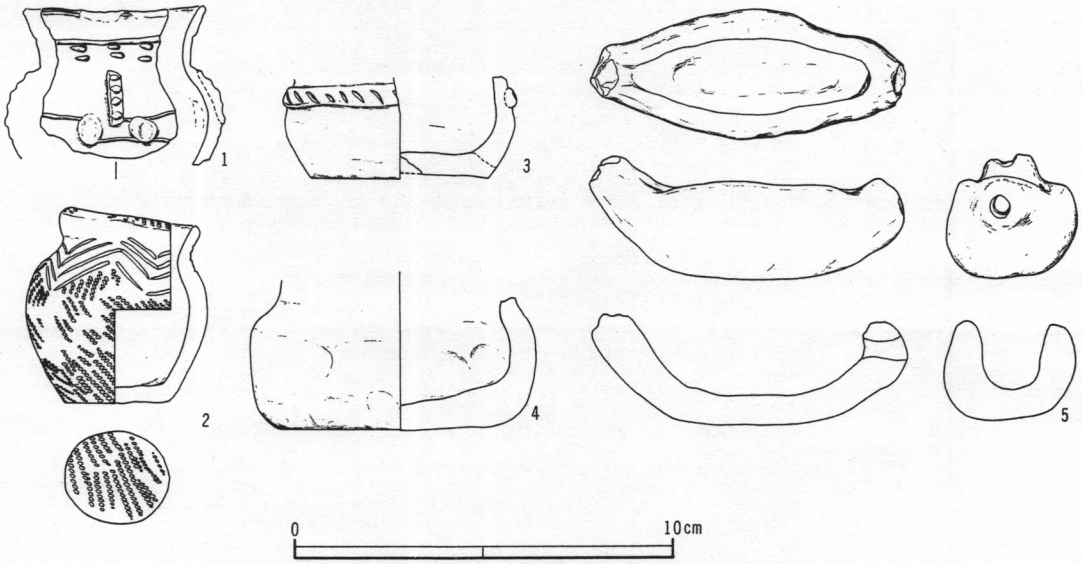
以上の遺物はすべて21層黒褐色土から出土したものである。



第17図　第2ブロック出土土器片拓本

土製品（第18図）

第18図5は所謂舟形土製品。横断面「U」字形を呈し，長軸の両端がつままれたように高くなっている。端の高さに差があり低い方に貫通孔が穿がたれている。両端は少し削られたように欠損している。



第18図　第2・第3ブロック出土小型土器・土製品実測図

石　器（第19・13図）

第19図と第13図11～13がN・Oグリッドの出土遺物である。

第19図1・2は石鏃。1は細かな剥離で葉型に仕上げられている。厚味はない。2は茎を持ち荒い剥離である。

3・4は石銛。3は少しえぐりの入った舌部をもつ。4は先端を欠損している。

5・7は縦長剥片で一方の側縁に剥離が加えられている。サイドスクレイパーか。

6・8はつまみ付ナイフである。6はつまみ付ナイフの先端部分と思われ，背面は両側に調整剥離が加えられている。8は幅広で小さなつまみがつく。やはり背面は両側に剥離が加えられている。つまみ部分のえぐりは背面から剥離が加えられている。

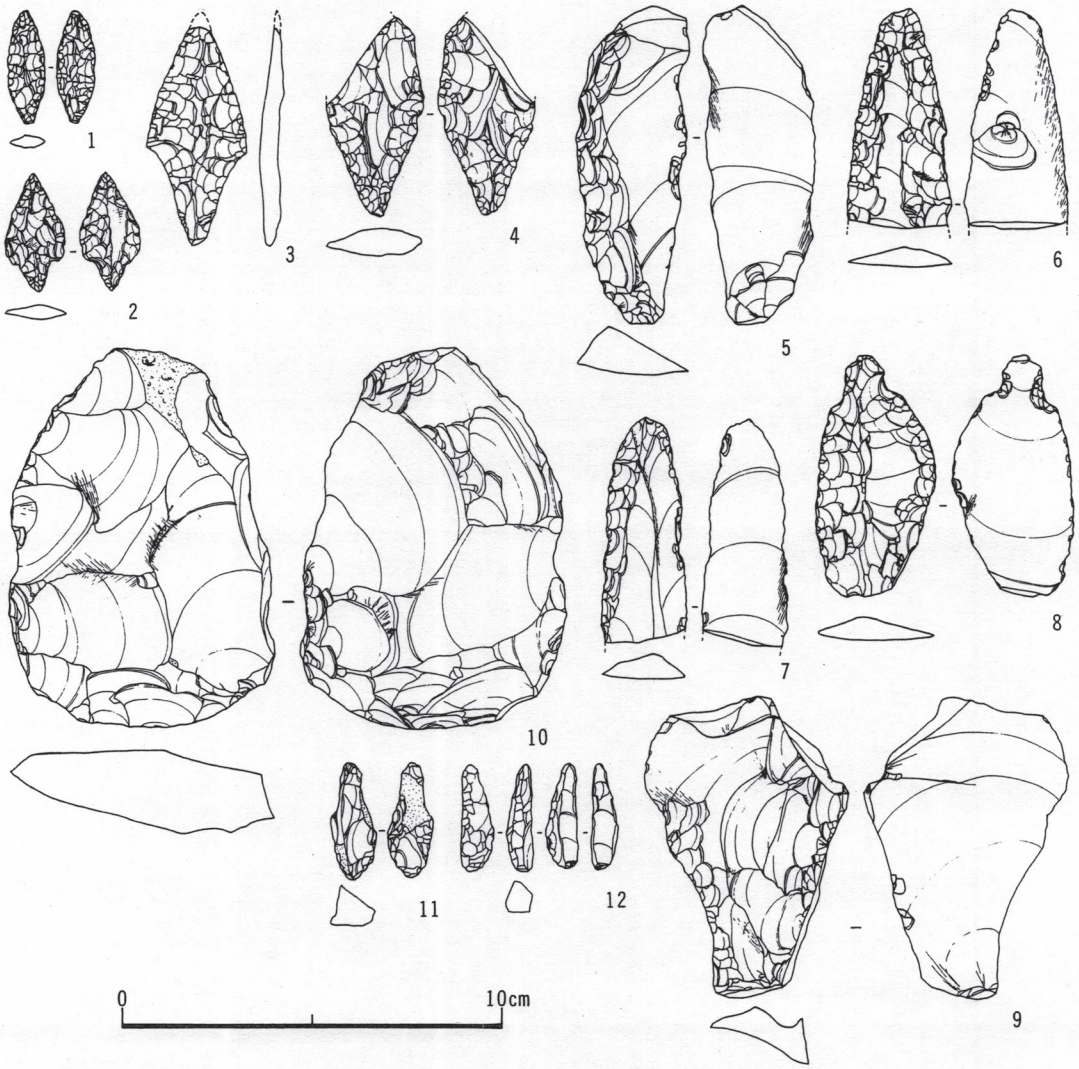
9はサイドスクレイパーであろう。

10は周囲から大まかな剥離が加えられた握斧状のもの。あるいは石核か。

11・12はドリル。12は両端がドリルとして使用されている。

第13図11・12は砥石。11は砥石の面がゆるやかな曲面になっている。12は平担な面にV字形の溝が数条入っている。

13は自然石の長軸の両端に敲打によるくぼみをつけている。くぼみを軸にして一方の側面は敲打痕があり，一方は剥離が加えられている。タタキ石状の用途であろうか。



第19図　第２ブロック出土石器実測図

第19図１・２　第13図13は２１層黒褐色土層中より出土。第19図５・７・８　第13図12は５層茶褐色土層中より出土。第19図11は２ｈ貝層中より出土した。他は攪乱層中から出土したものである。

第13図１はＫグリッドの茶褐色土層から出土したもので両端を欠損しているが一端には両側から穿った孔がある。

骨角器

第15図７～15　第20図６・12はＮ・Ｏグリッドから出土したものである。

７はクマの末節骨製の垂飾で基の部分に貫通孔がある。

８・９は魚類の堆骨製。周辺をとり去り研磨して円盤状にしている。中央に貫通孔をあげている。

11は尖頭具で尖頭部の断面は丸く，基部は扁平な長方形をしている。基部はすべり止めのためかすった痕を残している。

10も尖頭具で鹿の四肢骨製。骨の裏面から研磨して扁平に形作っている。

12は棒状の骨器で少し弯曲している。両端を削って尖らせている。全体に荒削りのままである。

13は組合せ式の釣針。基部は欠損しているが組合せ部分は片側を深く片側を浅くえぐりこんでいる。

14は尖頭具。一面は平担で一面は稜をもち断面が５角形になっている。基部から先端に徐々に細くなり先端は角度を変えて鋭いものとなっている。

15はトドの牙製。先端部と最大幅の部分に切り込みが入れられている。先端部は一周するが下部は片側のみ入れられている。

以上の遺物のうち14・15がＯグリッドの２１層黒褐色土層から出土している。他はＮ・Ｏの攪乱中から出土したものである。

第20図６は海獣骨製骨斧の一部と思われる。半製品であろう。Ｏグリッドの２ｈ層（貝層）からの出土である。

12は，Ｎグリッド北側の攪乱層から出土したもので，下面が丸くすれ，すりこぎ状を呈する。側面は金属器によって削られたと思われるあとがはっきりと残り，多角柱状をなしている。

第20図のその他の骨角器は第２グリッドの出土ではないが，５・７～９・11はいずれもＮ・Ｏグリッドの南壁に続く，Ｍ・Ｌ区の壁を清掃した際に発見されたものである。

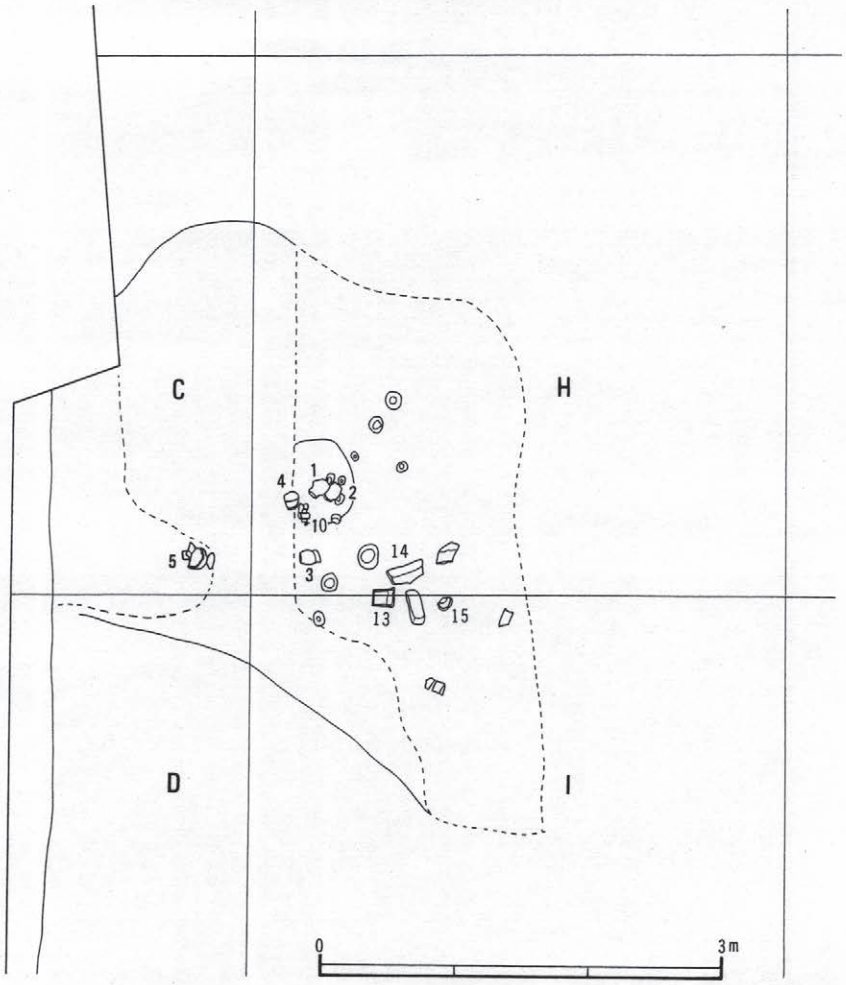
５は陸獣趾骨の一端を斜めに切った尖頭具。７～９・11は海獣骨製骨斧で，９は精巧に作られている。11と共に２ａ層の出土である。（椙田）

４．第３ブロックの層位と遺物

Ｃ・Ｄ・Ｅ並びにＨ・Ｉ・Ｊグリッドから出土した遺物を第３ブロックの遺物として一括して取り扱うことにした。

本ブロックのオホーツク文化期の包含層は黒色土層であり，その分布は第３図に明らかなように，Ｈ・Ｉグリッドを中心にＣ・Ｄグリッドにまで広がり，断面図においては，Ｅ・Ｊグリッドにまで及んでいる。本ブロックにおいて，包含層が残された区域はすでに第３図で示してあるが，攪乱部分が非常に多く，ＣＨ間，ＤＩ間がユンボで掘り上げられ，黒色土層は中断されている。Ｈ・Ｉ・Ｊグリッド北側断面でみると，黒色土層はＨグリッド東側では薄くなり（その始まりは

第20図　各区出土骨角器実測図



第21図　焼骨付近遺物出土状態平面図

攪乱されていてわからない),I・Jグリッドと西側に進むにつれて厚くなる。Hグリッドにおいて，この黒色土層の下位に焼土・焼骨その他遺物を混じえた黒色土層（２Ａ）があり，その分布はＩグリッド北側にも認められる。その焼土・焼骨などを混じえた層と，その上位にくる黒色土層との時間的な関係は，両層出土のオホーツク式土器の文様要素が沈線文系の土器群を主体とすることから同時期に形成されたものと考えられる。

黒色土層内での明らかな遺構としては，Hグリッドを中心に小さなピットが12認められる。それらのうち11はHグリッド北西にほぼ縦に長く点在している。他の１つはＩ区北東に存在している。12のピットのうち口径が最大のものは，50cm～60cm程で，ほとんどが20cm以下のものである。また，もっとも深いもので35cm程で，大部分10～16cmの深さである（第21図)。

ピット内からの出土遺物は骨角器１例と自然遺物が認められた。骨角器では，針入れがピット内で半分以上が壁に埋っている状態で発見された。自然遺物では，カサゴ類のウロコがひとつのピットからまとまって出土している。また他の１つのピットからは，キタキツネの上・下顎骨が

まとまった状態で出土した。また，それらのピット群と何らかの有機的な関連を持つとみられる，オホーツク期の遺物を多量に含む焼土層がHグリッドに集中的にみられた。この焼土層はH・Iグリッドにかけて東西に細長く分布しており，オホーツク式土器・多量の黒耀石チップ，動物遺存体等の遺物を含んでいる。しかも，それらの遺物群はそれぞれが特徴的なものであり，第3ブロックの性格を決定すべき要素を充分に含んでいる。たとえば，2個のきわめて特徴的なオホーツク式土器の完形品が出土している。ひとつは，肩部に10頭の海獣を彫刻しており，他のひとつは，胴部にまで直線と波状の粘土紐を貼付ける貼付式浮文がつけられている。さらに，焼土の分布する全域に亘って焼土に混じって黒耀石のチップがきわめて多量にみられた。そのほとんどが焼けた状態で出土している。このような動物遺存体の出土状態は，本ブロック以外ではみられず，それなりに何らかの意味を持つものであると考えられる。焼骨の内容はヒグマ，キタキツネ，クロテン，ワシ・タカ類の陸獣骨が主なものである。さらに，トナカイ（？）の角に，熊の頭部，鯨などの海獣類をリアルに浮彫りしている骨製の彫刻品が出土している。これら遺物群の出土状態とピット群の性格・関連は明らかではないが，何らか祭祀的な意味をもつのであろうと考えられる。

本層からは，すでに一部述べてあるが，土器，石器，骨角器，動物遺存体など，かなりの量の遺物が出土した。土器では，オホーツク式土器が圧倒的に多く，他に続縄文期の土器片，縄文期の土器片がある。石器では，オホーツク文化期の石鏃・銛先鏃等と，縄文文化期のつまみ付ナイフ，骨角器ではオホーツク文化期の骨鏃・骨斧・針入れ等が出土している。以下それぞれの遺物について記述する。

オホーツク式土器

本層出土のオホーツク式土器を文様要素によってみるならば，沈線文および沈線文＋刻文の文様要素がもっとも多い。次いで刻文・貼付式浮文がみられる。第1ブロックでは円形刺突文・刻文・爪形文等の文様要素をもつ土器群が主体となるが，本ブロックにおいては，沈線文系の文様要素をもつ土器群と貼付式浮文をもつ土器群が多くなる。

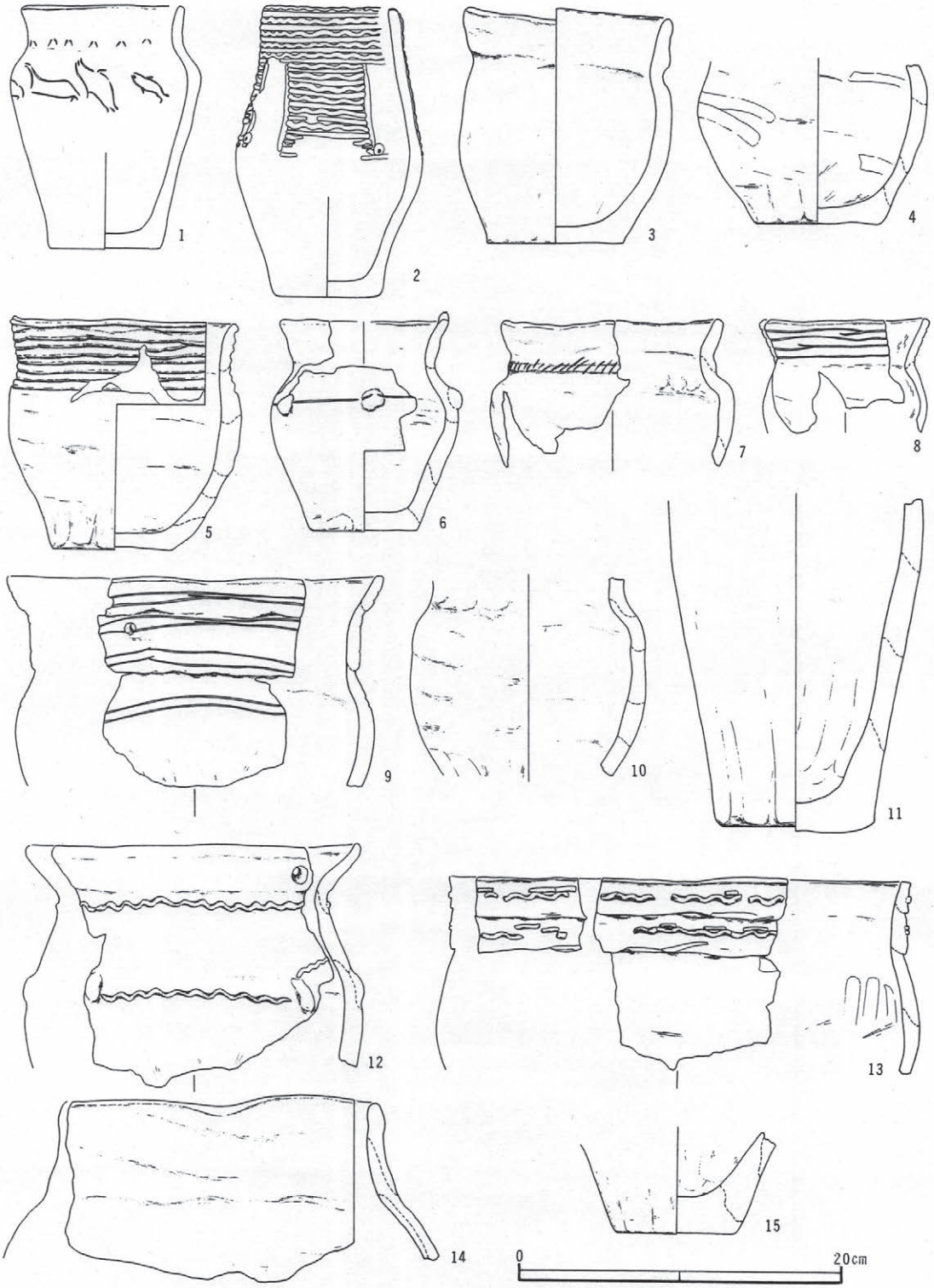
このようなことからも，本ブロックの堆積時期は，第1ブロックに時間的に遅れて形成されたということができるであろう。以下，それぞれの文様要素に分けて記述する。

第22・23図

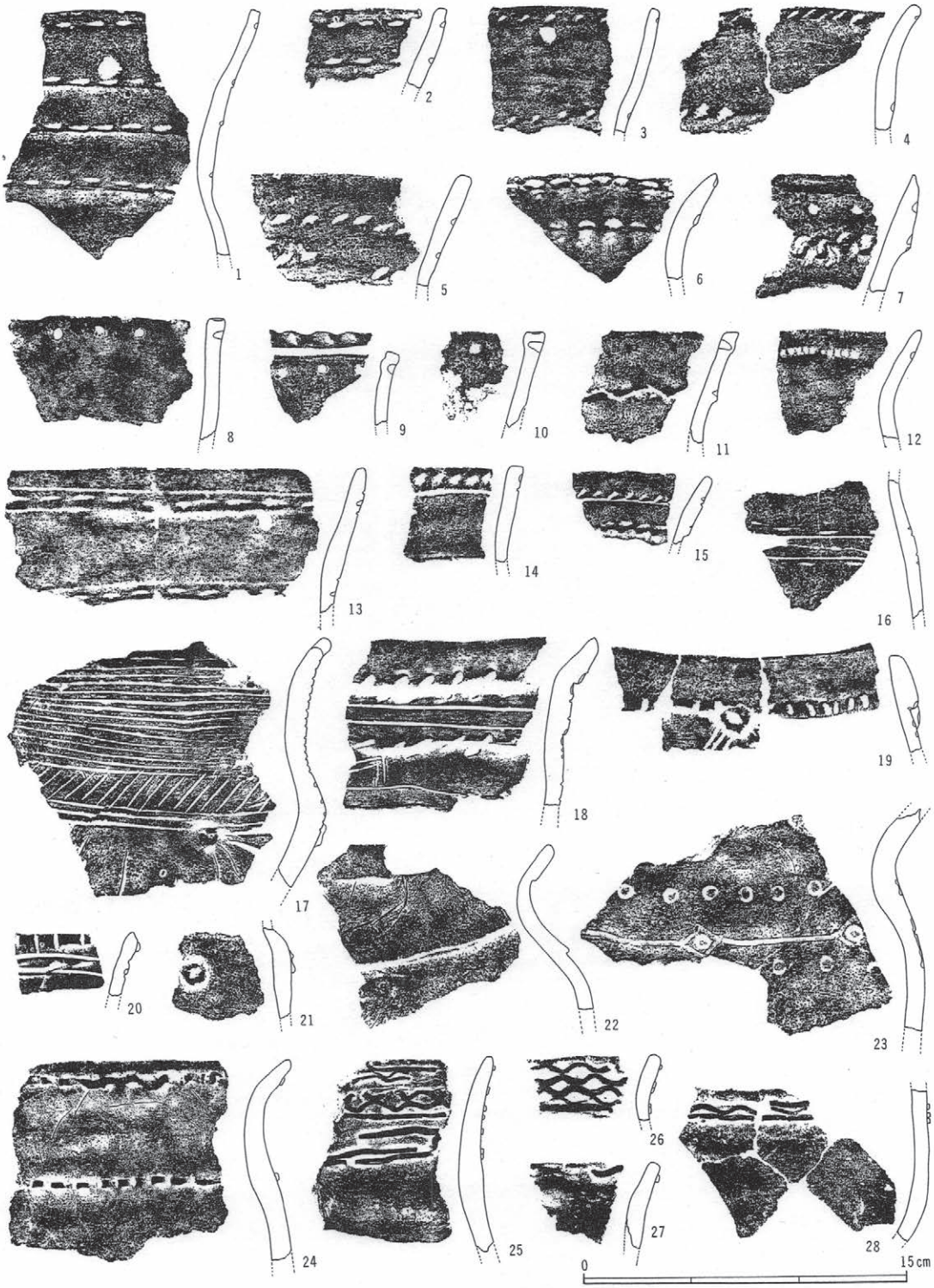
貼付式浮文（第22図2・6・12・13，第23図21・24～28）

完形品として出土した1例の他に口縁部を復原できた資料は3例だけである。器形は，第22図2は，口縁から胴部にかけてゆるやかにふくらみ，底部にかけて僅かに窄まる。口径と底径はほぼ同じである。13は口縁がほとんど外反することなく，口縁部から胴部にかけてゆるやかにふくらむ。12は口縁部が強く外に開き，肩部から胴部にかけてゆるやかにふくらむ。6は頸部が縮約し口縁部は外に開く。肩部から胴部にかけてやや張り出す。

本層出土の貼付式浮文には大きく分けて2つのタイプがみられる。ひとつは第22図2・12・13，



第22図　第３ブロック出土土器実測図



第23図　第３ブロック出土土器片拓本

第23図24～28にみられるもので，おもに口縁部に波状あるいはまっすぐな粘土紐を何本か組み合せて貼付する。他のタイプは，第22図６，第23図21のように，瘤状の粘土を貼付するものである。しかも，後者のタイプではその瘤状の貼付文が単独で用いられることはなく，沈線文などと複合施文されるようである。前者のタイプでは１例として次のようなものがある（第22図２，第１図版）。口唇に波状の粘土紐を貼付け，口縁外縁に沿って直線の粘土紐を繞らし，その下位に波状の粘土紐と直線の粘土紐を２本一組として４段囲繞させる。さらに，その下位に粘土紐を２本垂下させて貼付し，その間を波状と直線の粘土紐２本を一組として８段貼付する。また垂下させた粘土紐の下端にボタン状の瘤を貼付し，その上を棒状の施文具を用いて刺突する。これらを１つのセットとしたものを間隔をおいて４面貼付し，その下端を１条の直線の粘土紐を用いて繋ぐ。このような貼付式浮文の施文例はかなり特異なものであり，道北地方ではあまり例がない。13は直線と波状の粘土紐２本を一組として口縁部に２段施す。25・28は２本の直線の粘土紐の間に波状の粘土紐を貼付する。27は波状の粘土紐を１段，24は２段繞らす。さらに，26は波状の粘土紐を４段施す。後者のタイプでは，第22図６は肩部に瘤状の粘土を間隔をおいて貼付し，それを一条の沈線で繋いでいる。また口唇面にも貼付が施されている。一般に他の文様要素との複合施文が多く，たとえば，貼付式浮文には分類しなかったが，第23図17・19・20にみられるように沈線文との複合施文がある。文様の主体となるのは明らかに沈線文である。従がって，21の例は17・19・20にみられるものと同じにグループに入いるものと思われる。

沈線文（第22図１・８・９，第23図17～19）

口縁部を復原できたものが２例（第22図８・９）ある。器形は頸部はあまり縮約せず，胴部がなめらかにふくらむ。沈線文は口縁から頸部にかけてめぐらされ，８は４条，９は２条一組にして口縁部に２段，頸部に１段，肩部に１段施している。

拓影図（第23図）に示したものは，いずれも口縁部資料である。口縁部器形は本来的なオホーツク式土器のものとは異なるようである。特に17・18において顕著に認められる。17では，口縁部が僅かに外反しており，頸部の区別は不明確である。胴上部は鋭く張り出すが胴部以下は欠損していて全体の器形は不明である。口縁には突起がみられる。18は口縁下部が垂直に立ち上がり，口唇附近が外に開く。文様は，17は口縁から下に15条の沈線文を繞らし，16条目との間に斜行の沈線文を施す。さらに，その下位に２条の沈線文を囲繞させ，最下端の沈線上に瘤状の貼付式浮文を施す。18は表面に輪積みの接合部分を残し，その高まりに刻みを入れる。またその下位に２条の沈線文を引き縦にも沈線を引いている。19は口縁部を外側に折り返して肥厚帯を作る。その肥厚帯の下端に刻みを入れ，そこに瘤状の貼付を施す。またその貼付式浮文の下から沈線文を３条斜めに引く。

第22図１は今まで述べてきたものとは趣きを異にする。土器に動物意匠を彫刻する類例は少ないが，それだけに何か特別な意味をもつものであろうと思われる。器形は口縁部がほぼまっすぐに立ち上がり，肩部がやや強く張り出し，そこから底部にかけて徐々に窄まる。高さは15cmある。文様は頸部に〝ハ字状〟の刻文をほぼ等間隔で繞らす。肩部の張り出しの部分に海獣類の意匠を

10頭彫刻している。その種類はクジラ又はイルカとアシカ類であると思われる。この意匠の拓影の一部を本表紙等に示したが，首の長い海獣（アシカ類）が多く８頭刻まれており，うち２頭は違う様相を呈している。残りの２頭はクジラまたはイルカと思われる。本例はその出土状況から考えて沈線文にグルーピングした。つまり，本ブロックのオホーツク式土器の文様要素で主体となるのは沈線文系の土器群であり，また前述した貼付式浮文の１例と並んで何らかの祭祀址と考えられるところから出土したからである。

沈線文＋刻文・爪形文等（第23図13～16・20）

拓影図に示した資料のうち口縁部破片は４例あり，その器形はほぼ共通している。頸部があまり縮約せず，したがって口縁部はあまり開かない。文様は沈線文の上下・あるいは沈線間に刻文を配する典型的なものである。２条の沈線間に刻文を施すもの（13），刻文を一列に配し，その直下に沈線文を１条繞らすもの（14・15）２条の沈線間とその上下に刻文を施すもの（16）がみられる。20は口唇直下に貼付式浮文を施し，また口唇直下から沈線を垂下させ，さらにその下位に２条の沈線文を，その間に斜位の刻文を施す。

爪形文（第23図６・７）

拓影図に示した２例はいずれも口縁部破片で，２例とも口縁部は外に開く。文様は６は口唇外縁と口縁部肥厚帯下端に横位に爪形文を繞らす。７は口縁部肥厚帯の頂上に２指を用いて爪形文を施し，その上位に先の丸い棒状工具を用いて刺突文を施す。

刻文（第22図７，第23図１～５）

口縁部附近の器形は前述した爪形文同様に外に開く。第22図７では肩部に若干張り出しがみられる。文様は頸部に斜位の刻文を列状に配している。１は横位の刻文を４段，２は２段，３～５は斜位の刻文を２段重ねている。これら刻文をもつグループは，いわゆる摩擦式浮文との複合施文がみられる。つまり稜の部分に刻文を施すものであり，爪形文にも同様にみられるものである。

型押文（第23図12・23）

口縁部の資料は12の１例である。口縁部は顕著に外に開くが，頸部の縮約は僅かなものである。文様は，12は口縁部に口唇と平行に５歯の櫛歯状の型押文を１列に施す。23は肩部に竹管文を２段繞らし，さらにその間に竹管文を距離をおいて施文する。その竹管文を沈線を用いて菱形に囲み，さらにそれを沈線で繋ぐ。

円形刺突文（第23図８～11）

４例の口縁部破片は，いずれも口縁が外に開くことで共通する。しかし文様要素において２つのタイプに分けられる。ひとつは８～10にみられるように，外側から内側に向って刺突がなされるもの，他は11のように逆に内側から外側に向って刺突されるものである。前者のタイプは，口唇面にも施文がある（８～10)。８～10は口唇直下に外側から内側に向って刺突がなされ，９・10は内側に瘤をつくる。また，口唇面には小指ぐらいの大きさの指頭を用いた指圧痕がみられるが，９・10ではその指圧によって生じた稜上に刻みを入れている。11は今までの例とは逆に内側から外側に向って刺突がなされ，外側にやや強く瘤を作る。またその下位に突帯を作り出し，突帯上

に沈線で刻みをつけている。

無文の土器（第22図３・４・10・11・14）

完形１例・口縁復原１例，胴部復原１例，底部復原２例みられる。３は完形土器で，頸部が僅かに縮約し，口縁部も僅かであるが外に開く。肩部から胴部にかけてなめらかにふくらむが，全体的に屈曲に乏しい器形を呈す。高さは水平ではなく，低いところで13.5cm高いところで14.8cmある。10は肩部から胴部にかけてゆるやかにふくらむ。底部資料は２例ある（4･11）11は胴部はふくらまないようであり，円筒形のような器形を呈す。４は胴部が丸くふくらみをもつ壺形の器形である。ここでは，一応無文の土器としてグルーピングしたのであるが，３・14の２例を除くものについては，何らかの文様が施文されているものとおもわれる。オホーツク式土器において，文様はほとんどが口縁部ないし頸部に施文されることから，何らかの文様があったことは充分に考えられるが，口縁部が欠損し，どの文様要素にグループに分類できるかわからないので，便宜的に無文として記載した。

摩擦式浮文（第22図５）

一部破損してはいるが，完形のまま直立して出土した土器である。他の土器と違い黄褐色に焼きあげられており，器壁も厚い。表面には巻上げのあとが残り，底に近い部分には篦削りのあとがみられる。胴部は無文であるが，頸から口唇にかけて，摩擦（ナデ）による細隆線が９本めぐり，いわゆる摩擦式浮文を作りあげている。小形の甕形土器である。

第24図黒色砂層から出土したものをまとめて図示したが,黒色土層出土土器との変化はみられない。

沈線文（26・27）

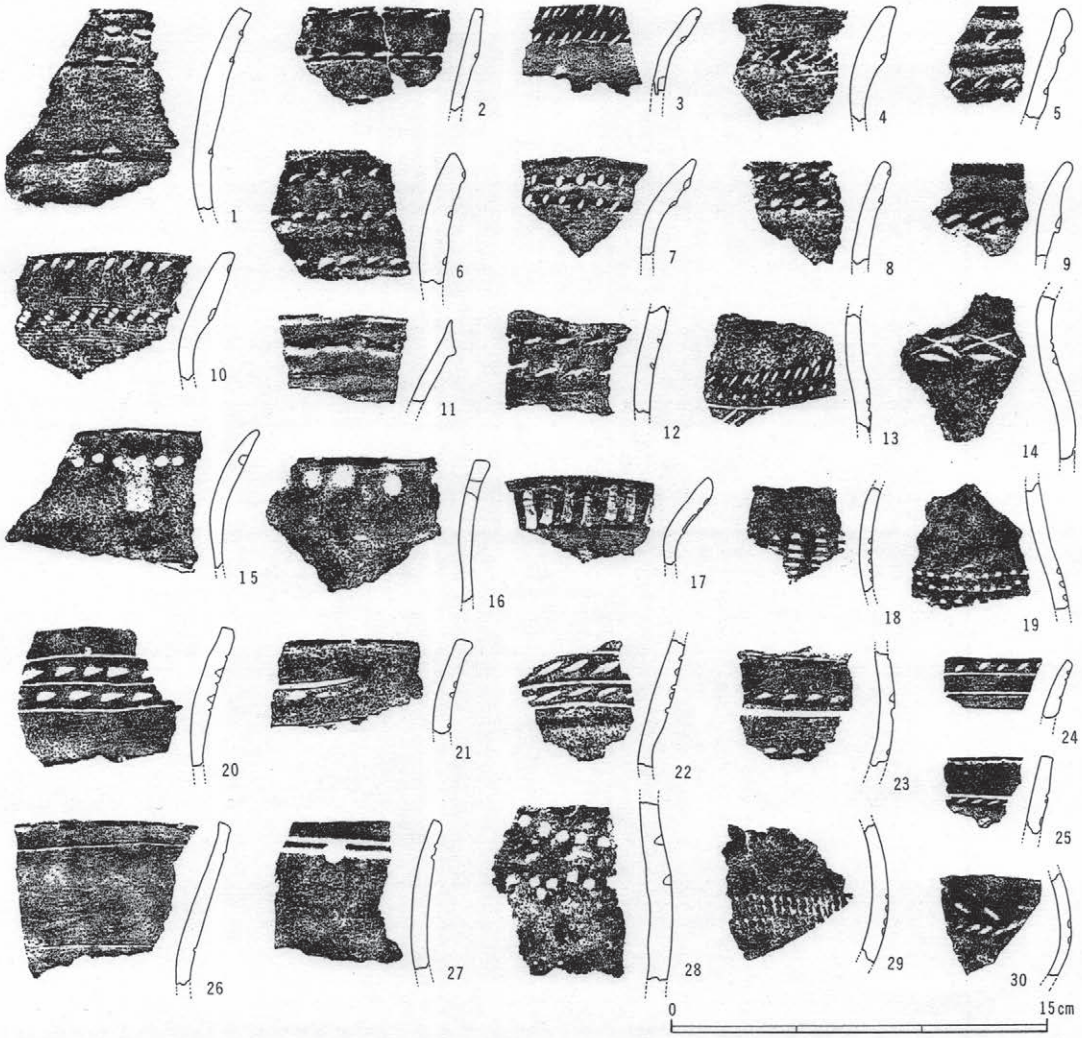
２例とも口縁に平行に２条の沈線文を繞らしている。26の沈線文はヘラ状工具の先端を用いて，深くはっきりと刻まれるのに対して，27では，先端が四角い施文具を用いて幅広い沈線文を刻んでいる。

沈線文＋刻文・爪形文等（13・14・20～25）

この文様要素の施文例は頸部あるいは口縁部に施文されるものが多い。しかし施文箇所により，文様にはあきらかな差がみられるようである。つまり13・14にみられる施文例は，いわゆる沈線間に刻文を配列するものとは，あきらかにちがうものである。13は斜位の刻文の直下に先が細く丸い棒状施文具を刺突した点列を配し，さらにその下位に沈線文と刻線文を施文するもの，14は２本の刻線文を交差させ，その直下に横位の刻文を施すものである。これらとは明確に区別できるものとして20～25のように口縁部に沈線文を何条か繞らし，それに刻文を組合せて施文するものがある。２条の沈線間に１段の刻文を施し，それを２段重ねる例（20・22），沈線文の直下に刻文を施す例（21）沈線文の直下に刻文を施す例（23），口唇直下に刻文を配列し，その下位に２条の沈線文を繞らす例（24），沈線文の直下に刻文を配列し，少し距離をおいて刻文を配列するもの（25）がある。

摩擦式浮文（11）

１例だけである。口唇下に肥厚帯を作り出し，その部分に指頭を用いて押圧している。摩擦式



第24図　第３ブロック出土土器片拓本

浮文は２条みられる。

爪形文（１・２・５・６・８・９）

爪形文が施される器形は，いずれも口縁部が外に開くようである。また，摩擦式浮文との組合せや肥厚帯上に爪形文が施されるのが一般的である。横位の爪形文を何段か重ねる例（１・２）斜位の爪形文を何段か重ねる例（５・６・８），２指を用いて施文する例（９）がみられる。

刻文（３・４・７・10・12）

刻文の施文は前述の爪形文のそれとほぼ同様である。すなわち，口縁部に何段かの刻文を配列させ，しかも摩擦式浮文の稜上に刻文を配列するものである。文様は刻文を１段繞らすもの（４・10），２段繞らすもの（３・７・12），がある。３・10は刻文のほかに型押文を複合施文させている例であり，３は円形刺突文，10は櫛状の型押文がそれぞれ施されている。

型押文（第24図17・18・19・29・30）

口縁部破片は１例だけである。口縁部は強く外に開く。また，口縁部は全体的に肥厚をなしている（17)。文様はかなり変化にとんでいる。幅５mm程の先が平担な施文具を用いて幅広く浅い凹帯をつくりだすもの（17），先端が長方形の施文具を刺突し，何列か並べるもの（18），２歯の櫛歯状施文具を用いて押圧し，２段重ねるもの（29),棒状施文具の先端を押圧し，「ハ」の字形に組合せるもの（30）などがみられる。

円形刺突文（第24図15・16・28）

口縁部破片は２例であり，口縁部はあまり開かない。文様は，口唇直下に円形刺突文を繞らすもの（15・16），肩部附近に不規則に円形刺突文を施すもの（28）がある。

石器（第25・26図）

第25図は黒色土層出土の石器である。１～８および10～13は石鏃であろう。これらは舌のあるものと無いものに分けられる。舌をもつものは４・６・７・11・12のように剝離面を残すものが多く，縁辺部だけが調整されている。８はただ一つの三角鏃であるが，薄く押圧剝離による細かな調整がみられる。これに対し２は非常に部厚い。

石材は黒耀石が圧倒的に多く，10例（１～３・５～７・10～12),頁岩が２例メノウ質硬質頁岩が１例（８）の割合である。

14・15は銛先鏃と思われる。14は両面が入念に調整されている。石質は黒耀石である。15は先端部が欠損している。石質はメノウ質硬質頁岩である。９も大型なので銛先鏃かもしれない。

16・17・19～29はナイフとしての機能をもつものであろう。16・19～21は片面加工で断面は三角形をしている。16・20は欠損しバルブの部分が無いので良くわからないが，あるいはつまみが付いていたかもしれない。22～27は片面加工のつまみ付ナイフで，縦長のフレイクを用い打瘤の部分を利用して両側からノッチを入れている。19・21も，つまみを作り出せば，同じものになろう。17・28・29は両面加工。17は薄手のもので一方が尖っているが，どの部分も刃として利用し得る。28・29は欠損しているので，全体の形はわからない。石質は17・28が黒耀石，他はすべて頁岩である。

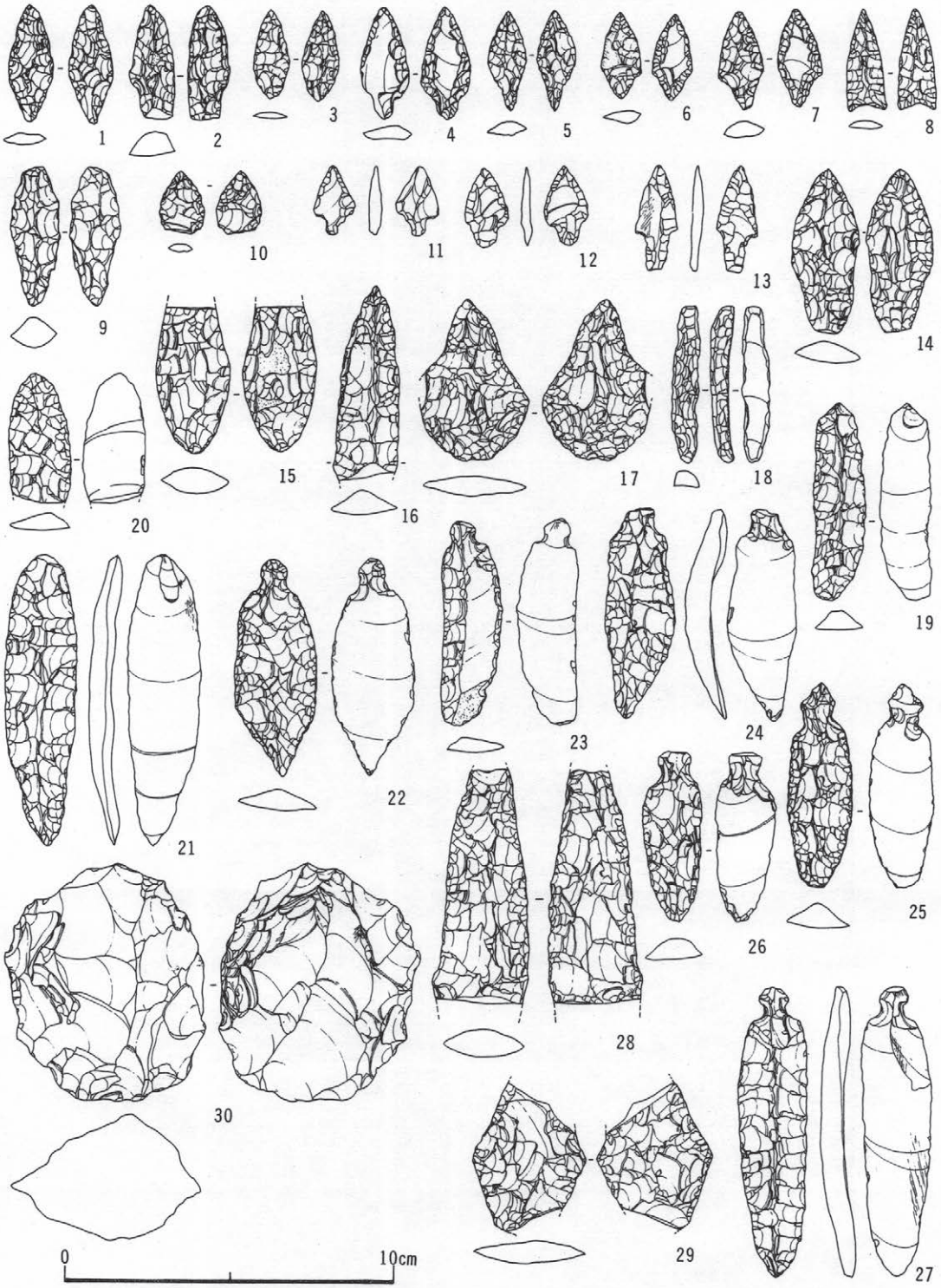
18は両端が錐として使われたものと思われる。30は頁岩の石核，周囲からの打撃による剝離面が両面を覆っている。

第26図は褐色土層出土の石器である。

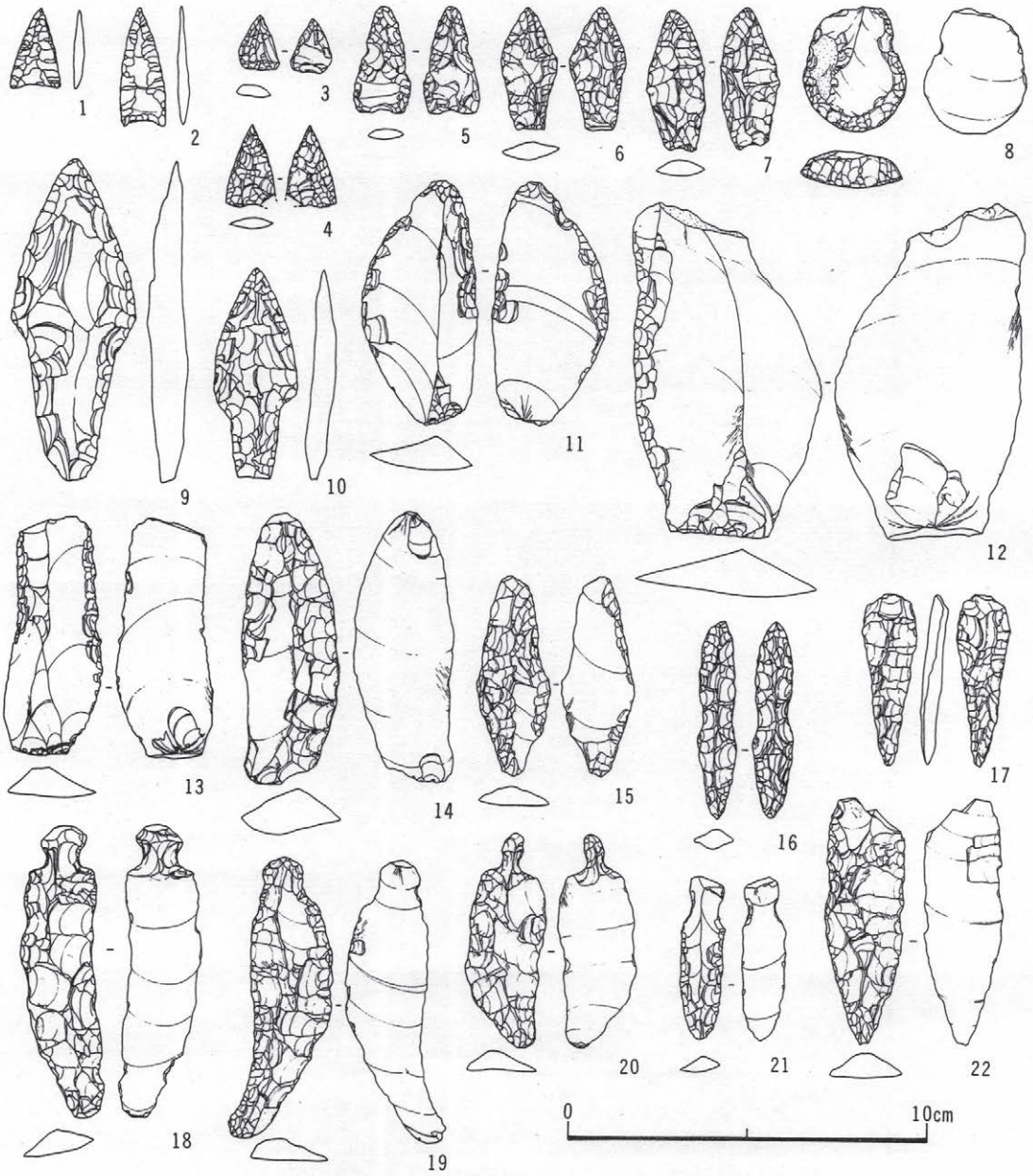
１～４は石鏃，５も鏃と思われる。舌をもたぬ三角鏃で，１・２・４は薄く，共にきれいに仕上げられている。３は小さく，５も形はよくないが薄い剝片を使っている。石質は一点ずつ異る。

６・７および，９・10は銛先鏃と思われる。６・７は小さいが，矢の鏃としては大きく厚みもあって重い。両面ともよく調整されている。９・10は槍先ようのもので先端は鋭どく両側はふくらみをもち，幅広の茎につづいている。ともに頁岩。

11～15，18～22はナイフの機能をもつものである。11～15は剝片の縁辺の一部に調整を加えたもので，片刃の部分が多い。11・15は両面から調整を加えている。12は大型の剝片を用い，14は



第25図　第３ブロック出土石器実測図

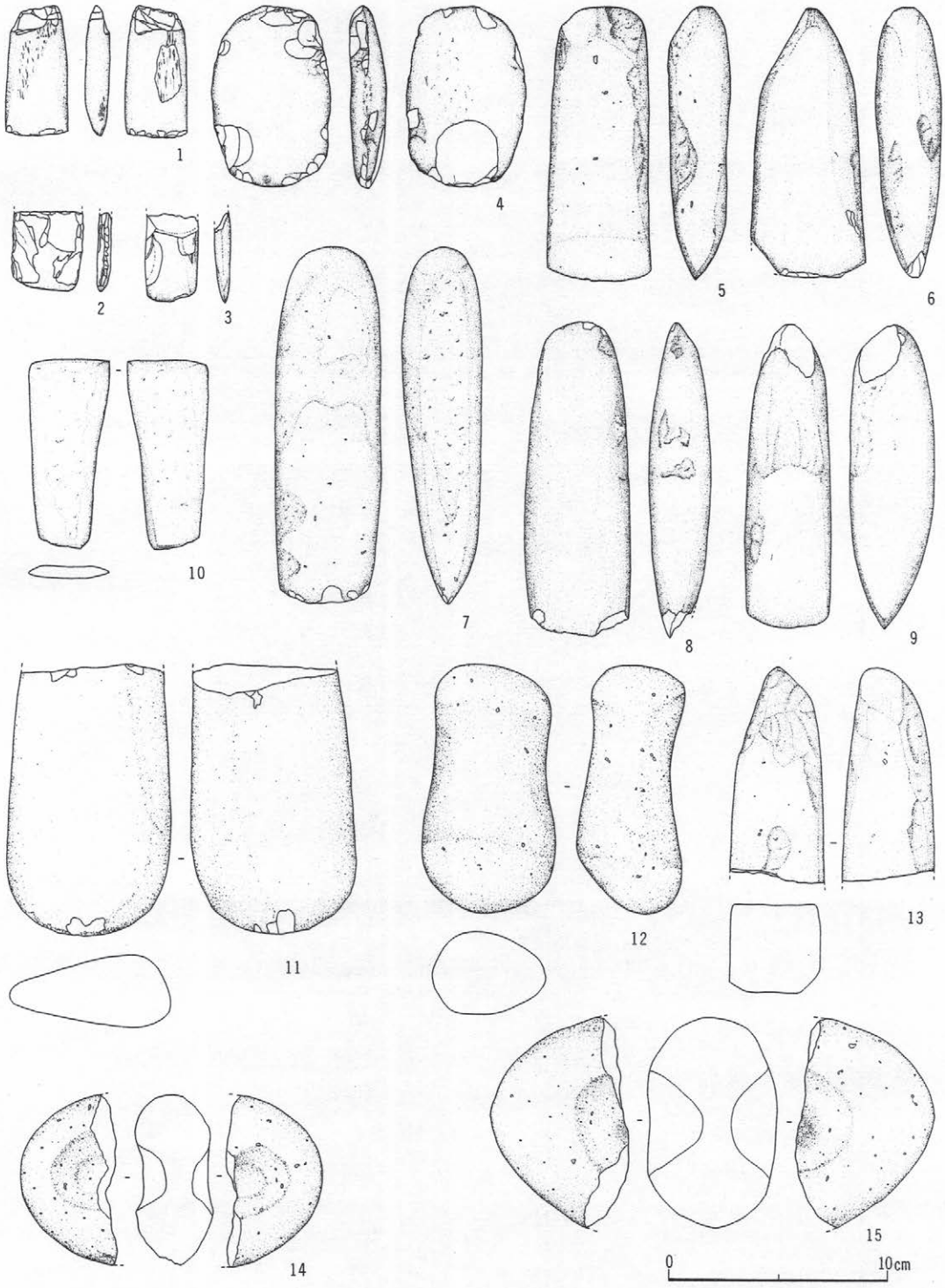


第26図　第３ブロック出土石器実測図

凸曲線の刃部が深く調整されている。18～21はつまみをもつナイフ，22はつまみ部分が破損したものと思われる。

16は，中央に紐かけのような凹部をつくり，両端は同じ形に仕上げられている。黒耀石製で入念な調整をもつが，用途はよくわからない。

17はメノウ製。両面加工で一端が欠けている。他の一端はすぼまり，断面四角形で先が尖がる。錐と思われる。



第27図　第３ブロック出土磨製石器実測図

第27図　第３ブロックから出土した磨製石器を図示した。他の地区にくらべて石斧の数が多く，しかも大部分がＨグリッドからの出土である。３・４・６が黒色砂層，11・12が黒色土層，１・５・８～10が褐色土層からの出土であるが，特に変化はみとめられない。

２は攪乱層からの出土であり，13～15は工事による排土を再調査した際に発見されたものであるが，当ブロックに属していたものと考えられるのでここに示した。

石斧には断面が薄く小形なものと，大形の柱状石斧とがある。小形な１～３は黒色片岩を用い，全面を砥石で磨いているが一部敲打のあとを残すものもある。１は刃部に刃こぼれがみられ使用のあとを示している。上部が敲かれたらしい痕もある。手斧のような用途を考えることが出来ようか。２と３は上部が欠損している。４は比較的扁平な円礫を原材としており，打ちかきのあとやすり痕がみられる。まだ製品になる以前の状態なのかもしれない。５～９は大形の部厚い磨製石斧である。５は頭部・側面等を敲打成形し，その後研磨したあとが観察されるが，製作方法は６～９も同様であり，時間をかけて研磨したことが推察される。刃部はどれも使用痕がみられ，殊に６～８は刃こぼれが著るしい。９は頭部にも後からの剝離痕がある。石質は８が緑色泥岩，その他は安山岩または玄武岩である。13も石斧だったと思われる。断面は正方形に近く，その点９と同じような形が推定されるが，刃部が欠損しているためわからない。

10は砂岩製の扁平な石器で，三辺に刃がつけられている石鋸と言われているものであろう。

11は欠損しているが敲石と考えられる。表面は自然のままと思われるが，なめらかで，下端に敲かれたあとがある。敲石としては大形の部類であろう。

12はすり石である。中央部付近がくぼみ，握るのに好都合な自然石を選んだものであろう。両端にすりあとがあり，乳棒のような用途を思わせる。

14・15は中央が両面から窪んだ円形の石で，もしこの窪みが貫通すれば貫頭石斧になるようなものである。２個とも表面採集による発見品であり，半分に欠けているため不明な点が多い。

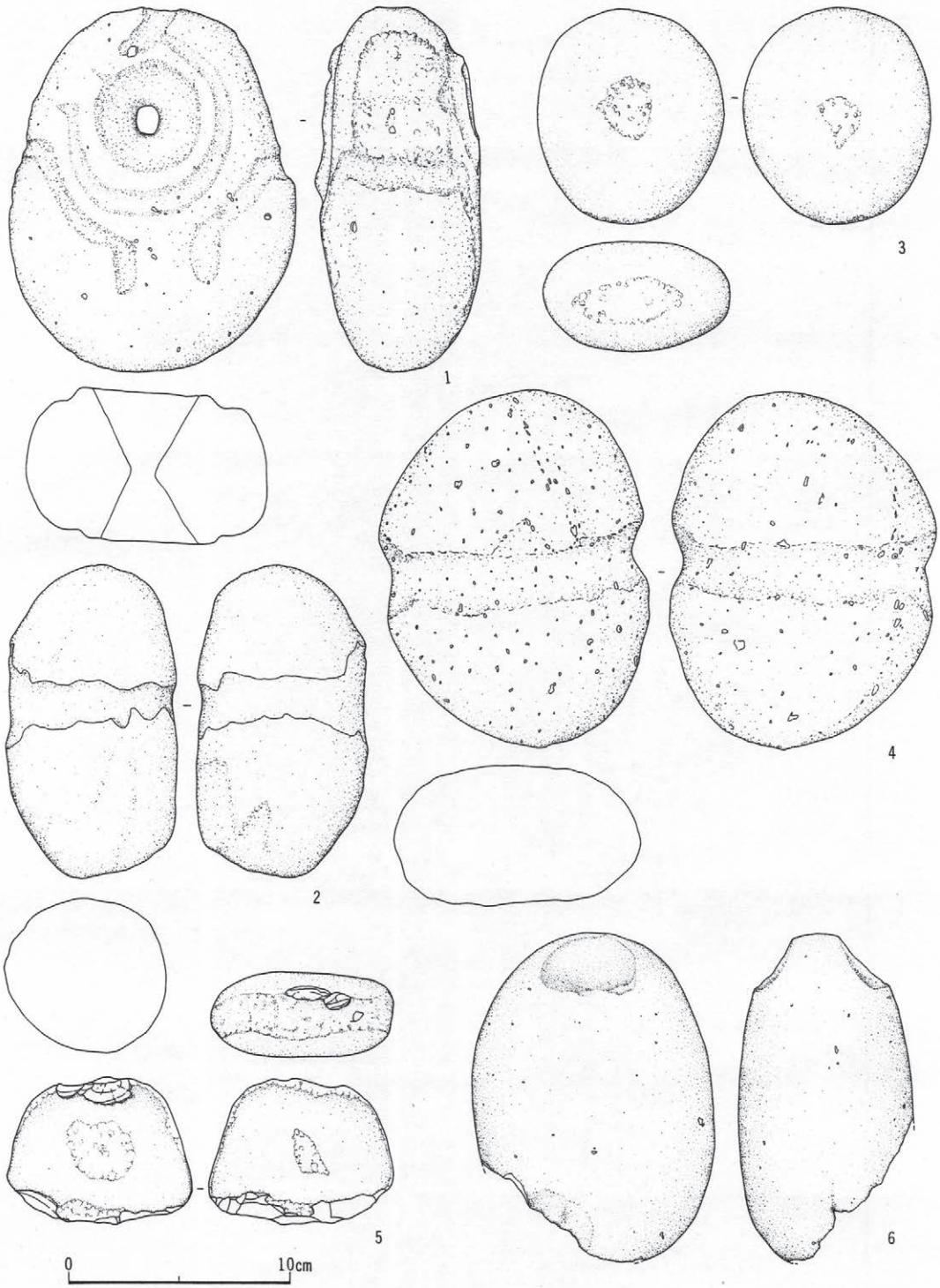
第28図１～３・５はＨグリッド，６はＪグリッド出土，４は表面採集の遺物である。また５はメノウ製，他はすべて安山岩で作られている。１は重さ２kgもある大形の石錘で，両側からあけられた貫通孔を囲むように石の彫刻がある。特異な石錘である。２・４も石錘であろう。円礫の中央をめぐる窪みがあり，紐かけに利用されたものと思われる。

３・５は敲石，長楕円形断面の円礫を選んで用いている。両面と側面の一ヶ所，計三ヶ所に敲き痕がある。５は原材が乳白色のメノーであり珍らしい。図示しなかったが，この他にも破損したものを含む数個の安山岩製敲石が出土している。

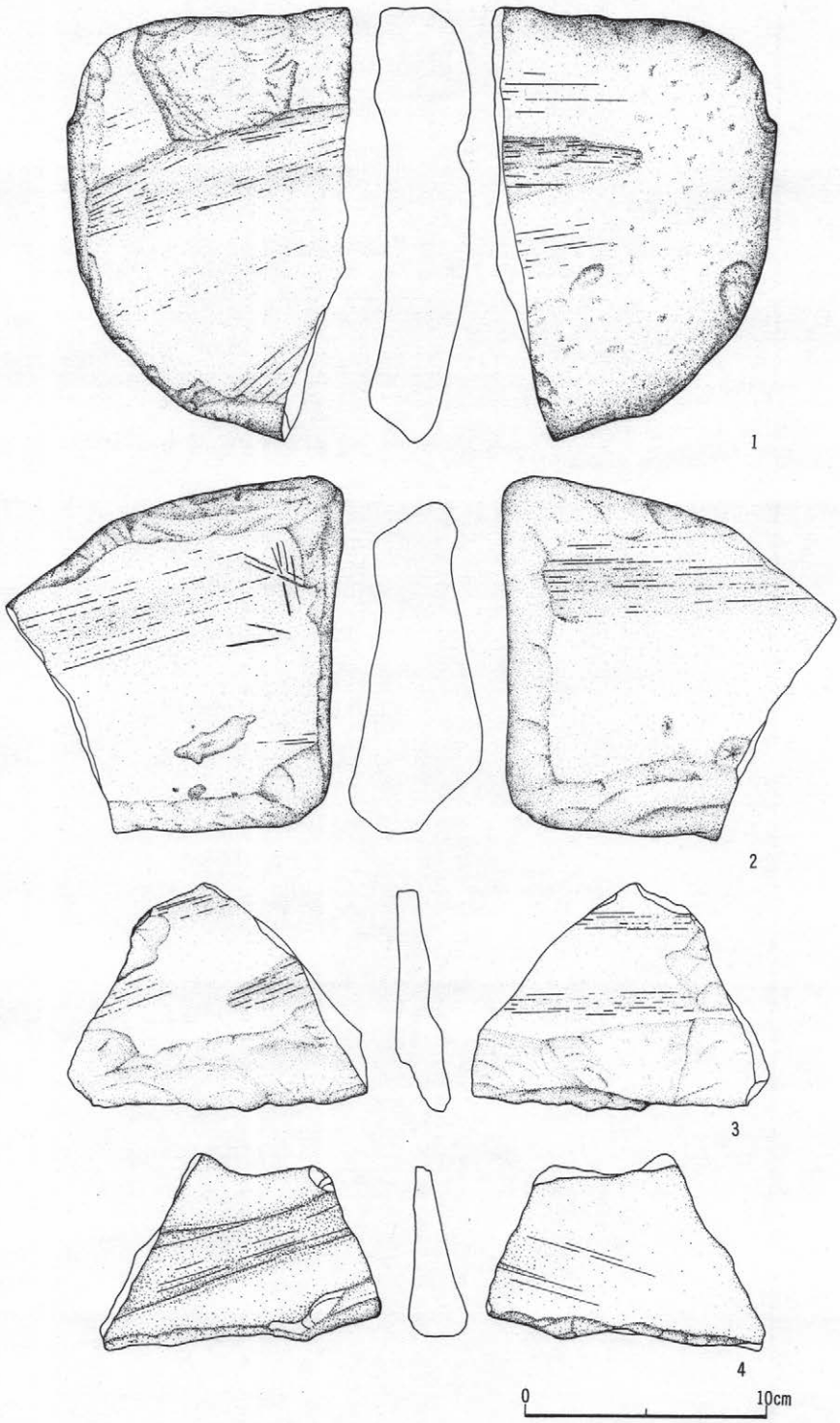
６は円礫の一端に，両面からきれいな抉りを作ったものであるが，何を意図したものか解らない。あるいは穿孔して石錘を作ろうとしたものであろうか。下端が斜めに欠けている。

第29図　ここには大小四点を示したが,この他にも約10点の砥石が出土した。いずれも砂岩製で同様のものである。

１は一面に石皿のような窪みができるまで擦ったあとが残され，そのなかに平行な擦痕が無数に走っている。裏面には細く深い薬研状の窪みがある。石斧の刃部などを研磨するのに用いられ



第28図　第３ブロック出土大形石器実測図



第29図　第３ブロック出土砥石実測図（４：表採）

た部分であろう。2も部厚い石を用いた砥石であるが，表裏ともほぼ平板状に擦り減っている。平行に走る細かい擦り痕に混じって,縦横のするどい痕跡もみられる。

3・4は比較的薄い石を使用した砥石の一群から選んだものである。3は片面は平らな研磨面であるが，他面は幅4～5cmのカマボコ状の窪みがある。4は表採品であるが，両面が使いこまれ，中央部の厚さは3分ノ1に擦り減っている。

骨角器（第30・31・20図）

第3ブロックには良好な貝層が無かったため，骨角器の出土はあまり多くない。しかしHブロックの焼骨遺構から珍らしい彫刻ある鹿角製品が出土している。

第30図は，焼骨遺構から出土した鹿角製品である。ともに細片となって，ヒグマ・キタキツネ・アザラシ等の動物骨のなかに埋っていた。篩にかけて骨片を採集したにも拘らず，欠落した部分があり，また火熱のため多少変形している。しかし，復原によりもとの形を知ることができた。

1は鹿角の角座に近い部分を用い，表面全体に浮彫りを施した，〝くの字〟状の鹿角製品である。後期旧石器時代の謂ゆる指揮棒を思わせるもので，両端に2個ずつの小孔があけられ，紐を通して使用したものと思われる。また内面は角の海面状の部分を削りとって中空にしたらしい痕跡がうかがえる。表面の彫刻は，クマの頭部一つとクジラ約25頭で，すき間のないように配している。クマの頭部は角座の部分に丸彫り風に彫り出され，たいへん写実的で精桿な顔をみせている。クジラ（またはイルカ）はほとんどが背面からみた図柄で，クマとは反対の一端に5頭が頭と尾を互い違いに組み合わせて彫り出され，中央の屈曲部分では腹をみせているもの，水にもぐって裏側に頭を出しているものもある。

2は，鹿角の直線的な部分を用いている。図柄は1と異り，海面での棲息状態がそのままに描かれ，両端が欠損しているためはっきりしないが，そこにはストーリーさえも感じさせられる。一面はイルカが頭だけを水面にあらわしているし，一面は四頭が並んでサーフィングしている。また水面から全身をとびだして尾ひれをまげているところ，オットセイなども混じえて,水の輪と共に，実に写実的に浮彫りされている。海獣は総数19頭が数えられる。

この鹿角は，厚さや表面の状態からエゾシカのものとは考えられず，トナカイであろうと思われる。

第31図　1～5は骨製の尖頭具である。1～3は陸獣の趾骨で作られたと思われる。

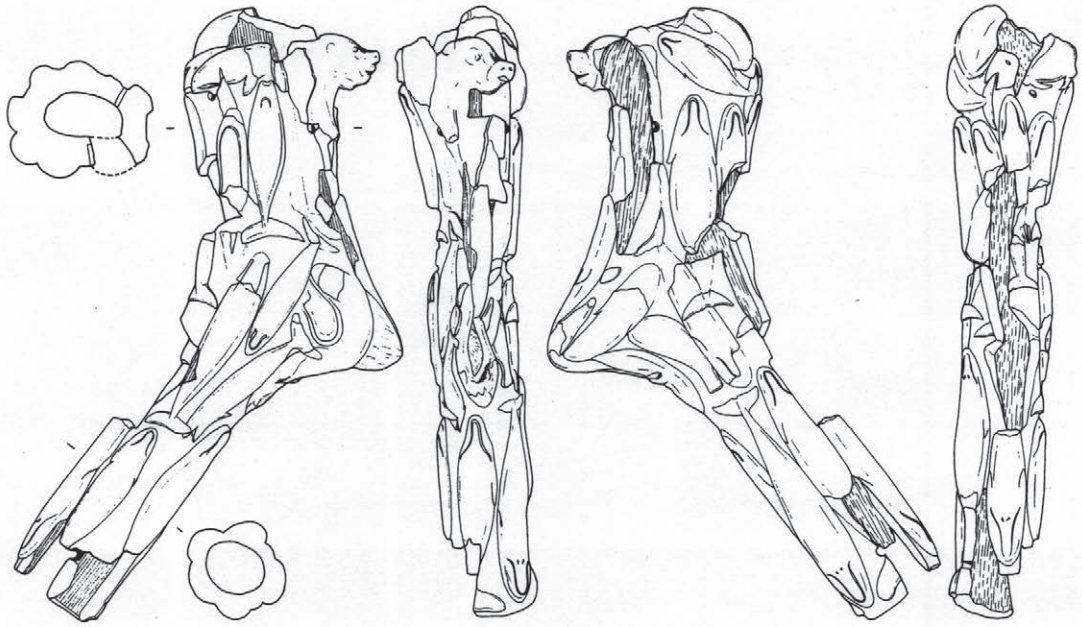
1・2は先端が骨鏃状になり，段がついて基部にいたるが共に破損している。刺突具であろう。

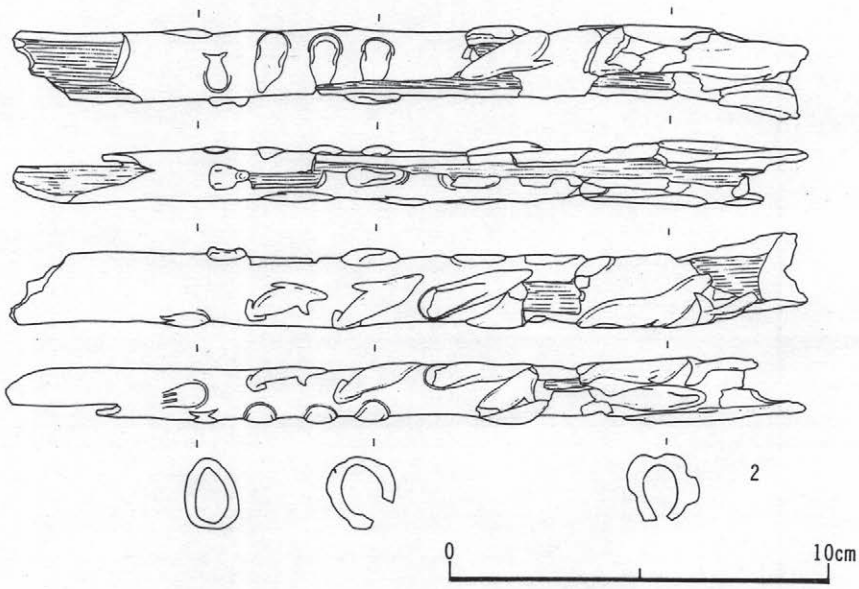
3は1・2とは違い薄く仕上げられている。骨鏃であろうか。やはり基部が欠損している。

4・5は鳥管骨を斜めにそいで磨いた刺突具である。4は基部が平らに，5は斜めに截られている。

6は上部が欠損しているため何であるかわからないが，表面はよく磨かれ，基部は両側面を斜めにきっている。

7は付柄と思われる。中央は円形断面であるが先に行くに従い菱形になり細くなる。8は両端

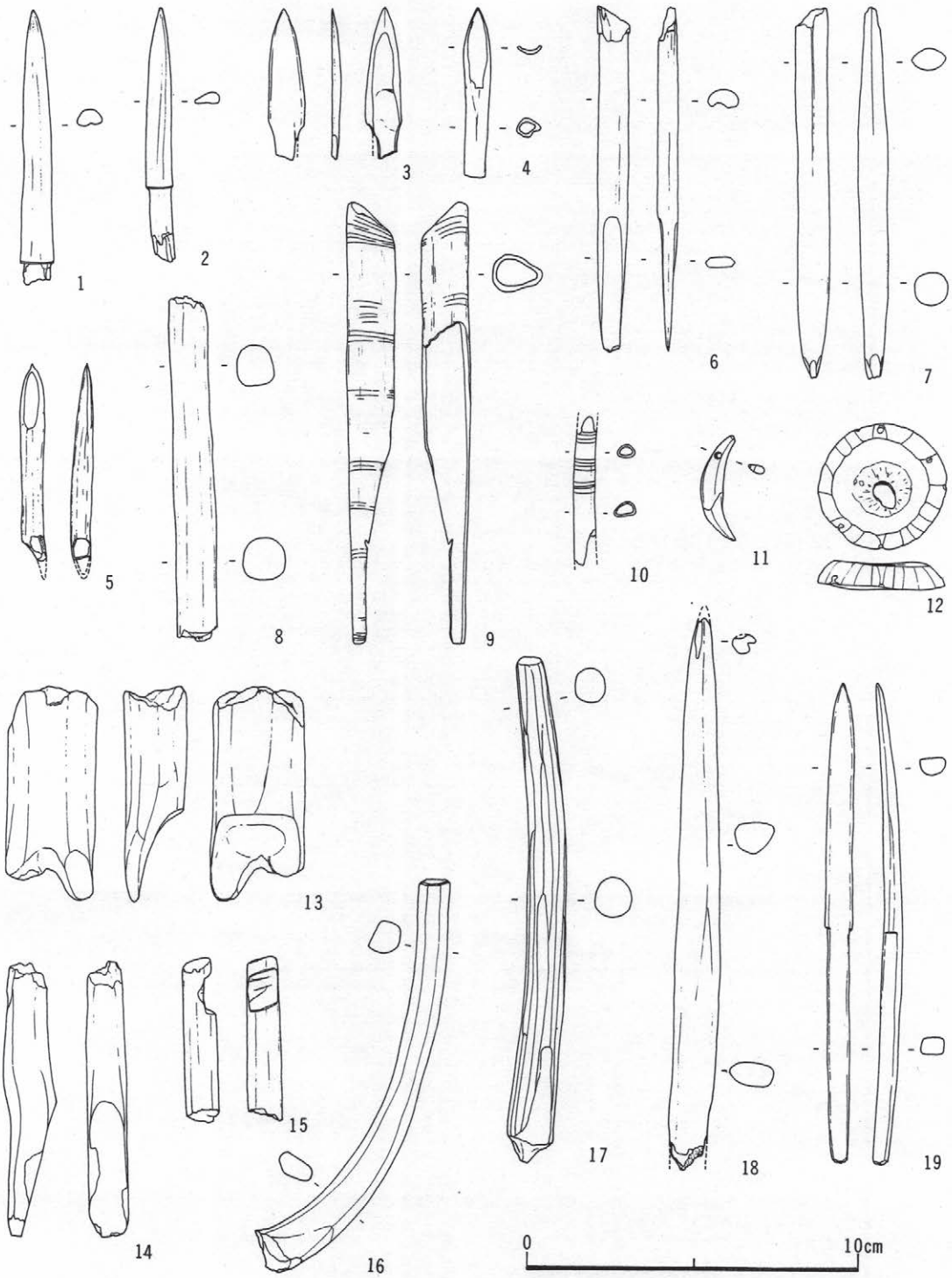




第30図　第３ブロック出土鹿角製彫刻実測図

が破損しているためはっきりしないが，やはり付柄の一部かもしれない。

９・10は鳥管骨に彫刻したものである。９は３本を基本にした平行線がめぐらされている。線は毛彫りで浅い。長さは17cmあるが，破損が著るしい。針入れと思われる。10も毛彫りの平行線がつけられているが，４本一組になっている。両端が欠損し大きさはわからない。９よりは細いが，やはり針入れであろうか。



第31図　第３ブロック出土（１～12）・表面採集（13～19）骨角器実測図

11と12は装飾品であろう。11はキツネの犬歯に孔をあけた垂飾。12は鹿角を薄く輪切りにし，穿孔したものである。中心にあけた孔は一部が破損している。周辺にも小孔をあけ全面を研磨している。バックルのようなものであろう。

第20図　1・2・3は第3ブロックの出土品であるが,大形なので，別に図示した。1は攪乱層からの出土。海獣骨の板に四角の切り込みがある。金属による工作らしく，鋭い切れ味がみられる。未製品なのかもしれない。2はシャベル状の製品の握柄部分と想定される。これも出土層位がはっきりしない。

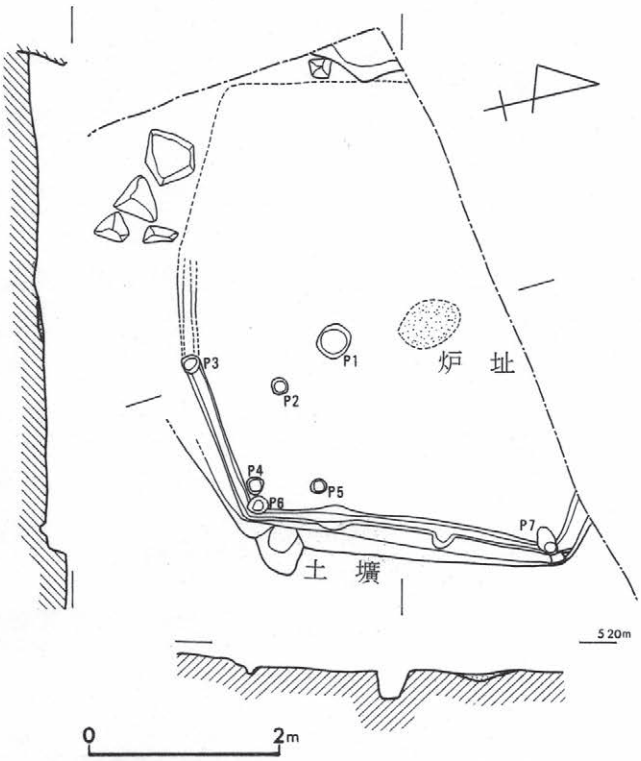
3は焼骨遺構の堆積中から出土した。先の部分が黒く炭化し崩れている。基部は平らに切られている。先端は箆状。1～3とも海獣骨製である。　（西谷・岡田）

5．住居遺構と伴出遺物

住居址（第32図）

今回の発掘で発見された遺構は住居址と住居址より古い土壙があげられる。

住居址は発掘区の北西部，D・E・I・Jの各グリッドにまたがっている。住居址の北側は道路で削られ，西側はローム面が傾斜して低くなっているために掘りこみがはっきりしない。掘りこみのはっきりした東側部分では一辺3.40mの直線的な東壁がみられ，直角より開きぎみに南壁と北壁に続いている。住居址の形状は南北壁のふくらんだ樽状と思われる。規模は推定であるが南北4m東西5m位と考えられる。西側は壁が存在しないがローム中から突き出た火山岩がみられ住居址内外の推定ができる。住居址の構造としては平均して幅15cm深さ10cmほどの周溝が壁下にめぐる。東壁部分では壁から15～20cmほど内側に入っている。西側では壁同様にはっきりしない。周溝は2ヶ所で幅を拡げる部分があるが深さには変化がない。柱穴は住居址に伴なうものが7本発見された。炉址に近いP1が径35cm深さ30cmの大きさである。他は15～20cmの径をもち深さはコーナーにあるP2，



第32図　住居址実測図

Ｐ６，Ｐ７が30cmであり，他のＰ３～Ｐ５は10～15cmで浅いものである。炉址は住居址の中央にあり南北65cm東西50cmの楕円形をした地床炉である。深い部分で５cmほどロームが焼けている。床面は高低差がそれほどなく水平である。遺物は石器が床面に密着して多く出土した。土器はほとんど覆土中から得られオホーツク式土器の破片は上部から出土したのが目立った。住居址の掘りこみが確認されたのはローム面からで，覆土と，ローム上に堆積している茶褐色土と区別がつかない状態であり，どの面から掘りこんだものかはっきりしない。

土壙は住居址の壁を検出中に南東コーナー近くに発見された。一端は住居址の壁によって切られているが短径50cm長径70cm位の楕円形の土壙と考えられる。深さは20cm。底は丸い。覆土は茶褐色土で焼土・黒色土・炭化物の粒状のものを含んでいる。覆土の中頃と底近くに黒耀石のチップが層になってみられた。土壙内からは石錘が一個出土した。

住居内出土土器（第33・34図）

第33図１～５は刻文の施されたものである。１は横に施文された刻文が２段あり，口唇は平担で口唇の角を指でつまむようにして刻まれている。２～５は隆起した部分に斜めの刻文が施されている。２は３段，３・４は１段，５は２段に施されている。

６～８は指先により刻みを入れると同時に粘土の隆起を作り出している文様。６・７は２段に刻みを斜めに入れ下方に粘土隆起をもっている。８は指先で両側からつまみ出している。

９は円形刺突文。外側から内側へ刺突されている。

10は無文で屈曲した口縁部である。

11は口縁部に棒状工具の先端による刺突が３段に行なわれている。

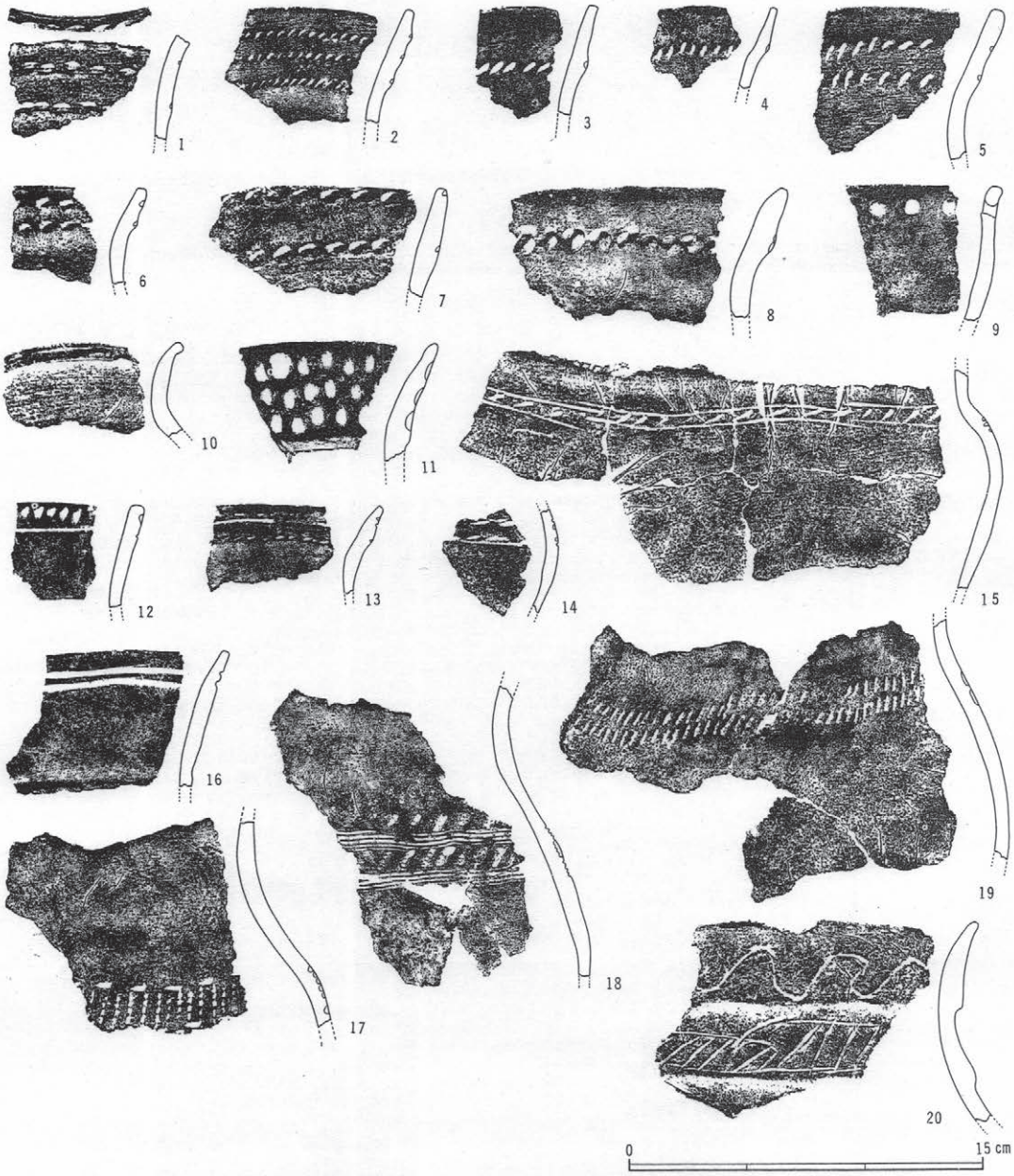
12～15は刻文に沈線が組合わさったもの。12は口縁上端に刺突状の刻文と沈線をつけている。13は沈線をはさみ上下に細かな刻文が施されている。14・15は肩部に２条の沈線間に刻文を入れた文様である。

16は口縁上端に２条の沈線が施されている。17～19は頸部から肩にかけた破片で胴が大きく張り出す器形である。それぞれ肩に文様が施されている。17は列点状の型押文を縦に施し上下に横位の刻文を配している。18は櫛状工具による集合沈線と列点状の型押文を斜めに交互に施している。19は刻文を２段に施している。

20は沈線文で口縁上部には波形に下部には２本の沈線間を斜めの沈線で埋めている。

第34図１～14はススヤ式土器である。１～６は口縁部に平行撚紐押捺文をもつものである。１は大きく外反する口縁部が特徴的である。口縁部には２本一組の撚紐を８組押捺し下側には馬蹄型の押捺が施されている。口唇部も２本一組の撚紐が間隔をあけて押捺されている。口唇部直下には外側からの孔があけられている。胴部に縄文は施されていない。２も口縁部に２本一組の撚紐が４組押捺されている。口唇部は口唇に平行した押捺が施されている。口唇直下にやや太い孔があけられている。胴部に縄文をもっている。

３～５は口縁下部の破片で２本一組の撚紐の押捺とその下に馬蹄形の押捺が施されている。胴



第33図　住居址内（上層）出土土器片拓本

部には縄文が施されている。6は太い撚紐を用いている。

7～11は口唇部の文様と口唇部直下の孔列を特徴としている。7・9は口唇部に撚紐による馬蹄形の押捺が連続して施されている。胴部は縄文が施されている。8・10・11は口唇部に斜めの撚紐の押捺が施されている。胴部には縄文が施されている。11は器壁がとくに厚い。

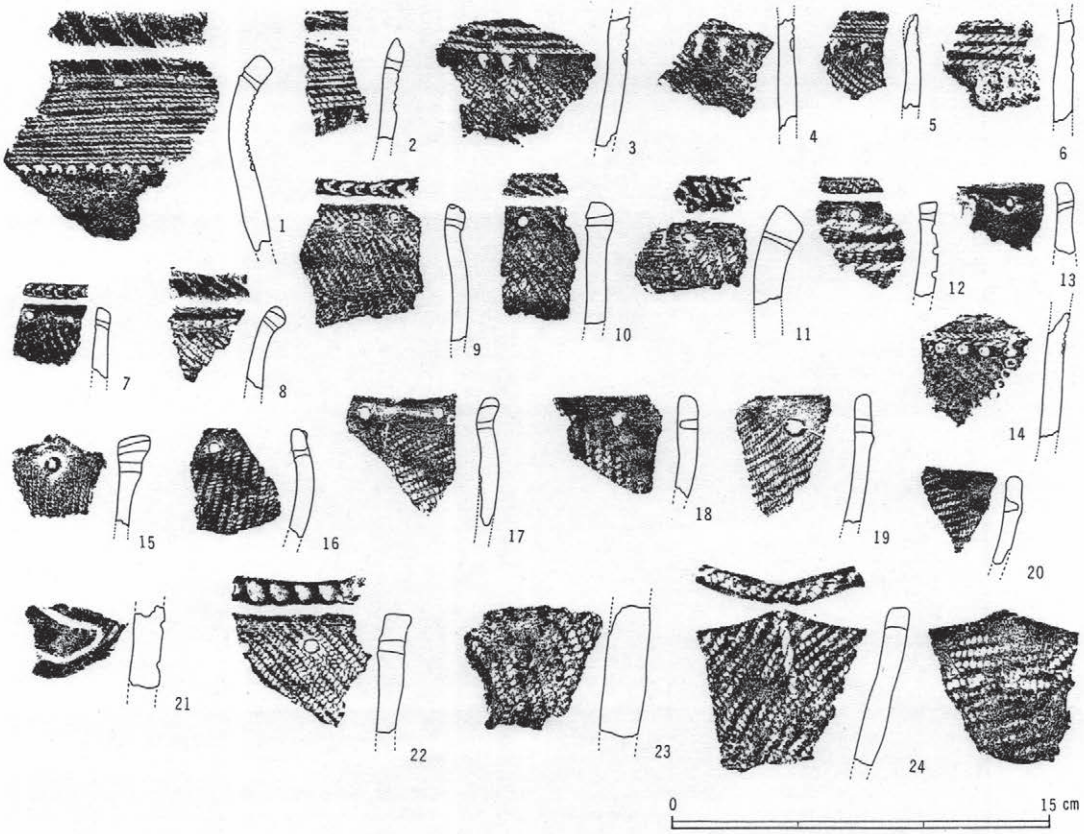
12は口唇部に縄文が施され，口唇直下に孔があけられている。口縁部は縄文の地文上に撚紐の

押捺が3段施されている。

13は無文で口縁上端に孔列があけられている。

14は撚りの異なる撚紐を組合せ押捺している。竹管の刺突の文様と組合わせている。

15～20は口縁上部の突瘤文と胴部の縄文を特徴とした土器である。突瘤は内から外へ行なわれている。15は口縁に突起部があり肥厚している。16は口唇にキザミが入っている。17も突起部がある。



第34図　住居址内出土土器片拓本

21は縄文を地文とし太い沈線で文様を描いている。

22は口唇部にヘラ状工具により押しつけた文様がある。口縁上部に外からの突瘤文が施されている。地文は縄文。

23は縄文を地文としている。

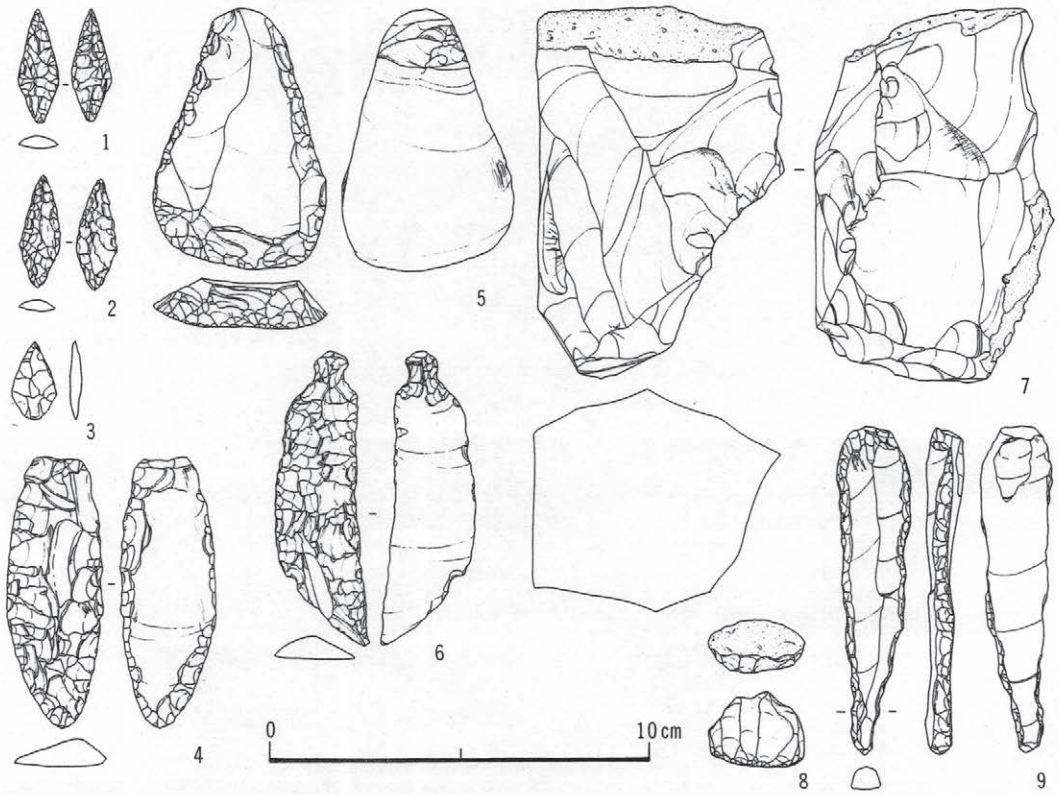
24は口縁の突起部分である。表裏面に縄文が施されている。突起部から縦に撚紐の押捺がある。口唇部には縄文が施されている。

住居址内出土石器

住居址の覆土および床面出土の石器は第35・36図に図示した。そのうち床面から出土したものは第36図である。

第35図 1～3は石鏃で，1・2は細長い鏃身に短い茎をもつ。3は小さな葉形のものである。1・2は丁寧な剥離が行われている。4はナイフ。縦長の剥片を用い背面全面と，主剥離面の周辺に調整が加えられている。5はエンドスクレイパー。幅広で大型の剥片を用い，角度が急で直線的な刃部をもっている。6はつまみ付ナイフ。ブレード状の縦長剥片を用いている。背面にのみ調整を加え，主剥離面はつまみ部分だけに調整が加えられている。つまみ部分は小さい。7は石核。石核の稜の部分を打点として左右に剥離している。8も石核で，一面に自然面を残し，小剥片をとっている。9はドリル。ブレード状の縦長剥片を用い，左右の側縁に角度のある調整剥離を加えている。先端は台形状になり，磨滅が著しい。

以上の石器は住居址覆土中から出土した。

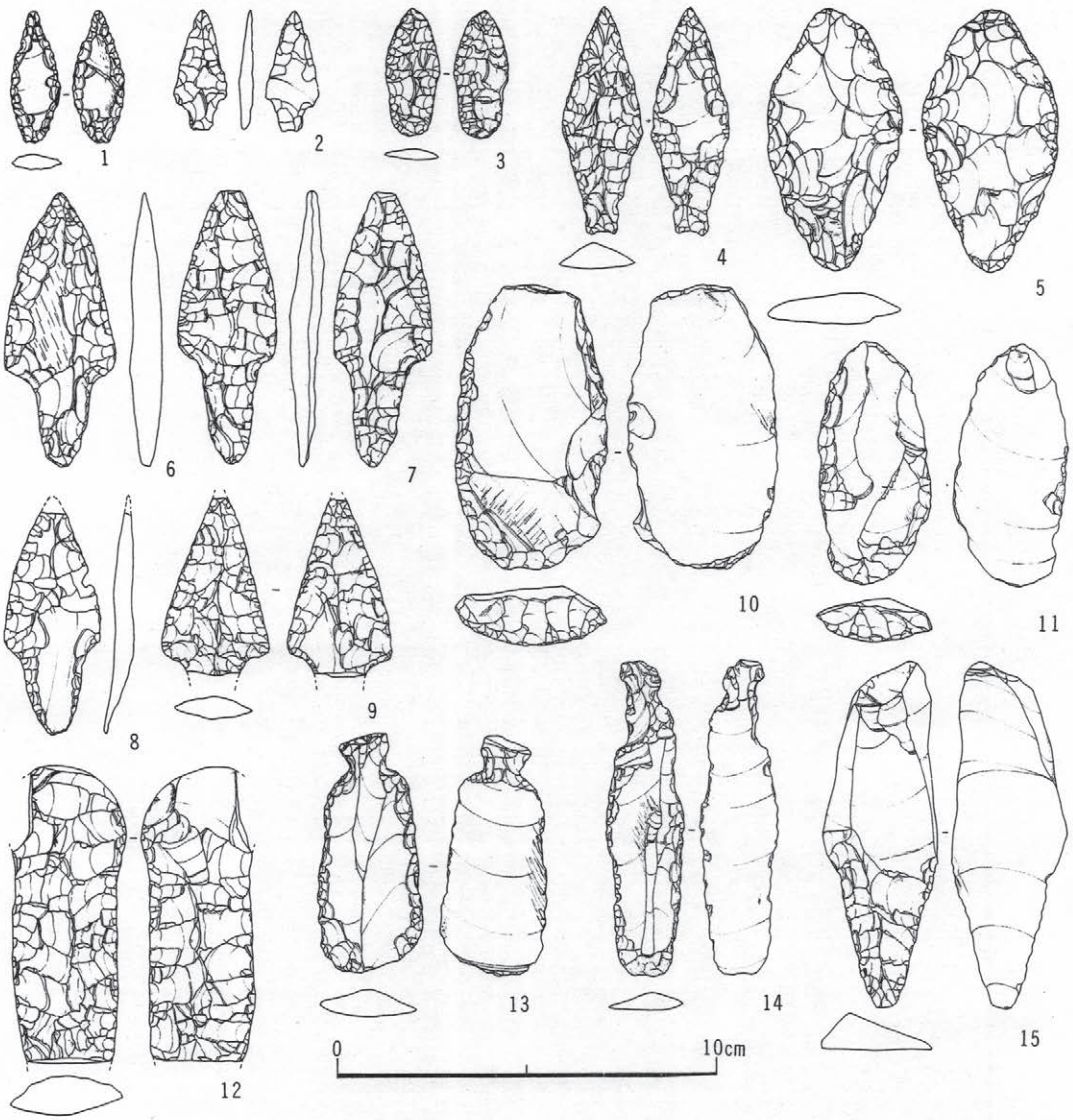


第35図　住居址内出土石器実測図

第36図１～３は石鏃である。１は剥片の周辺に粗雑な剥離を加えて葉形に形を整えている。２は長い鏃身に舌をもつ。全体に大まかに剥離されている。３は幅広の鏃で丸味をもった大きな茎をもつ。丁寧に剥離が行われている。

４は石槍か。尖端は鋭く仕上げられ，基部は柄をつけ易く細くなっている。断面は三角である。５はナイフ状のものか，幅広の葉形で両面加工され，身が薄い。調整はおおまかに加えられた後，周辺部に細部加工が加えられている。

６～９は石槍である。６は鋭く直線的な先端と細い基部をもっている。ブレード状の剥片を用い断面が三角形で裏面の中央に一次剥離面を残している。６～８はほぼ同一の形状をしている。



第36図　住居址床面出土石器実測図

側辺がやや膨らんだ先端部と細い舌部をもっているのが特徴である。8は薄い剝片を用いている。9も同じタイプの石槍と思われるが，舌部を欠損しており先端部の側辺は直線的である。

10・11はエンドスクレイパー。いずれも縦長の大形剝片を用い，剝片端に刃部をもっている。10は角度の急な刃部でしかも幅が広い。11は角度のない円形の刃部となっている。

12はナイフ。先端部を欠損している。基部は丸い。表裏に剝離が加えられ，断面がレンズ状をしている。

13・14はつまみ付ナイフ。13は幅広，14は縦長の形状である。両者とも素材の背面の周辺に調整を加えている。主剝離面側はつまみ部分にのみ調整が加えられている。

15は一種のナイフであろうか。縦長剝片の打点側に片面加工され，刃部を作り出している。

（椙田）

6．続縄文等下層の遺物

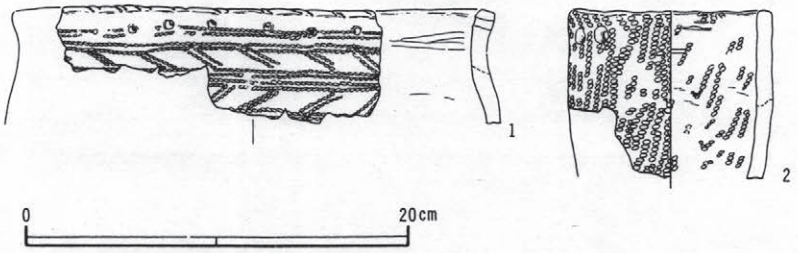
オホーツク式文化層の下，断面図では5層として示した茶褐色土層からは，さまざまな土器片が出土する。まとまって発見されたものは一つもなく，小破片が多く斉一性がない。この文化層の成り立ちについて苦慮するところである。

オホーツク式土器の破片も出土するが，これは上層からくい込んだものと考えられる。茶褐色土層の下半からは出土しないこともこれを示している。オホーツク式土器を除くと，ススヤ式土器片，縄文・続縄文各時期の土器片が残るが，このなかではススヤ式土器片が圧倒的に多い。第37～39図に示したのがそれ等の土器片であるが，このなかには上層に入り込んでいたものも加えてある。

第37図実測可能な土器片がほとんどないなかで，口縁を復原できた土器を示したのがこの図である。

1はススヤ式土器で，住居址の南東壁上に近いHグリッドの茶褐色土層から出土した。

口唇下が少しすぼんだ鉢型土器の口縁部と思われる。口唇上に右撚りと左撚りの縄を一組にして斜めに押し付けているが，これは撚糸文と同じように棒に巻き付けたものを押し付けたのでは



第37図　ススヤ式土器（左）・縄文土器（右）実測図

ないかと思う。口唇下にはやはり２本取りの縄を２列ずつ３回押し付け，その間に同じく２本取りの縄を斜めに押している。斜めの縄文様は２段あるが，上段が右下がり，下段が左下がりで矢羽あるいは魚の脊椎状を呈している。文様帯はこれで完結するらしい。最上段の縄の直上には最後に表面から小孔をあけている。

胎土には小砂利をかなり含んでいるが，器壁は薄く，水ナデで表面を滑らかに整えている。色は明るい茶褐色，黒色の部分もある。

２は表裏とも縄を転がしてつけた模様のある，小形の円筒形土器である。口縁に文様帯はない。口縁の一ヶ所に並んだ２ケの補修孔がある。器壁は厚く，表裏とも磨滅が著るしい。縄文後期の土器であろうか。

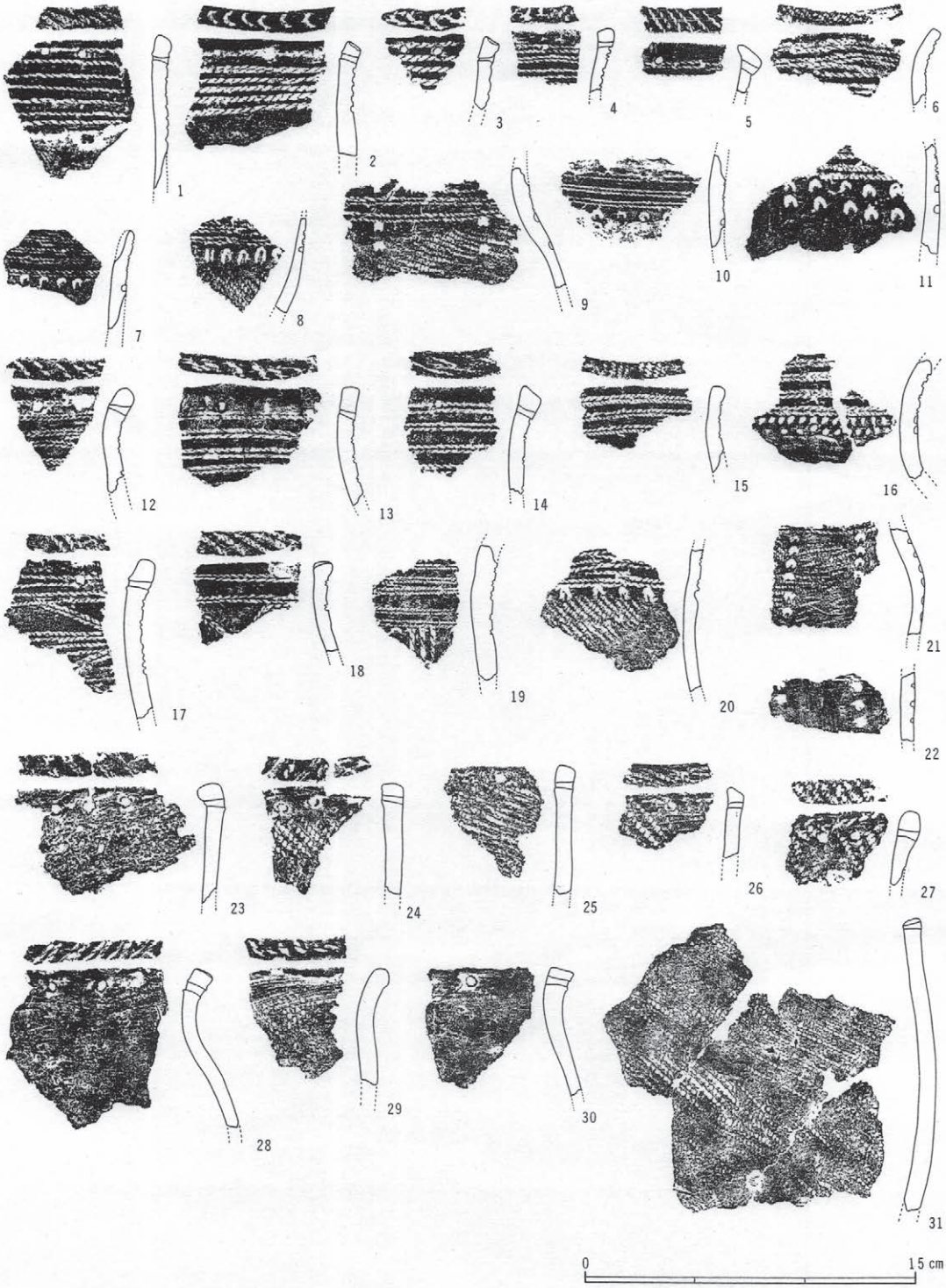
第38図　Ａ・Ｃ・Ｅ・Ｇ・Ｈ・Ｊ各グリッド茶褐色土層出土の鈴谷式土器を図示した。本層出土のいわゆる鈴谷式土器の文様要素には大きく分けて２つのタイプがみられる。ひとつは，口縁に撚紐圧痕を何条か重ねて繞らし，その下位に縄をループにして押圧し，胴部に縄文を付す。他のグループは，いわゆる口縁部に撚紐圧痕をもたないで，口縁下から斜行の縄文を付すものである。両者に共通している文様要素は貫通孔だけである。以下，それぞれのグループごとに説明する。

１～22は口縁部に撚紐圧痕をもつグループであるが，細部においてちがいがみられる。撚紐圧痕を１条で口縁部に繞らすもの（１～３），２条一組として繞らすもの（４～22）がある。後者のうち，お互いの撚りの方向が同じもの（４～11）方向が違うもの（12～22）がみられる。次に撚紐圧痕文の下位に馬蹄形文をもつもの（12～22）がみられる。１段の馬蹄形文を並べるもの（７・８・10・20），２段縦に垂下させるもの（９・11），３段以上垂下させているもの（21・22）がある。また馬蹄形文のかわりに刺突文を２段重ねて繞らすもの（16）がある。また胴部に縄文をもつもの（８・９・20・21）があり，馬蹄形文より下位に斜行に施すもの（８・20），さきに縄文を施し，その上から馬蹄形文を施すもの（９・21）もある。口縁部破片（１～６，12～15，17・18）はすべて口唇上にも施文されている。貫通孔がみられないのは僅か３例（６・15・18）である。

口縁部に撚紐圧痕をもたないグループも細部においてちがいがみられる（23～31）。すなわち，口縁部あるいは胴部に縄文をもつもの（23～27，29～31）と，もたないもの（28・30）とがある。貫通孔は１例（29）を除いてすべての資料にみられる。また口唇面に施文したものは６例（23～29）みられる。

以上，大きく２つのグループに分けて文様要素の違いを述べてみた。それぞれの文様要素が，仮りに器形をいくつかに分類できたとしたら，それぞれの相関関係をとらえることが可能であろうと予想していたのであるが，土器片が小破片のため残念ながら明確な相関関係を捉えることはできなかった。

さらに本遺跡出土の鈴谷式土器で特徴的なことは，炭化物の付着である。炭化物の付着がないものは５例（４・５・８・22・26）だけであり，他はすべて付着する。内面に著しく，時には表面に付着しているものもある。



第38図　ススヤ式土器拓本

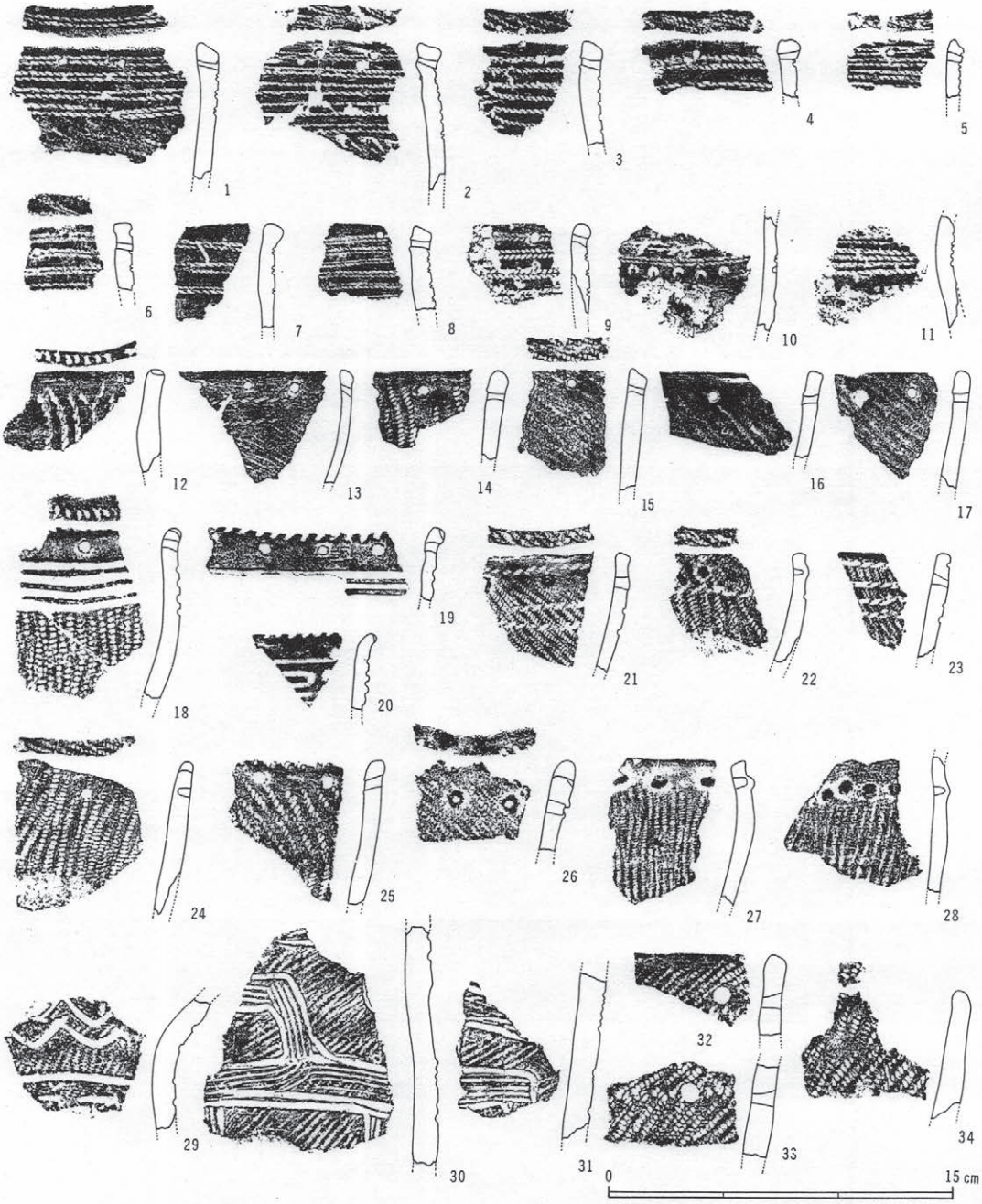
第39図に示した鈴谷式土器は文様要素を大きく分けて2つのタイプに分けることができる。口縁部に撚紐圧痕文を何条か繞らすものと（1～11),口縁部に撚紐圧痕文を持たないで，斜行の縄文を付するもの（12～17）とである。しかし，これらの文様要素のちがいは器形の変化とは結びつかないようである。すなわち，第38図に示した口縁部の器形をみる限り，大きな違いはみられない。鈴谷式土器は一般に口縁部が垂直に立ち上がり，口唇が内外に肥厚する器形を呈する。以上，2つのタイプの文様要素について記載したが，それぞれの文様要素において，細部には違いがみられる。例えば，口縁部に撚紐圧痕文を施すグループでは，1条の撚紐圧痕文を何段か重ねるもの（3），2条一組として何段か重ねるもの（1・2・4～11）撚りの方向が同じもの（1～8，10・11),撚りの方向が互いに違うもの(9)がある。さらに貫通孔は,7を除いてすべての資料にみられる（1～6，8～11)。また，撚紐圧痕文の下位に馬蹄形文をもつものは1例（10）だけである。他のグループでは，斜行縄文をもつものは5例（13～17）あり，13は口縁直下に内から外に突いた貫通孔を施し，その下位に撚紐圧痕を2段繞らし，その下地に斜行の撚糸を施す。14は口縁直下に内から外に突いた貫通孔を繞らし，貫通孔とほぼ同じ高さで，縄文を付す。15では口縁に沿って，縄文を施し，口唇面にも同じ原体のものを施文している。また，口唇直下にはやはり内側から突いた貫通孔が施されている。16・17は口縁からやや離れたところで貫通孔を繞らし，斜行の縄文を施文する。

12の例は，口縁部に撚紐圧痕文を半孤状に4条施し，互いに向い合っている。

18～34は鈴谷式土器以外のものである。

18～20はいずれも口縁部破片であり,口縁部はほぼまっすぐに立ち上がる。文様は口唇上に刻みを施し，口唇直下に貫通孔を繞らす。また，その下位に沈線文を何条か繞らす。18では先に縄文を施文し，その上に沈線文を4条施文している。いずれも色調は黒色を呈し，炭化物の附着が著しい。

21～28は口縁部に突瘤文ないし貫通孔をもつ土器群である。細部においてかなりのちがいがみられる。21・22は口縁部に撚紐圧痕文をもつ。2例とも口縁部破片で，口縁部は僅かに内弯する。文様は，地文の縄文を施し，その上に口縁に平行な撚紐圧痕文を施す。21は3条，22は1条繞らしている。また口唇面に地文の縄文と同じ原体を用いて施文する。また内から外に向って突瘤文をつくる。23は前の2例と同じで，地文の縄文の上に、撚紐圧痕文を繞らすのであるが，口唇に施文されないこと，突瘤文が外から内に刺突される点がちがう。24～28は口縁部に縄文を施文していることで共通する。口縁部器形は24～26は僅かに外に開き，27は内弯する。文様は24・25は突瘤が外側から内側に向って施される。口唇下から縄文が施され，口唇面にもみられる。26～28は口唇下から縄文が施され，突瘤は内から外に向って施される。口唇施文は26だけである。28では刺突した後で，内側を整形し，穿孔を一部塞いでいる。29～31は斜縄文を地文とし，沈線文を施しているものである。直線あるいは曲線を用いて幾何学的な文様を描いている。厚手の土器である。32～34も厚手の土器である。口縁部破片は32・34の2例ある。口縁部はほぼまっすぐに立ち上がる。文様はいずれも斜行縄文を施してあり，34では口唇面にも同じ原体を用いて施文して

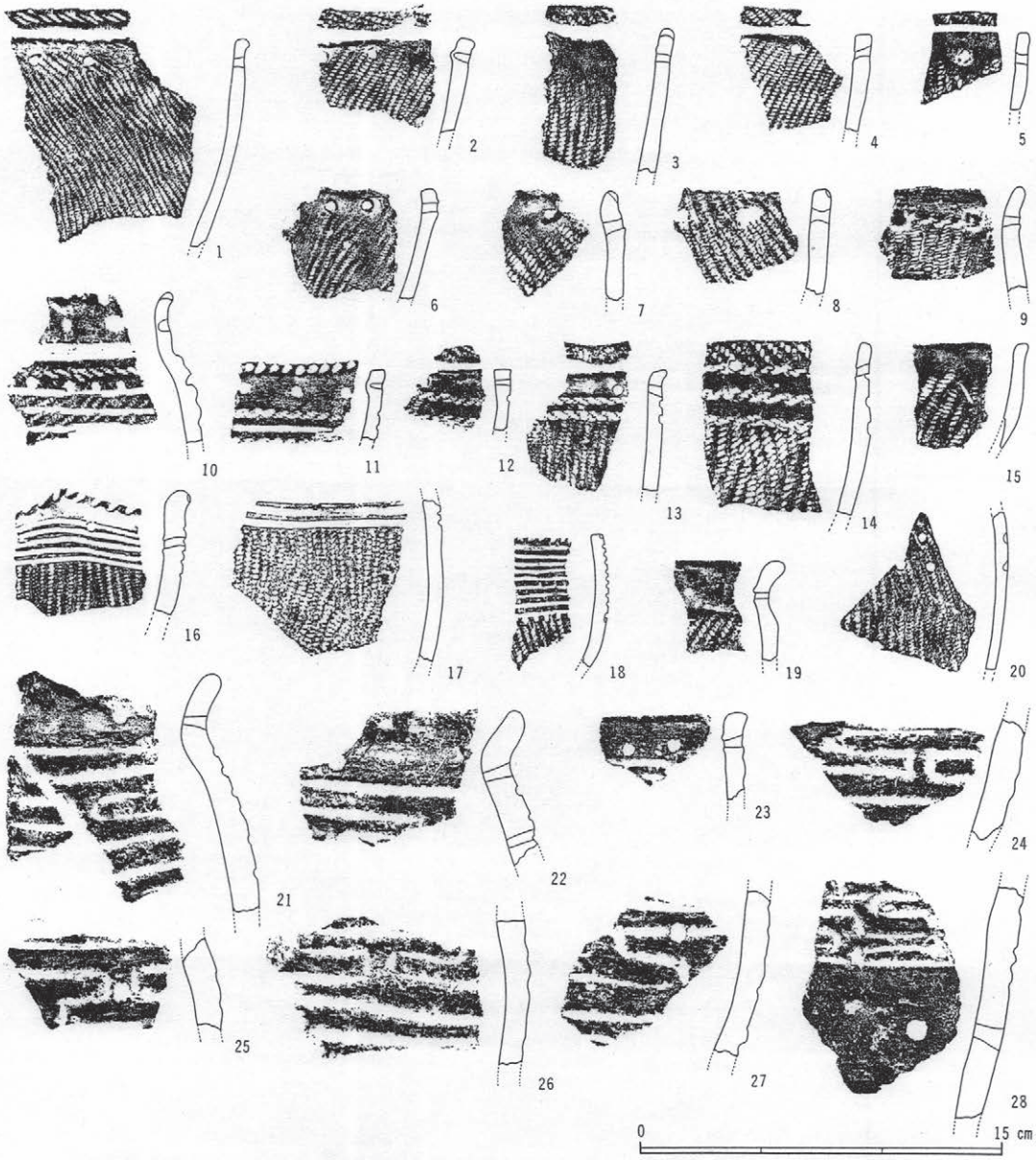


第39図　ススヤ式土器片・縄文土器片拓本

いる。

第40図は，Ａ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ区の茶褐色土層出土の縄文期・続縄文期の資料を一括して図示した。１～９は口唇下から斜行縄文あるいは撚糸文を施し，貫通孔あるいは突瘤文をもつグループである。口縁部は内弯するもの（１・６・７），外にやや開くもの（２～４・８），わずかに外反するもの（９），ほぼまっすぐに立ち上がるもの（５）がある。文様は口唇直下から斜行の縄文を施文するもの（１・２・４・８）と少し離れてから縄文を施文するもの（３・５・６・７・９）がある。８を除いてすべてに突瘤文をもつ。（拓影図では貫通孔のように見えるが，これは瘤の部分が剝落しており，明らかに突瘤文であったことがうかがわれる）。内側から外側に突くものが多く（１・３～７，８）外側から内側に突くのは１例（２）だけである。口唇に口縁部と同じ原体を用いて施文するものが５例（１～５）ある。

10～14は口縁部に，口唇と平行な撚紐圧痕文を施文するものである。いずれも口縁部破片である。10は肩部が丸くふくらみ口縁が僅かに外反する。11～14は口縁部が僅かに外に開いている。文様は口唇面に斜めの刻みを入れ口唇下に外から内に突く突瘤文を施す。頭部に沈線を２条重ねて施文し，肩上部に撚紐圧痕文を１段繞らす。また肩部には地文の斜行縄文を施し，その上に沈線を３条繞らす。また最上位の沈線文にかかるように縄の先端のようなものを用いた刺突がある。11は口唇面に刻文を施し，口唇下に外から内に突く突瘤文を施す。またその下位に撚紐圧痕文を施し，沈線文を繞らす。12は口唇直下に内から外に突く突瘤文を施し，その下位に斜行縄文を施す。その上から撚紐圧痕を施す。口唇には地文と同じ原体で施文する。13は口唇下に内から外に突く突瘤文を施しその下位に撚紐圧痕を２条繞らす。縄文の地文があるが，口唇縄文はそれと同じ原体である。14は口唇直下に斜行縄文を施し，その下位に撚紐圧痕を３条施文する。またその下には縦方向の縄文がある。外から内に突く瘤文は最上位の撚紐圧痕と重なる。15は口唇全面に縄文を施文している。口縁はほぼまっすぐに立ち上がる。16～18は口縁部に何条かの沈縁文を繞らし，その下位に縄文を施文するものである。口縁部破片は２例（16・18）あり，16はほぼまっすぐな立ち上りをなすが口唇付近が外に反る。18はゆるやかに内弯している。16は波状口縁を呈している。文様は口唇外縁に刻みつけ，口縁部に沈線文を５～９条繞らす（16～18），いずれも沈線文の下位に縄文を施文する。16には貫通孔がある。19は口縁部が外反する器形を呈する。文様は貫通孔を口縁部に施し，張り出しの部分から斜行縄文を施文する。20は縄文を施文しその上から先の丸い棒状工具を用いて刺突する。21～28は厚手の土器で幅の広い沈線文を用いて文様を描くものである。口縁部破片は３例（21～23）ある。口縁部が外に開くもの（21・22）とまっすぐに立ち上がりをなすもの（23）とがある。文様は直線の沈線を用いて描いている。21・22・24～28は同一土器の破片と思われる。（西谷）



第40図　縄文土器片拓本

7．表面採集の遺物

表面採集の遺物として一括したもののなかには，攪乱層や工事の排土から採集したものが数多く含まれている。

工事の排土中に含まれていた土器片はダンボール箱２杯に及んでいる。また攪乱は発掘区域の殆んどすべてに広がっていた。この攪乱は次の理由によるものである。

① 第１ブロック付近の攪乱は昭和52年，宗谷バス利尻営業所を改築する際，建造物を取り壊わした時におきたものである。

また改築前の建造物を建築する時に生じたものもあり，二度にわたり攪乱されていた。

また以前の建造物を建築する時に整地のため盛土をしていた。その盛土の下の包含層は良好に残されていた。

② Ｃ・Ｈ・Ｍグリッドを結ぶ東側半分は盛土がなされていた。

③ Ｃ・Ｈ・Ｍグリッドから西の発掘区は大正時代から鰊干場となっていたため，さきり（丸太を組み合せ，魚などを干すために使用するもの）による穴が数多くみられ，その部分は攪乱されていた。

発掘区のＢ・Ｃ・Ｄ・Ｇ・Ｈ・Ｉグリッドの攪乱層および排土からはオホーツク式土器が多くみられ，Ａ・Ｂ・Ｆ・Ｇ・Ｋグリッドからは鈴谷式土器が，Ｄ・Ｇ・Ｈ・Ｉグリッドからは鈴谷式土器に混じって縄文式土器が多く見られた。

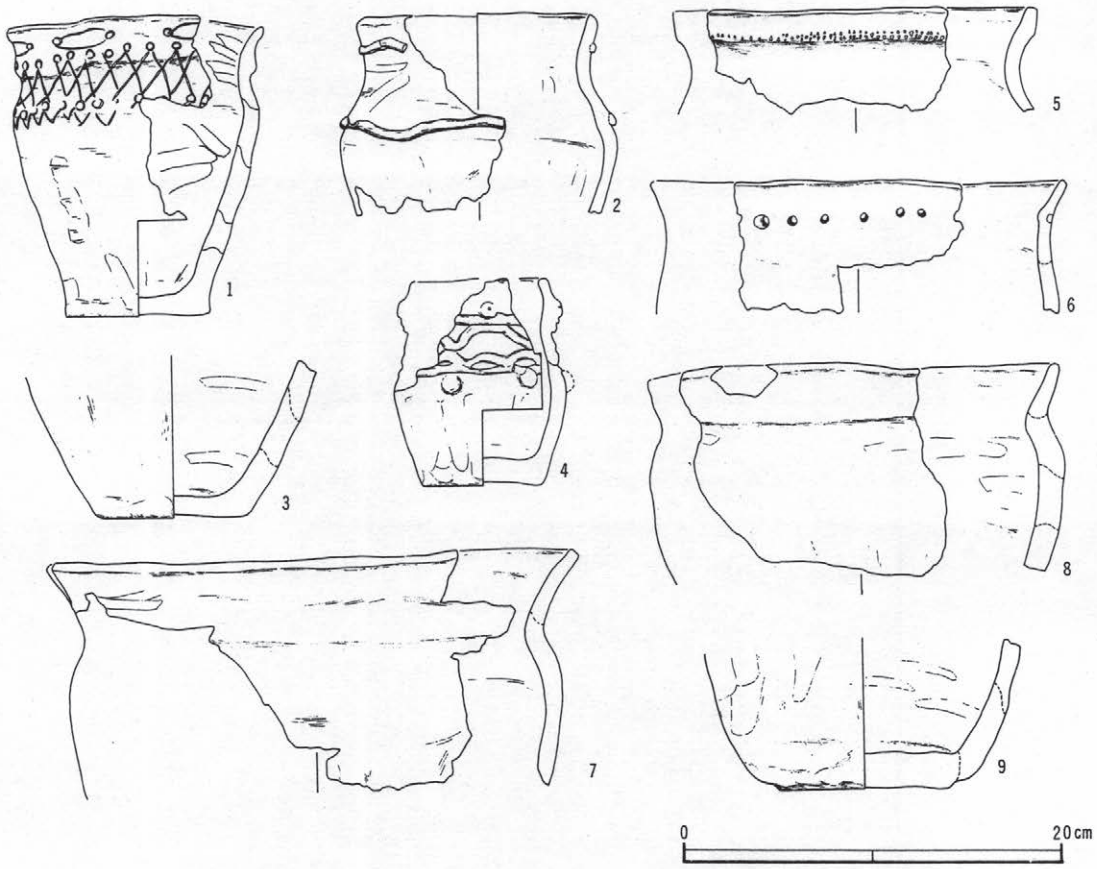
土器（第41・42図）

第41図１は赤褐色の小形な土器で，第３ブロック付近の排土中から発見された。器壁は厚く，焼成・整形もオホーツク式土器とは思われない。文様は擦文土器を思わせる沈線の斜格子が稚拙に描かれ，その頂点に小さな円形が印されている。第22図１・２の小形完形土器と同じ存在だったと推定される。表面には巻上げのあとが残り平滑ではない。また，箆ケズリのあとが内外ともにみられ，底部は外に張り出している。

２・４も第３ブロックの排土中から発見されたもので，やや太めのソーメン状貼付文がある。２は口縁と肩部に波形の貼付文をつけているが波状は不規則である。胎土には砂利の混入がなく，色調は茶褐色，一部黒味を帯びた部分もある。小形甕形土器。４は非常に小さな土器である。器壁は厚く器形も特異である。太めのソーメン状粘土紐を直線に２本，その間に波状に２本貼付けている。粘土の球も貼付けているが，口縁部の球の中央には刺突がある。胴部の球は６個つけられたらしい。貼付はいずれもよく押しつけられている。土器表面は縦方向の箆ナデ。

５・６は，第１ブロックに属する土器ではないかと思われる。５は口縁下の肥厚部に櫛状工具による刻文のある甕形土器，６は口縁下に外側からの円形刺突文をつけた深鉢形土器である。

７・８・９は同類の土器である。第１ブロックの上層から出土した土器（第５図５）や第３ブロック出土の無文土器（第22図10・14）と同じ仲間と思われる。７は赤褐色で口縁内側に炭化物が付着している。胎土には砂粒を含む。この種の土器は比較的厚手で，口縁から胴上部にかけて，



第41図　表面採集土器実測図

横位の篦または指によるナデがみられる。胴下半には縦位のナデもみられる。

第42図1は摩擦式浮文をもつものである。やや外反し，口縁部から7条の凹線を密接して6稜を作っている。

2は貼付文をもつものである。口縁部直下から巾2cm間隔で3本の粘土紐を貼りつけ，その上から更に刻みをつけている。

3と4は円形刺突文をもつ土器である。3は口縁部直下に2条の刺突文がめぐらされており，その刺突は深く内側に瘤を作っている。刺突の下から胴部にかけての刻文が複合されている。

4は3と同じように刺突は深くほぼ内側に達するほどであり，それにより内側は段差が生じている。また3本の沈線が施されている。

5は口縁直下に2条の波状の浮文が施されている。その下に同じ浮文により特異な文様を作っている。9・10は擦文式土器である。

9の器形はゆるやかに頸部から口縁部にむかって外反している。口縁部にV字文を施こし，その下に4本の沈線を施こしている。

第42図　表面採集土器片拓本

10は口縁部に突帯を施こし，胴部にかけて擦痕を施こしている。

排土，攪乱層から比較的多くの鈴谷式土器が出土している。図に示した23片の土器片をみると，口唇部に口縁部と同じ文様が施文され，口縁直下に外から内への貫通孔が施されているという点で共通している。しかし撚紐圧痕文の有無と胴部の縄文の有無とに差がみられる。その差異から２つに分類されるのではないかと思われる。それは６～８，11～17のように撚紐圧痕文をもち胴部に縄文がないもの①，18～30のように胴部に縄文をもつか，地文に縄文をもつもの②の２種である。

①のタイプでは，６，14，17（口縁部を欠く）以外は口唇部の文様と口縁部の文様が一致している。それは16の竹管文でもその例外ではない。更に細部についてみると次のような変化がみられる。

口縁部と平行に１本の撚紐で圧痕をつけているもの；6は口縁部に5段の圧痕をもつ。1本づつ５回押圧したものと思われる。口唇部は貫通孔の上の所に刻文をもっている。

７は口縁部に貫通孔は見られない。口唇部と口縁部の文様は一致している。６段の圧痕を口縁部にめぐらし胴部にかけ同じ撚紐での文様もみられる。

一段の撚紐を２条並べて圧痕するもの；８は口唇部と口縁部の撚紐は一致している。一段目の圧痕文の上から貫通孔がみられ，四段目には撚紐を施文した時におり返したループがみられる。また胴部には波状に撚紐を押圧している。

11は２条の撚紐を４段に施文し，口唇部と口縁部の撚紐は一致している。貫通孔は撚紐にかかっていない。

12は撚紐を矢羽状にして７段に圧痕している。撚紐を始めから矢羽状にしているのは，これだけである。貫通孔は一段目の下にもち，口唇部と口縁部の撚紐は一致している。

13は撚紐をどう施文したかを理解させる良い資料である。口唇部におり返しをもつ２条の紐を押圧したことが一目でわかる。口縁部に５段の圧痕があり，貫通孔は一段目の上からつけられている。

14は口唇部と口縁部の施文が一致しない。口唇部は刻文の点列がある。撚紐圧痕を口縁部に４段めぐらし，胴部には８と同じような波状がみられる。貫通孔は一段目の撚紐上からつけられている。

15は口縁部に２段に撚紐が施文されているが，交互に施文されているため矢羽のようにみられる。貫通孔は撚紐の上部にみられる。

撚紐圧痕文に他の文様を組み合せたもの；

16は２段の撚紐の間に竹管文の細かな点列がある。口唇部にも竹管文を施し，貫通孔は撚紐の上部にみられる。

17は撚紐圧痕文の下部に２段に刻文をもつものである。

②のタイプは口縁部に貫通孔をもち，口唇部にも口縁部と同じ文様をもち，焼成度，色調など①のタイプと同じなので一括して鈴谷式土器と分類した。

18は２段の撚紐圧痕がみられ，その上部に四角の刻みがみられる。撚紐の直下から胴部に斜行縄文が施文されている。撚紐と縄文とは同一のものではない。

19は口唇部の縄文と口縁部から胴部にかけての縄文が一致する。口縁部の貫通孔は縄文の上からつけられている。

20と21は同じ手法で口唇部の撚紐と口縁部からの縄文と一致しない。貫通孔帯の部分は縄文を消してつけられている。

22は口唇部に文様がなく，貫通孔帯の部分は縄文を消してつけられている。

23と24は口唇部の縄文と口縁部からの文様と一致する。貫通孔は縄文の上からつけられている。

25も縄文は一致するが，貫通孔帯の部分の縄文が消されている。

26は口唇部の外側に刻目の点列をもち，貫通孔帯の部分は縄文を消してつけている。

27は口縁部から縄文をもつが，貫通孔の部分のみ，縄文を消してある。

28は貫通孔の下から縦位に縄文が施されており，口縁部の貫通孔がはっきりしている。

29は口唇部の文様と胴部の縄文と同じものを用い，口縁部には４段の撚紐圧痕文を施し貫通孔は一段目の撚紐部分にかかっている。

30は口唇部外側に26と同じように刻文をめぐらし，貫通孔帯は縄文を消している。なお口縁部から胴部にかけての縄文の上に２段の撚紐圧痕文がみられる。

31～33は恵山式土器で，口縁部から頸部にかけて磨消帯をもち，その磨消帯に沈線文をもつものである。また胴部に縄文をもつこととと口縁部に刻みをつけることが共通している。

31は口縁直下の磨消帯に内側からの突瘤文と３本の沈線をもち，32・33は貫通孔，33の沈線部分は４～５本になっている。沈線は折り返して描かれたあとがみられる。縄文は縦位の縄文である。34は後北式土器の胴部破片であろう。

35・36，38～42は厚手の縄文土器である。35・36・39は地文の上に沈線で文様を描いたもの，40～42は口縁部から一面に縄文をもち，沈線文をもたない。同時期の土器と思われる。縄文後期のものであろう。

37はいくぶん薄手で沈線によって器面全面に文様をもつものである。縄文晩期または，続縄文初頭の土器片と思われる。

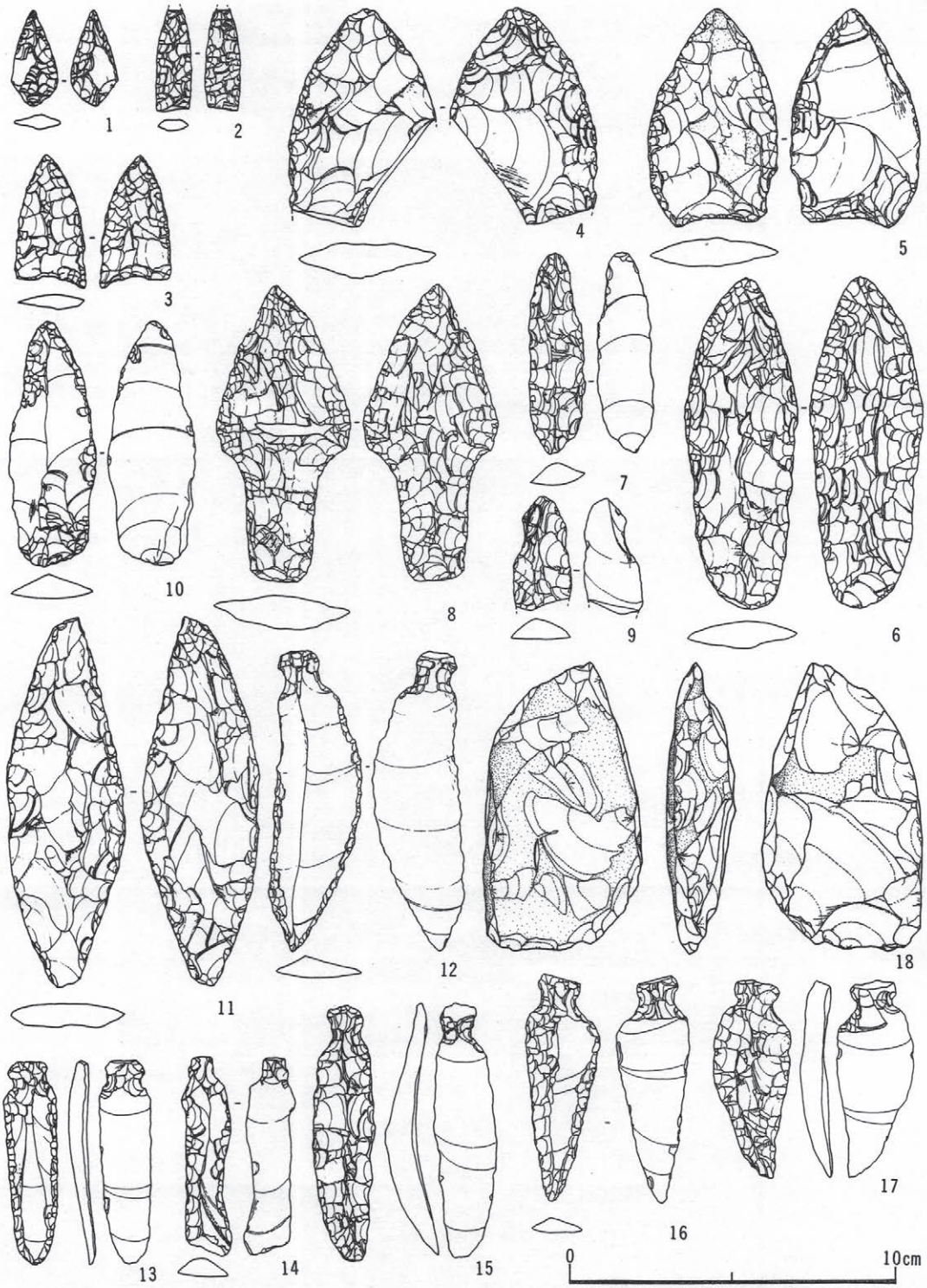
石器（第43図）

第43図は表面採集・排土からの採集品を集め参考までに示した。ほとんどのものが，発掘遺物のなかに同種のものをみいだせる。

11のナイフと思われるものは，Ｅグリッド西側の断面から採集したもので２Ｅ層に属する。12はＤグリッドからの排土中より採集。茶褐色土が付着していた。周辺だけを調整したつまみ付ナイフである。

３・８・10はＩグリッドの攪乱層中から出土した。石鏃・石槍・ナイフで，石鏃と石槍は丁寧に調整されている。ナイフは半製品かもしれない。

５はナイフかとも思われるが，薄い剝片を利用しており，先端が尖がって基部が内彎している



第43図　表面採集石器実測図

形態は大型の銛先鏃を考えることもできそうである。

18は石核を利用したものか,全面に剝離痕がみられる。その後周縁の一部に調整が加えられている。石斧のように使用されたものであろう。

石質は18を除いてすべてが硬質頁岩である。

骨角器（第31図）

第31図13～19は工事による排土中から採集された骨角器である。13はキテ型の銛頭の未製品で,先端部が欠損している。15は組合せ式釣針の一部，16も釣針の未製品であろう。角柱状に表面を削っている。

17は細かく縦に削ったあとがみられる，断面円型のものであるが，器種は不明。18は付柄であろうか。先端がきれいに磨かれているので，尖頭具の可能性もある。

19は尖頭具。先端部は半円形断面の尖頭器，基部は方形断面をもつ。とくに繊細な作りである。

（北風）

8．昭和25年の調査

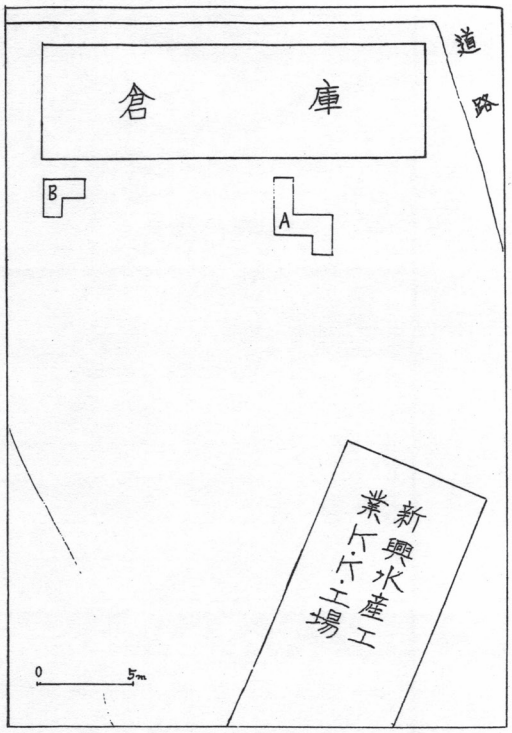
発掘　亦稚遺跡の発掘は，昭和25年８月２日，３日の２日間北陽工業KK沓形出張所長新岡武彦氏以下所員とその雇員によって行われた。ここにそれらの人々に感謝の意を表す。

発掘は，遺跡の北側に長さ20ｍの倉庫があり（昭和52年発掘区域はこの倉庫下),その南側に２ヶ所トレンチを入れた。すなわち新興水産の工場（南東の位置に西北面している)と倉庫(北側）との間の空地で，倉庫寄りを発掘地点と定めた（第44図）。

Ａ地点は倉庫の中央部に巾１ｍ長さ２ｍ，南北にトレンチを入れ，さらに南に１ｍ延ばし，南端より東に２ｍ，その先端より南に１ｍ延ばしたのであるが，最初のトレンチの西に於いて処女貝層に遇った。

表土は５～６cmの石炭がらの下に黒褐色土層が７～８cmあり，その下に40～50cmのウニ，アワビを主体とした獣，魚骨，貝殻の貝層があった。東に延長した部分は何れも攪乱されていて，陶器片や釘が出土し，貝層はなく，遺物は黒褐色土の中より出土する。

Ｂ地点は倉庫の西端南側に南北２ｍ巾１ｍの



第44図　昭和25年発掘地点平面図

トレンチを入れ，さらに北側を東に１ｍの巾で１ｍ延長した。この地点は20㎝程の石炭がらの下に７～８㎝の黒褐色土層があって，その下に1.4～1.5ｍの貝層があり，Ｂ地点では表土(石炭がら）下1.9ｍ程で樺太豚の頭蓋骨を発掘し，それより１ｍ程東の地点で水分を多量に含んだ亜炭化木材を発掘した。表土下1.8ｍ程度から貝層は水気が多く,ぐずぐずし初めたので発掘を打ち切った。

石器の出土はなく，オホーツク式土器片数片，骨製品，エゾシカの角などを出土した。

Ｂ地点は深い貝層で，その東西断面によれば傾斜をもっており，表土に於いてもそれが認められる。したがって，そのはじめＢ地点付近が斜面を形成していたため，その斜面に食料の食べかす（貝殻・獣・魚骨など）をすてたので，そこに層の厚い貝塚が形成されたものであろう。骨製品のみの出土で石製品の出土を見ないことは内路Ｂ地点と同様である。

骨角器（第45図）

尖頭骨器（第45図２）骨節の一端を残し，他の一端を尖がらしてある。現長12.5㎝ヒグマの排骨ではなかろうか。骨節の一端は握るのに具合よくなっている。

組合式釣針（第45図３）アシカの助骨らしく，頭部にくびれを作り，断面は扁平楕円の形で全体に彎曲をもつ組合式釣針の基部に相当するものである。

骨銛（第45図４）トドの骨らしく先端がカギの如くなっている。丸い棒状のもので折損している先端のカギ状のものは戻りで銛である。

骨製廻転式銛頭（第45図５）上泊遺跡出土の廻転式銛頭は完成品であるが，本遺物は未完成品でその形状から廻転式銛頭であることがわかる。

骨鋤の柄（第45図１）鯨骨製のＢ型鋤の柄に類似しているものであるが，下部が細く，両側と下側から削られてかなり細くなっているものである。本遺物は最初Ｂ型鋤を製作したものであろうが，刃部の破損によって，当初の鋤の製作を断念して他の何れかの道具を作ろうとしたものではなかろうか。この柄部だけを見ると，Ｂ型鋤を思うのであるが，本遺物だけで一製品であるか，それとも未完成品（失敗品）としてのものであるか，判然としない。

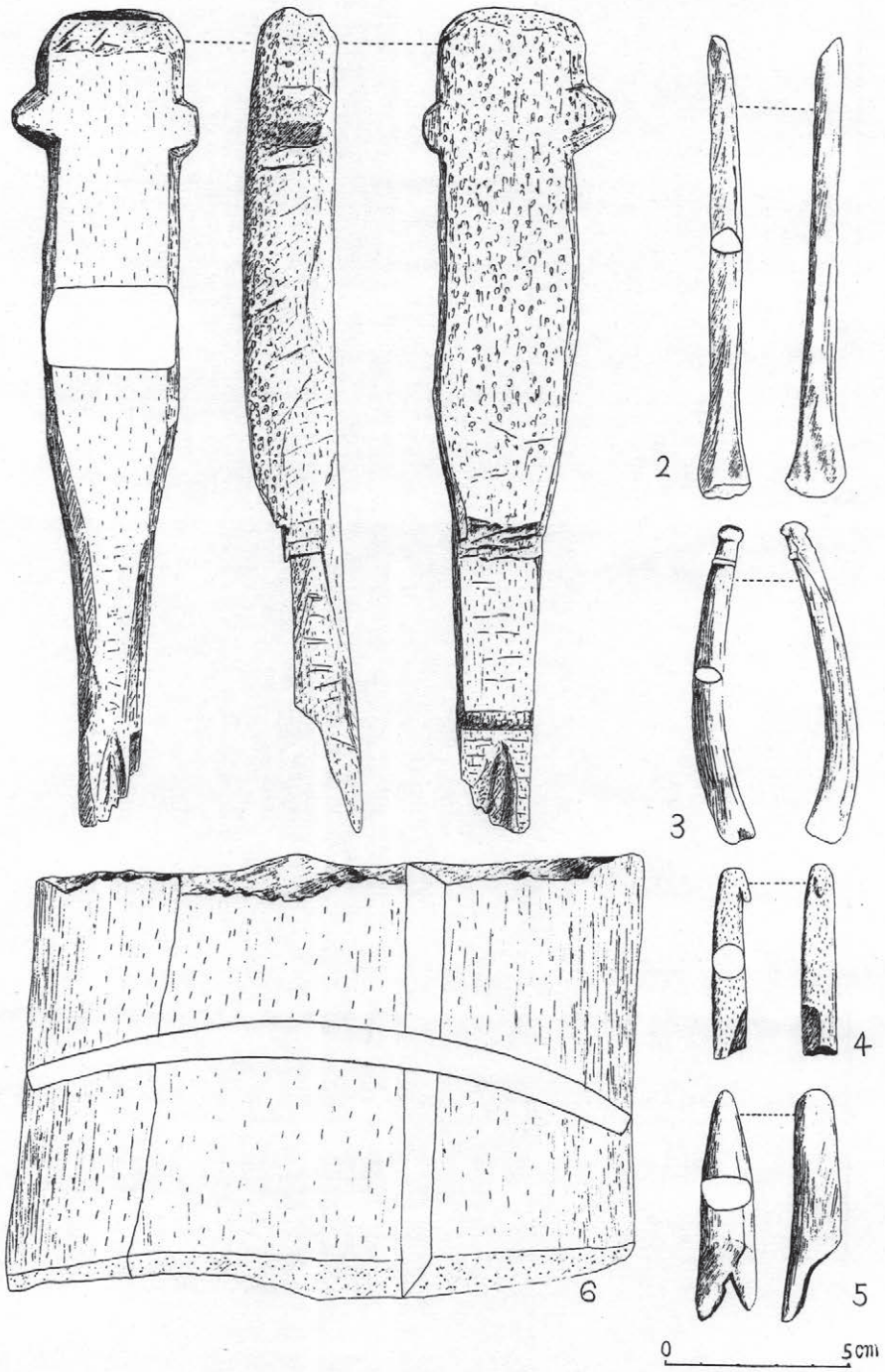
その他の骨製品（第46図６）鯨の助骨を剝し取ったものらしく，彎曲をもったもので，下端は鋭利な利器による切断が認められる。

土器　本遺跡出土の土器を文様によって分類すると次の４類に分けることが出来る。しかしながら，第１，４類はそれぞれ１片しか出土していないから，大体においてこれらの土器は，この程度の土器も混在しているという程度のもので，第３類土器もやや同様のことがいえる。

第１類土器，縄文を地文とし口辺に外側突瘤文を有するもので普通の厚味をもっている茶褐色の鉢形土器で，第１類土器はたった一片しか出土しなかった。

第２類土器　本類土器は次の三種に分類する。

Ａ種土器　口頸部に縄状刻文を有するもので，沈線と組合せたもの。また山形の連続刻文との



第45図　昭和25年出土骨角器実測図

組合せによるもの。 さらに刻文のみのものや，沈線との組合せのものもある。何れも黒色，黒褐色の甕形土器である。

B種土器　地文をもたないもので，口辺に突瘤文をもつものと頸部に凸帯をもって刻文を施してあるものもある。これらは深鉢形の黒色，黒褐色の土器である。

C種土器　指圧文と山形の連続刻文とさらに列点文とを組合せたもの，沈線と方形列点文との組合せや単なる列点文のものもある。また有節紐状文をもったものもあり，甕形土器で黒褐色のものである。

第3種土器　B地点表土下1.2m程の貝層中から出土したもので，細粘土紐貼付文を施したもので，小さな甕形で色調は黒色である。

第4類土器　横に何本もの沈線があり，縦にも線がある茶褐色の土器で，礼文島の内路遺跡やイナウ崎遺跡からはこの種の土器が多数出土している。

土器底部　本遺跡出土の底部には，底面の張りのあるものと丸味をもったものとがあり，木材の圧痕あるものもある。

本遺跡出土の土器を上の如く分類したのであるが，その出土率について次に揚げる。

第1類土器	1％
第2類土器	95％
A種土器	70％
B種土器	10％
C種土器	15％
第3類土器	3％
第4類土器	1％

以上の如く，第2類土器がその大部分を占める95％で礼文島上泊遺跡出土の土器と同様のものである。

（大川清氏，昭和25年原稿）

第三章　動物遺存体

Ⅰ．はじめに

マタワッカ貝塚の調査によって採集された動物遺存体は，ブロックサンプルを含めて全体でみんのダンボール箱約15個分であった。すでに前節までに述べたように，当遺跡の保存状態は良いとは言えない。また，縄文文化期以降現在まで，様々な時代に当遺跡で生活が営まれており，各時期の遺物が出土している。動物遺存体においても，現代の遺物の混入と思われる家畜ブタや仔ウシ，家ネコの骨が含まれていた。しかしながら，すでに述べられたように，現生の動物の混入を除いて，動物遺存体の大部分はオホーツク文化に伴うものと考えて良いであろう。出土した動物遺存体の種名を第１表に示した。また，主要部位の出土量を地区毎に第２～９表に示した。種や部位の同定できない小破片や椎骨が，クジラ類を除いて全体の約五分の一程度ある。クジラ類の破片のみは，参考のために破片数を数えた。全部で数片みられた家畜ブタ，仔ウシ・家ネコの遺骸については，骨質や形態からみて明らかに現在のものと考えられるので記載は省略した。

なお，動物遺存体の分類は，西本と高橋和樹が共同で行った。本稿は，その内容を協議の上，西本がとりまとめたものである。

第１表　出土動物遺存体種名表

Ⅰ．軟体動物門	Phylum Mollusca
a．腹足綱	Class Gastropoda
1．クロアワビ	*Haliotis (Nordotis) discus*
2．タマキビ	*Littorina brevicula*
3．エゾチヂミボラ	*Nucella freycineti*
4．ヒメエゾボラ	*Neptuna arthritica*
b．斧足綱	Class Pellcypoda
1．イガイ(?)	*Mytilus coruscus*
2．ホタテガイ	*Patinopecten (Mizuhopecten) yessoensis*
3．ハマグリ	*Meretrix lusoria*
4．ウバガイ	*Spisula sahalinensis*
5．カワシンジュガイ	*Margaritifera margaritifera*
Ⅱ．棘皮動物門	Phylum Echinodermata
a．ウニ綱	Class Echinoidea
1．エゾバフンウニ	*Strongylocentrotus intermedius*
2．キタムラサキウニ	*Strongylocentrotus nudus*

Ⅲ. 背椎動物門	Phylum Vertebrata
a. 魚綱	Class Pisces
1. ネズミザメ	*Lamna ditropis*
2. ツノザメ科の一種	Squalidae gen. indet.
3. サメ目の一種	Selachii fam. indet.
4. ニシン	*Clupea pallasi*
5. サケ科の一種	Salmonidae gen. indet.
6. ウグイ(?)	*Tribolodon hakonensis*
7. マグロの一種	*Thunnus sp.*
8. マフグ科の一種(?)	Tetraodontidae gen. indet.
9. カサゴ科の一種	Scorpaenidae gen. indet.
10. ホッケ	*Pleurogramus azonus*
11. カジカ科の一種	Cottidae gen. indet.
12. マダラ	*Gadus macrocephalus*
13. ヒラメ	*Paralichtys olivaceus*
14. カレイ科の一種	Plesronectidae gen. indet.
b. 鳥綱	Class Aves
1. カラスの一種	*Corvus sp.*
2. ワシ・タカ目の一種	Accipitres fam. indet.
3. ガン・カモ科の一種	Anatidae gen. indet.
4. ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus*
5. ウミウ	*Phalacrocorax capillatus*
6. ミズナギドリ科の一種	Procellariidae gen. indet.
7. アホウドリの一種	*Deomedea sp.*
8. カイツブリ科の一種	Podicipidae gen. indet.
9. アビの一種	*Gavia sp.*
10. カモメの一種	*Larus sp.*
11. ウミガラスの一種	*Uria sp.*
c. 哺乳綱	*Class Mammalia*
1. エゾユキウサギ	*Lepus timidus ainu*
2. ヒグマ	*Ursus arctos yesoensis*
3. イヌ	*Canis familialis*
4. キタキツネ	*Vulpes vulpes schrencki*
5. クロテン	*Martes zibellina*
6. ニホンカワウソ	*Lutra lutra whiteleyi*
7. トド	*Eumetopias jubata*
8. ニッポンアシカ	*Zalophus californianus japonicus*
9. オットセイ	*Callorhinus ursinus*
10. ゴマフアザラシ	*Phoca vitulina*
11. ワモン(フイリ)アザラシ	*Pusa hispida*

12. アゴヒゲアザラシ	*Erignathus barbatus*
13. カラフトブタ	*Sus scrofa inoi*
14. エゾシカ	*Cervus nippon yesoensis*
15. トナカイ(?)	*Rangifer tarandus*
16. イルカの一種	Delphinidae or phocaenidae
17. クジラの一種	Cetacea fam. indet.

2．動物遺存体の概要

a．貝類

クロアワビ，イガイ類など９種がみられたが出土量は少ない。第１ブロックのウニ層内にクロアワビやイガイ類が少量まとまって含まれていた他は，攪乱部分の表面採集によるものがほとんどである。

１）クロアワビ

貝類の中で最も多く採集されており，第１ブロックのウニ層内で10個近くがまとまって出土している例もある。その他の地区では，破片が散見されたにすぎない。殻長５cm以下の小さな個体もあるが，殻長10cm内外のものが多い。攪乱から採集されたもので，殻表に３つの刺突孔が明瞭にみられるものがあった。ただし，それは表皮の保存状態が他のものと比べて非常に良いことから，近世以降のものと思われる。その他のものは，破損しているものが多いのではっきりとは言えないが，ウニ層内から出土したものにも，直径１cm内外の刺突によると思われる孔が１～３個みられるものが多い。それらの遺物の出土層位からみて，オホーツク文化期にも，何らかの刺突具によってアワビが捕獲されていた可能性が考えられる。

２）イガイ類

第１ブロックのウニ層内から数個がまとまって出土している。それ以外は，数片が攪乱部分で採集されているだけである。これらのイガイ類はすべて破損しているので種名は定かではないが，破片の形状からみてイガイの可能性が強い。

３）ハマグリ

攪乱部分より３個採集されていた。この種は，現在利尻島近海に分布していないと思われるし，この３例がいずれも表皮片や文様が残っていることから，現代のものの混入の可能性が強い。

４）タマキビ

タマキビは，Ａ区のウニ層ブロックより１個と表面採集品が１個みられた。

５）その他

攪乱部分の採集品の中に，エゾチヂミボラ１個，ヒメエゾボヤ６個，ウバガイ２個，ホタテガイ数個分の破片，カワシンジガイ１片が含まれていた。

b．ウニ類

第１ブロックの遺物包含層の主体はウニ層であり，この地区ではウニ殻が多量に出土した。Ｌ区の魚骨層にもウニ殻がかなり含まれていた。いずれの場合でもエゾバフンウニとキタムラサキウニの２種がみられた。定量的な分析を行っていないが，観察所見では，キタムラサキウニの方がエゾバフンウニよりも若干多いように思われる。

c．魚類

ニシン，ホッケなど15種が認められた。魚類の遺存体は第１ブロックで出土したものが多く，他の地区は少ない。第１ブロックではウニ層が発達し，その中に魚骨が散在していたが，第２表のNo.１に示したように，ウニ層内ではウニ殻以外の動物遺骸は少ない。魚骨は主にウニ層の下部に，２～３枚の薄い魚骨層となって含まれていたものが多い。その例を第２表No.２に示した。また第２表No.３のように，ニシンを主体とする魚骨が，黒色土層中のpit状のくぼみに集中して発見された例もある。第２表No.４に示したＬ区の魚骨層は，この区内ではほとんど破壊されてしまっていた魚骨層であり，ブロックサンプルの他は，このＬ区から魚骨はほとんど採集されていない。

以上のような出土状態のもとで，魚類の遺存体は，発掘中に任意で採集されたものと，第２表にその内容を示したブロックサンプルに含まれるものがある。前者の場合，マダラやカサゴ類の遺骸が主体で，ニシン・ホッケ等はほとんど含まれていない。それに対して後者では，マグロやヒラメなどの大形魚でも，全体の数量が少ない場合には，サンプル内に含まれない可能性が考えられる。従って，ここではブロックサンプルを中心として魚骨層の特徴を推測し，サンプルに含まれない種については，任意採集の資料を参考にして，述べることとする。

１）ニシン

第２表に示したように，ブロックサンプルの内容からみると，当遺跡出土の魚類の中でホッケとともに，個体数がもっとも多く含まれていたと推測される。群を成す魚種であり，一度に多量に捕獲されたことが考えられ，それが第２表No.２に示されたニシン・ブロックとしての出土例になって表われているのではなかろうか。ただし，第２表No.２のようなニシンがほとんどを占めるような出土状況は例外的なもので，これまで利尻・礼文両島附近の遺跡で知られていない。pit状のくぼみから出土したこととニシンのみが多いことが関連しているのでななかろうか。椎骨の大きさからみると，発育の程度は良く，中～大型の個体が多い。

２）ホッケ

ブロックサンプルのすべてに含まれており，ニシンとともに当遺跡の魚類の主体を成すものである。小さな個体から非常に大きなものまで変異が大きいが，大きな個体が比較的多いようである。

３）カサゴ類

ソイ類であり，任意に採集された資料ではもっとも多く含まれていた。中～大型の個体が多い。Ｇ区の魚骨層Ⅱでは，第２表No.２に示したように特に多く含まれていた。また，Ｈ区の黒色土層

中のpitからウロコが少量まとまって出土している。これらの例からみて，個体数ではニシン，ホッケに及ばないとしても，魚体の大きさを考慮すると，ニシン，ホッケ，マダラと並んで遺跡の重要な魚種のひとつであったと思われる。

4）マダラ

マダラは，ブロックサンプルでは第2表No.3・4に少量みられるにすぎないが，任意の採集品にはソイ類と同じ程度の量が含まれていた。小型は少なく，大きく成長したものが主体である。この種が全体でどのくらいの量含まれていたか明らかでないが，ソイ類と同様にかなり重要な魚種であったの推測される。

5）サメ類

ネズミザメの吻軟骨1個，椎骨10数個が任意に採集されている。この他にネズミザメに近い大型のサメ類椎骨2個と小型のサメ類椎骨数個がみられた。またツノザメ類の棘が2片，椎骨数個分もみられた。ネズミザメ以外は種名は定かではない。

6）ヒラメ，カレイ類

中～大型のヒラメの椎骨が各区より少量づつ採集されている。椎骨の他に，大きな歯骨4個，上顎骨1個，小さな関節骨1個，前鰓蓋骨や第1血管間棘の破片等が出土している。カレイ類は，小～中型の椎骨が数個，第1血管間棘1個が散見されただけである。

7）マグロ類

マグロの大きな椎骨5個と鰭条の破片が数片みられた。クロマグロ？と思われるが定かではない。

8）その他

フグ類の歯骨が1点出土しているが種は不明である。サケ・マス科の小さな椎骨が6個，ウグイ？の椎骨7個がみられた。また，カジカ類の大きな歯骨2個，前鰓蓋骨2個が含まれていた。ヤリカジカ程度のものと思われるが種名は定かではない。

第2表　ブロックサンプル分析表

No.	区	層名	分析量 cc	ウニ	ニシン ve	ホッケ ve	カサゴ ve	マダラ ve	その他
1	A	ウニ層	500	◎	4	2	1		カサゴ pre-op.1, qu.1
2	G	魚骨層Ⅱ	400		11	14	59		ウグイve.3, カレイve.2, カジカve.2, カサゴpre-op.2
3	G	ニシンブロック	500		257	7	2	1	ニシンop.2,qu.2,max.6, 種不明ve.6,
4	L	魚骨層	500	○	46	40	1	6	マダラde.1,カサゴqu.1,マスve.6,種不明ve.6, ホッケde.1,art.1,pre-max.1,op.1

注　ve：椎骨，de：歯骨，art：関節骨，qu：方骨，max：上顎骨，pre-max：前上顎骨
op：主鰓蓋骨，pre-op：前鰓蓋骨

d．鳥類

鳥類の遺存体は主要部位で 211片が採集されており，11種が認められた。それらの種毎に出土地区と部位毎の出土量を示したのが第３・４表である。また，第10表には種毎の総数を示した。第10表に明らかなように，アホウドリが多く，鳥類の約½を占めている。次にウ類とウミガラスが多く，その他の種は少量が散見されるだけである。ただ，ワシ・タカ類がＨ・Ｉ区黒色土層でまとまって出土していることが注目される。

１）アホウドリ

主要部位で98片と鳥類の½を占めている。頭蓋骨片は１，椎骨４と少ないが，ほぼ全身の部位が含まれている。若鳥と思われるものもみられる。大・小の個体差があり，アホウドリ以外に，クロアシアホウドリ，コアホウドリを含んでいる可能性が大きい。

２）ウ類

全体で主要部位が37片とアホウドリに次いで多い。ヒメウとウミウがみられたがウミウは少ない。

３）ウミガラス類

主要部位で27片採集されている。この類にも大・小の差があり，ウミガラスの他に，ハシブトウミガラスやウミスズメ科の中の大型の種も含まれているかもしれない。しかし，ウミスズメ程度の小さな種は含まれていない。

４）ワシ・タカ類

オジロワシ・オオワシ等の大型のワシ類から，トビよりも小さなタカ類まで少なくとも３種が含まれていた。第４表に示したように大型のワシの遺骸が多い。この類は，攪乱の部分を除けばＨ・Ｉ区黒色土層からまとまって出土しており，この区の性格を考える上で興味深い事例である。

５）ガン・カモ類

この類はすべて小型のカモ類と考えられるもので，コガモからマガモ程度のものが２種以上含まれている。

６）アビ類

３片が出土している。２種以上含まれているが，小型のアビではなく，オオハム，シロエリオオハム，ハシジロアビのいずれかであろう。

７）その他

ミズナギドリ類は，第３ブロックにのみ６片出土している。カラス類は７片，カモメ類は３片みられた。カイツブリ類は大・小２種が１片づつ出土している。

第3表　鳥類出土量表（Ⅰ）

種類 / 区		アホウドリ類				ウ類				ウミガラス類			
		第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱
烏口骨	R			1	1	1			1①				
	L		1	1	5	1							
肩甲骨	R				1								
	L												
上腕骨	R	下2	下1	上1,下3	上1	上1		上1	3	1,下1	下1		2,上1
	L	上1,下3	上1,下1	下1	上5,下4		2,下1	上2	2,下1		1	1	5,下2
橈骨	R	上1,下1		上1	上2								
	L	下1		1	下1					1		1	
尺骨	R	上1,下1		上3	上2		2	1	下2		3		2
	L	上1,下1	下1	1,上1,下3	下3		上2	上2①,下1①	上1	1			
中手骨	R	1	1	1	1		1		1			1	
	L		2	2	1			1	1	1			
寛骨			1	1									
大腿骨	R			3,下1	1,下1			1					
	L			2,下1	1								
脛骨	R			1,下3			下1						
	L			下1			下1	下1	上1	1			下1
中足骨	R		1,下1		4(若),上1								
	L		3	2					1				
その他		指骨2,	指骨1 胸骨破片 1	指骨3 椎骨3	後頭部破片1 指骨2 椎骨1								

注：上：近位部破片　中：中間部破片　下：遠位部破片　以下，第4～9表まで同じ。
若：若鳥　①：ウミウ，その他のウ類はヒメウ

第4表　鳥類出土量表（2）

種類 / 区		ワシ・タカ類				ガン・カモ類				カラス類				その他			
		第1blk,	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱
烏口骨	R													1 ②			
	L			1				2					1	1 ②			
肩甲骨	R			1													
	L			1	1 ①												
上腕骨	R			上1			1									下1 ④	
	L			1				下1	上1						1 ③		1 ⑤
橈骨	R																
	L													1 ②		1 ①	
尺骨	R						1				1					1 ③	
	L							1				1				上3④,1⑤,1⑥	
中手骨	R																1 ⑥
	L			1 ①						1			1				1 ⑤,1⑥
寛骨																	
大腿骨	R			1,1 ①									1				1 ⑥
	L			上1 ①												1 ④	1 ⑥
脛骨	R			1,													
	L												1			1②,1④,1⑥	
中足骨	R													1 ②			胸骨破片
	L				1 ①												
その他				末節骨 1										上嘴破片1⑥ 下嘴破片1⑥ 胸骨1⑥			胸骨破片 1 ⑥

注　①は小型のワシ・タカ類を示す。他は大型のワシ。　②はカモメ　③はカイツブリ　④はミズナギドリ　⑤はアビ類　⑥は種不明を示す。

e．哺乳類

主要部位で約 600片出土し，17種が認められた。海獣類はオットセイが主体である。アザラシもかなり含まれていた。クジラ類は，破片が約 270片出土しているが，個体数は多くないであろう。陸獣ではカラフトブタ，ヒグマ，キタキツネが多い。ヒグマ・キタキツネ・クロテン等の遺存体が，第２ブロックの黒色土層中に火を受けた状態でまとまって出土していることが注目される。

１）オットセイ

第５表にみられるように，各区から四肢骨を主体に出土している。四肢骨の形状と大きさからみると雌は少なく雄が多い。また，関節の癒着状態からみると，テリトリー・ブルと思われる大きな成獣と３～８歳程度の雄の個体が多く，幼獣はほとんどみられない。頭蓋骨や上・下顎骨が極く少量しか出土していないことも注目される。捕獲された時に切り捨てられたこともあったであろうが，頭蓋骨が儀礼的取り扱いを受けていた可能性も考えられる。[註1] 攪乱部分から出土したものが多く，時期的な出土量の違いははっきりと分らない。

２）トド

トドの出土量は主要部位16片と少ない。全体では少なくとも雌雄の成獣が各１頭づつ含まれていることは明らかである。

３）ニッポンアシカ

アシカが比較的多いことは，海獣類の特徴のひとつである。トドの雌や，雄の若い個体がアシカの中に混っている可能性があり，破片をすべてアシカとするわけにはいかない。しかし，矢状稜の破片が２個体分出土していることから，ニッポンアシカの雄の個体が２個体以上含まれていることは確実である。

４）アザラシ類

Ｈ・Ｉ区を中心に主要部位で86片出土している。ゴマフアザラシとフイリアザラシが多い。アゴヒゲアザラシは数片みられただけである。成獣よりも亜成獣や幼獣が多いようである。

５）イルカ・クジラ類

イルカ類は，椎骨が７個，頸椎３個体分，肩甲骨２片がみられただけで，個体数は少ない。種名は定かではない。クジラ類では，ゴンドウクジラ類と大型のクジラ類の二つのタイプのものが含まれている。大型のクジラ類の破片は多いが，個体数は少ないと思われる。オキゴンドウまたはサカマタの歯が１本みられた。

６）カラフトブタ

オットセイと並び，当遺跡の哺乳類の主体を成している。地区別の出土量をみると，他の鳥獣類が一般に第３ブロックに多いのに対して，カラフトブタだけが第２ブロックに多い。上・下顎骨の歯牙の萠出状態からみると，第三後臼歯が完全に萠出していない個体が多い。第三後臼歯が完全萠出するのは，野生のイノシシでは生後２～３年と思われ，当遺跡出土のそれらの個体の年令を萠出状態からだけでは正確に推定できない。しかし，第三後臼歯が不完全萠出の状態の若獣は，

第5表　海獣類出土量表(I)

種類	オットセイ				トド				アシカ類			
区	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱
上顎骨 R												
上顎骨 L									♂1			
下顎骨 R												
下顎骨 L	fr.1		♂1							fr.1		
第一頸椎	♂2	♂1		♂1							♂1	
第二頸椎						♂?1			♂?1		2	1
肩甲骨 R		♀1		♂4,♂?若1								1
肩甲骨 L		♂2		♂3,1(若小)				1				
上腕骨 R		♂1	♂2♂若1♀1	♂3,♂若fr.3			上♀1下♀1					♂?1
上腕骨 L	♂2	♂若1,♀2	♂上fr.1	♂2♂若2♀2若1	♂?1		上♂1		若1			♂?1
橈骨 R	♂若1	♂1	♂若1♂若fr.1	♂2,♂若1				上♂1下♀?1			1,♀?2	3,♂?1
橈骨 L	♂1,♂若1	♂1♂若1♀1	♂1,♂若2	♂2,♂若5				♂1,下♀?1			♀?1	上1
尺骨 R			♂3,♂若2	♂1,♂中fr.1					♀?1,1		3,♀?1	
尺骨 L			♂1,♂若1	♂2					♀?1			1
寛骨 R			♀fr.1									
寛骨 L	♂1	♂若1	♂若1	♂3				2,♀?1	若1			
大腿骨 R	♂1	♂若2	♂若1,♂fr.1	♂3,♂若1			♂?1					1
大腿骨 L	♀1			♂2,								
脛骨 R	♂1		♂2,♂若1	♂2,♂若2					上1			2,下1
脛骨 L	♂若1	♂1	♂若1	♂上1♂若中fr.1	♀?1							♂2
踵骨 R		♂若		幼1								1,
踵骨 L			♂3,♀1	1							1	1,♂1
距骨 R				♂1						1		
距骨 L								1				2
その他		陰茎骨1		頭蓋骨片1 ♂下C.L.1					頭蓋骨片 ♂1			頭頂部片1♂

注　♂：雄，♀：雌，fr：小破片　若：間接部がはずれているが性成熟しているもので♂では3～8歳程度のもの，♀では2～3歳の個体。
幼：1～2歳の個体，幼・若の印がないものは♂では10歳以上，♀では4，5歳以上の個体と思われる。

第６表　海獣類出土量表(2)

種　類	ア　ザ　ラ　シ　類			
区	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪　乱
上顎骨 R L				
下顎骨 R L			若1 ①	
第一頸椎			fr.1	
第二頸椎	2	1	1	
肩甲骨 R L	1		若1 2,若1	2
上腕骨 R L	1 ②	若下fr1	若2, 若1,中fr.1	若1,①若下fr.1 1,③若2
橈骨 R L			1,若6 若2,若1 ②	若fr.2 1 ①
尺骨 R L			若2, 上fr1,若7	若1 若1 ②
寛骨 R L			1,②若1,③若1 2 ②若1	1 ③ 2 ①
大腿骨 R L	若2 ①		若3 若2①,若1 ②	1 ① 若1
脛骨 R L	若1,1 ①	若下fr.1中fr.1	若2①,若下2 若2①,若2	若fr.1 1,若fr.2
踵骨 R L			1	
距骨 R L			1 3	
その他	鼓骨R1②鼓骨L1① 鼓骨fr.2 頭蓋骨片1			鼓骨R1① 頭蓋骨片1

注　若：1～3才程度の未成熟のものが主体で，1部分4・5才の成獣も含まれる。
若の印のないものは5才以上の成獣。①ゴマフアザラシ，②フイリアザラシ，
③アゴヒゲアザラシ

体格の上では成獣に近い。このような点を考えると，当遺跡のカラフトブタの飼育に際して，若獣を主に食料とするというブタの管理が意識的に行なわれていたことが推測される。

7）イヌ

主要部位で47片出土している。上・下顎骨の歯牙の萠出状態からみると，生後1ヶ月前後の幼獣から成獣までみられる。下顎骨でみると，骨体が厚くて下顎底のふくらみの強いものと，骨体が比較的薄く下顎底のふくらみの弱いものの二つのタイプがある。時期的な出土量の差異は，攪乱部から出土した破片が多いので，明らかではない。

8）ヒグマ

主要部位で39片採集されているが，その大部分はH・I区の黒色土層から火を受けた状態で出土したものである。中手・中足骨や指骨も主要部位に混って出土したものが多い。幼獣・若獣・

成獣の様々な成育段階のものがみられた。H・I区に含まれる最小個体数を推測すると，幼～若獣2個体，成獣3個体となった。成獣の中にはかなり大きい老獣と思われるものもある。ヒグマは利尻島に自然分布していたという記録はなく，現在でも生息していない。従って，オホーツク文化の時代でも他の地域から持ち込まれたと推測されるが，そのヒグマが次に述べるキタキツネとともに，H・I区の1部分に火を受けた状態でまとまって出土していることは注目される。また，頭蓋骨や上・下顎骨がほとんど出土していないことも特徴である。頭蓋骨や上・下顎骨は，オホーツク文化においては住居址内から発見されることが多く，四肢骨とは異った取り扱いを受けているようである。従って，今回の調査で頭蓋骨等がほとんど出土していないことから，当遺跡内の発掘区以外の場所に，オホーツク文化期の住居址の存在が予想される。

9）キタキツネ

キタキツネも，ヒグマと同様に大部分がH・I区の黒色土層中より火を受けた状態でまとまって出土している。ただし，ヒグマとは異なり，四肢骨よりも上・下顎骨の方がはるかに多いことが特徴である。H・I区では上・下顎骨が71片であり最小個体数は36頭に達する。頭蓋骨は4個体分以上が含まれていたが，火を受けて小さな破片となっているので人為的破損の有無は不明である。

10）その他

エゾシカは，角の破片が2点採集されているだけである。トナカイとしたものは，角製の彫刻品である（第30図）。これらは火を受けているので同定が困難であるが，その形状からアカシカ系の角ではなく，トナカイの角ではないかと考えられたものである。

ニホンカワウソは，下顎骨と上腕骨が1点づつ出土している。エゾユキウサギは大腿骨の破片が2点みられた。クロテンは下顎骨のみが11例出土している。そのうち10例はH・I区の黒色土層から，ヒグマ・キタキツネとともに火を受けた状態で出土したものである。また攪乱の1例も火を受けており，他の10例と同様に本来はH・I区の黒色土層に伴うものであると思われる。

第7表　海獣類出土量表(3)

種　名	イルカ・クジラ類			
区	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪　乱
主要部位	頸椎1 ① 上腕骨1 ② 下顎骨片1 ③	頸椎1 ① 上腕骨1 ②		頸椎1 ① 肩甲骨2 ① 上腕骨(?)1 ③
椎骨	4 ①1 ②	1 ①2 ②	1 ①2 ②1 ③	1 ①6 ②
その他	肋骨fr.2 頭蓋骨片1	指骨1 ③	頭蓋骨片1 ③	肋骨fr6 ③歯1 ② 頭蓋骨片1③指骨3③
破片	25	43	28	177

注　①イルカ　②ゴンドウクジラ類　③大型クジラ

第8表　陸獣類出土量表(I)

種類	カラフトブタ				イヌ				キタキツネ			
区	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱
上顎骨 R		1	若3					1 ①			5 ②	
上顎骨 L	幼1		若2					1 ①			4 ②	1
下顎骨 R		若2,fr1		若3				1		2	26	3
下顎骨 L	若1	若1,fr1	若1	1	2,幼1	1	1,若2,幼1	1,幼3			36	1
第一頸椎	1	fr.1,1		2	1							
第二頸椎				1				1				
肩甲骨 R		若1,2		3					1		1	
肩甲骨 L		4		3,若1				1				
上腕骨 R		1	下1,若1	下1				2,若1			2	
上腕骨 L	下1	2,下2上幼1幼1	下1	下4,上若2	下1	1		2,若1	1		6	
橈骨 R		上2	上2				1	上2				
橈骨 L				2,若2,上1	1,中1	1		中1			1	
尺骨 R		1	1	3,中1,若2		3	1	2				
尺骨 L	中1		2,1(幼～若)	4				2		1	1	1
寛骨 R		2				1					1	
寛骨 L	1	1		3,若1								
大腿骨 R		若1		1,上若1,下若1							2	
大腿骨 L		上1		下若2			下2	上1			4	1
脛骨 R		上1,1	幼1	上1,下1				下1			3	1
脛骨 L		上若1	幼～若1	1,上若1,中1,下若1							3	1
踵骨 R		1	1	1,若1								
踵骨 L	幼～若1			1	1						1	
距骨 R											1	
距骨 L				若1								
その他	歯5	切歯骨R1,L2 歯牙8,頭蓋骨片5,中手・中足骨3 指骨1,椎骨2	歯牙14,頭蓋骨片2,中手・中足骨4,指骨2,椎骨2	下顎連合部若1,歯牙24,頭蓋骨片8,中手・中足骨9,指骨2,椎骨4		頭蓋骨片1	頭蓋骨片1 椎骨1	後頭部成1① 中手・中足骨3,椎骨1	犬歯1		頭蓋骨片 4個体分 犬歯10	犬歯4 頭蓋骨fr.1

注　①：同一個体　②：このうち，R，L３個づつは同一個体，幼・若の印のないものは成獣
幼：カラフトブタでは当才の個体，イヌは１ヶ月程度の個体，若：カラフトブタは３才未満，イヌは７ヶ月未満の個体と思われる。

11）ヒト

第１ブロックから少年期？の頭蓋骨の大きな破片が出土している。さらに，ほぼ同年令の頭蓋骨片が，攪乱部分より採集されている。また，右側下顎骨も１例攪乱部分より採集されている。この下顎骨には，ほとんど磨耗していない第二前臼歯のみが残っていた。第一後臼歯の歯槽部の状態からみると，第一後臼歯はまだ完全に萠出していなかったようである。これらの頭蓋骨片と下顎骨が同一個体に属するものかどうか分らないが，年令からみて，同一個体の可能性も否定できない。これらの人骨の他に，Ｉ区黒色土層より成人のものと思われる頭蓋骨片が３例出土している。

第９表　陸獣類出土量表

種類	ヒグマ				その他			
区	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱	第1blk.	第2blk.	第3blk.	攪乱
上顎骨 R L								
下顎骨 R L		1	1				4 ①,1 ② 6 ①	1 ①
第一頸椎								
第二頸椎								
肩甲骨 R L			1					
上腕骨 R L			下1 下1,若2			1 ②		
橈骨 R L			上・中・下各1 上3,下1,若下1	成上1,下1				
尺骨 R L			1,若1					
寛骨 R L			fr.5					
大腿骨 R L			上下各1 上1,若2					1 ③ 1 ③
脛骨 R L			下2,若上1 1					
踵骨 R L			2 1					
距骨 R L			1 2					
その他	指骨1		中手・中足骨17 指骨34	中手・中足骨3,指骨3 LM$_2$ 1		エゾシカ角 fr.1	エゾシカ角 fr.1	

注　若：幼～若獣，若のないものは成獣，fr：破片　上：近位端　下：遠位端　中：中間部　M_2：下第２後臼歯
①：クロテン　②：ニホンカワウソ　③エゾユキウサギ

第10表　鳥類・哺乳類主要部位出土量表

	区	第1blk. (%)	第2blk. (%)	第3blk. (%)	攪乱 (%)	小計 (%)
鳥類	アホウドリ類	14(17.7)	14(13.3)	35(10.2)	35(12.7)	98(12.2)
	ウ類	3(3.8)	10(9.5)	10(2.9)	14(5.1)	37(4.6)
	ウミガラス類	6(7.6)	5(4.8)	3(0.9)	13(4.7)	27(3.4)
	ワシ・タカ類	0	0	10(2.9)	2(0.7)	12(1.5)
	その他	5(6.3)	4(3.8)	17(4.9)	11(4.0)	37(4.6)
	小計	28(35.4)	33(31.4)	75(21.8)	75(27.2)	211(26.2)
海獣類	オットセイ	13(16.4)	17(16.2)	30(8.7)	55(19.9)	115(14.3)
	トド	2(2.5)	1(1.0)	4(1.2)	9(3.3)	16(2.0)
	アシカ類	8(10.1)	2(1.9)	12(3.5)	19(6.9)	41(5.1)
	アザラシ	8(10.1)	4(3.8)	53(15.4)	21(7.6)	86(10.7)
	イルカ・クジラ類	3(3.8)	2(1.9)	0	4(1.4)	9(1.1)
	小計	34(43.0)	26(24.8)	99(28.8)	108(39.1)	267(33.2)
家畜	カラフトブタ	7(8.9)	34(32.4)	18(5.2)	55(19.9)	114(14.2)
	イヌ	8(10.1)	7(6.7)	8(2.3)	24(8.7)	47(5.8)
	小計	15(19.0)	41(39.0)	26(7.6)	79(28.6)	161(20.0)
野生陸獣類	キタキツネ	2(2.5)	3(2.9)	97(28.2)	9(3.3)	111(13.8)
	ヒグマ	0	1(1.0)	36(10.5)	2(0.7)	39(4.9)
	クロテン	0	0	10(2.9)	1(0.4)	11(1.4)
	その他	0	1(1.0)	1(0,3)	2(0.7)	4(0.5)
	小計	2(2.5)	5(4.8)	144(41.9)	14(5.1)	165(20.5)
計		79(9.8)	105(13.1)	344(42.8)	276(34.3)	804(100.0)

注：第3表～第9表までを集計したものであるが，その他の項は含めていない。

3．まとめ

以上，当遺跡より出土した動物遺存体の概要について述べてきた。はじめにも述べたように，当遺跡の発掘地点の保存状態は良いとは言えず,攪乱部分から出土した動物遺存体は主要部位の ⅓ 以上になる。従って，各ブロック毎（各時期毎）の出土量の変化とその特徴を検討する際には，この点を十分に留意しなければならない。また，各地区毎の発掘体積も出土量に大いに関連するが，今回の調査では攪乱部分が多いために発掘体積が算出できない。そこで，ここでは遺物の実数ではなくて，出土量の比率を中心に各時期の特徴をみてみることとする。

魚類といウニ類は，各時期に多量に含まれていたと思われるが，その量は不明である。魚類については，ブロックサンプルの内容からみて，当遺跡の主要な食料源のひとつであったことは明らかである。鳥類・哺乳類の出土量は，第10表に各時期毎・各種毎に実数と比率を示した。第１ブロック（古期）では，総数で78片と全体の１割程度しか出土していない。各種が少量づつみられて，主体となった種は指摘できない。包含層が魚骨層を含む厚いウニ層であり，その点から言えば，動物種の中で主要なものは，ウニ類と魚類と言えるかもしれない。

第２ブロック（中期）ではカラフトブタが多いこと，第３ブロック（新期）は，アザラシ類，ワシ・タカ類，ヒグマ，キタキツネが多いことが特徴である。このような二つの時期の差違がどのような意味を持っているか考えてみよう。

まず，アザラシ類が第２ブロックで４点しか出土していないのに，第３ブロックでは53点と増加していることである。アザラシ類は周年捕獲の可能性がないわけではないが，一般に流氷とともに南下して日本近海に現われるものが多い。当遺跡で若獣が多いこととも考え合わせると，アザラシは冬～春が狩猟シーズンと考えられる。それに対して，カラフトブタは，四肢骨の状態や歯牙の萠出状態の表面的観察からだけでは，食料とされたシーズンを推定することはかなり困難である。しかしながら，第３後臼歯の萠出が不完全なものが多いことから，成獣に達する直前に食料とされる場合が多かったと推測される。さらにカラフトブタの飼料の確保，人間の食料事情等を考え合せると，それらの若獣の食料とされるシーズンもほぼ決っていたのではなかろうか。それは，魚類の捕獲が少なく，オットセイやアザラシ類も獲わず，一年間で最も動物質食料の乏しくなると考えられる時期,[註2] 即，夏～秋ではなかったかと想像される。もちろん，この時期にのみ利用されたと言っているのではなく，天候の荒れた時の食料の欠乏を補うための非常食としての性格も持っていたであろうし，儀礼に伴ってブタが食料とされることもあったかもしれない。以上のように考えると，第２ブロックでカラフトブタが多く，それに対して第３ブロックでアザラシ類，オットセイが多いことは，それらの区の包含量の堆積時期がずれているために生じた結果であると考えることができる。具体的に言えば，第２ブロックは春～秋に，第３ブロックは秋～春に堆積した期間が長いと言える。[註3] このことは以下に述べる問題とも関連している。

第２の問題点として，Ｈ・Ｉ区を中心にヒグマ・キタキツネ・クロテン・ワシ・タカ類が多いことがあげられる。前節のそれぞれの種の項でも述べたように，それらの種の遺存体はほとんど火を

受けている。また，キタキツネ，クロテンは上・下顎骨，ヒグマは四肢骨が多いというように，出土部位の片寄りが著るしい。そして，ヒグマは利尻島に自然分布していない。これらの点と，H区の焼骨層からトナカイ？の角製彫刻品が出土していることを考え合わせると，H区の黒色土層中の少なくとも焼骨層の部分は，何らかの儀礼と関連する遺構であったと推測される。その儀礼の時期は，春ないしは秋，特にヒグマの捕獲しやすい春が考えられ，すでに推測した第3ブロックの堆積時期と矛盾しない。

以上，攪乱部分が多いにもかかわらず，当遺跡の動物遺存体の特徴とその解釈を進めてきた。それによると，第1・2・3ブロックのそれぞれの遺物の出土状態とその内容はかなり異なっており，それらの包含層の堆積の年代・季節・堆積時の状況が異っているように思われる。また，H・I区でアザラシが多いことと，キタキツネの上・下顎骨，ヒグマの四肢骨が多いことから儀礼の場と考えられるので，第3ブロックの焼骨層を中心とする包含層は，数ケ月程度の短い期間で堆積した部分が多いように思われる。このような解釈が妥当であるかどうかは，今後の資料の増加をまって，更に検討されねばならない問題である。いずれにしても，当遺跡の動物遺存体の内容は，これまで述べてきたように，かなり特異なものであり，オホーツク文化の研究上重要な資料となるであろう。

（西　本）

註

1．礼文島香深井A遺跡2号竪穴内の骨塚にヒグマとともにオットセイの雄の頭蓋骨が2個体分含まれている例がある。東京大学出版会『香深井A遺跡下』所収，1979年出版予定。

2．香深井A遺跡における生業活動のシーズンの推定による。註1と同じ。

3．以上のような推論は，捕獲ないしは利用された動物の遺骸は，長期間保存されずに廃棄されるという前提に基づいている。また，動物の生態や骨格の形質からの死亡時期推定だけでは不確実な要素が多すぎる。死亡時期と推定は歯牙を用いた方法によって改めて論じる予定である。

第四章　文化史的位置について

1．北および南との交流

彫刻ある鹿角製品

第３ブロックで発見された彫刻ある鹿角製品は，さまざまな問題を提起した。現在まで発見された例が無い特殊なものであること，埋蔵状態が特異で用途が明らかではないこと，材料が日本には棲息しないトナカイの角であるらしいことなどがその理由である。実際，焼角の細片全体にクジラの浮彫りがあることに気付いた時は，一瞬息をのむ思いであった。

発見は，発掘最終日の４月29日にＨグリッドで始った。最後に残した堆積層観察用のベルトを取り除く時，先ず完形土器が３個と，口縁部の欠損した土器１個が発見された（第22図１～４）。今回の調査中に完形で土器が出土したのはこれがはじめてで，深鉢ないしは甕型の煮沸用に使われた土器とは明らかに異っていた。小形で橙褐色に焼かれ，２個は無文であるが，他の２個はそれぞれに注目すべき文様がつけられていた。すなわちその１は高さ15.2cm，口径10cmの甕形土器で，最大径11.8cmの肩部に線描きの海獣が10頭描かれている。２頭は大小のクジラかイルカ，６頭はアシカ・オットセイの類を描いたもの，残りの２つは鳥かと思われる。その２は高さ18cm，口径８cm，最大径11.5cmが胴部の中央にある樽型の土器で，貼付式浮文をもつ。文様は少し太めのソーメン文で，口唇上に波状に貼りめぐらし，口縁部外側に上から直線・波状線と交互に，互いに接して25本つけられている。ことに下方の16本は縦に区割した部分４ヶ所にだけ貼って文様の効果をあげ，環状の貼付を飾り，最後にナデつけを行っている。

これらの土器が出土した北側は工事機械で掘り上げられてしまったので，わからないが，南と西部分では，黒色土層中に大形の土器片，黒耀石の剝片（flake）や細片（chip），径10cm位の小穴10余個が見出されるなど，他の部分とは少し違った様相をみせていた（第21図）。完形土器の出土は，これ等とレベルもほとんど差がなく，一続きの施設と思われた。ところが，完形土器が横臥していた部分の下からは，甚しく焼けた骨や灰があらわれ，その範囲は70cm×50cmの広さがあった。中央部は高温だったためか灰白色の骨が多く，周囲のものは炭化して黒いものや，褐色のものがあった。また，これらの骨は皿状の窪みの中で焼かれ，中央が幾分高く盛り上っているが，その上にあった土器は２次的な火を受けていない。おそらく後に置かれたものであろう。灰白色に焼けた骨は火葬骨を連想させ，細かく砕けていて一つ一つ取上げることは不可能に近かったので，少しずつ掬って篩にかけ採集袋に入れた。骨を取り上げはじめて間もなく，中央の高まった部分で，傷の沢山ついた五角形に近い平たい骨（角）を認め，何だろうかとしばらく見つめたが，結局わからずに採集袋に入れた。これが彫刻ある鹿角製品の中心部分だったことは，後になって知ったことである。鹿角製品はこのように形のまま出土したものではなく，破砕焼骨の中に混ってでたものであった。しかし，比較的近い位置に散在していたものらしく，そのうちの何片かは発掘時に見た記憶があり，すべての破片が灰白色をしていることがその証據である。焼骨片はみ

かん箱２杯の量になった。

発掘後間もなく水洗し，浮彫りの彫刻に気がついた。彫刻のある焼角片は注意深く集められ，２個の製品に接合されたが，所々に足りない部分があり，全体で10分の１位欠除している。

鹿角製品の一つは，角座に近い部分を用い，長さ約17cmで切断して，全体として「く」の字型をしている。角の表面にはクジラがすき間なく彫刻され，現在数えられる数は25頭，頭も尾も細かい観察を示す写実的なものである。角座に近い一端にはクマの頭部の丸彫りがあるが，これも実物そのままにあらわされている。表面の色調は灰色から白色まで変化がみられるが，断面は石膏化し，緻密で白い。内面の海綿質はけずりとられたと思われる痕跡を残し，中空である。断面は浮彫りのクジラの胴部等，厚い部分で約１cmあり，角質が厚かったことを示している。このことは表面に凹凸が少なく角質の厚いトナカイの角を想起させた（第30図，第九図版）。

鹿角製品の他の一つは，同じ場所から同様にして出土したもので，やはり細かく砕け，両端が欠損している。角の中央部の棒状の部分を用い，現存部21cm，表面は着色したものか空色がかった部分がある。浮彫りはクジラをはじめとする海獣で，生きて海で活動している様が彫り出されている。例えばイルカが４頭並んでサーフィングを行い，その時ひろがる水の輪までも描かれており，19頭のさまざまな写実的な姿態が興味深い。もし全体を発見できれば，絵のもつ意味が解読し得るかもしれず残念に思われる（第30図，第十図版）。

以上２個の製品について，先ずその素材が問題である。動物遺残調査を担当した西本氏は，角質の厚さや表面の組織はエゾシカのものとは思われず，トナカイであろうと推定した。トナカイは日本には棲息していない。そこでこれがトナカイの角ならば，樺太または沿海州・アムール流域からもたらされたことになるであろう。他に角の残片が発見されないので，製品にして持ち込まれたと考えられる。それは北方との交流が直接的で非常に深い関係にあったことを示唆しているといえよう。

用途について考究するならば，くの字型の製品は，クマの首の部分と背側にそれぞれ小孔があけられ反対のクジラを交互に並べた一端にも一対の小孔があり，紐をつけて吊したか，あるいはふさをつけたことが予想される。東北アジアの人々，とりわけ沿海州や樺太に住んだ人々が，類似品を使用してはいなかったであろうか。一見，後期旧石器時代のいわゆる指揮棒を思わせる製品は，権威や身分の象徴と関連するものであったと思われる。地理的には遠くはなれるが，北米北西海岸インディアンのシャーマンが，首から紐をかけて胸につるし，祖先の霊を呼び出すのに用いたチャームは，これとたいへんよく似たものといえる。このチャームは彼等の神である動物が浮き彫りにされており，滅多に人の目にはさらさない秘密の品だったという。もし，これに類するものとすれば，シャーマニズムの存在が指摘されているオホーツク文化のなかではたいへん妥当性がありそうに思われる。しかし，それでは今回の出土の仕方はどのように解釈されるのだろうか。ヒグマ・キヌネ・クロテン・ワシ＝タカ類の骨と共に焼かれたのは，単なるお祭ではなくて，これを使った一人のシャーマンの終息とか，獲物の異変を取り除くといった生活の区切りが感じられはしないだろうか。これと似た出土状態は湧別川西遺跡や根室トーサムポロ遺跡からも報じら

れ川西遺跡からはクマやシャチの彫刻品がトーサムポロ遺跡では同じようなクマの頭部をもつ鹿角製品が出土している。もう一つの棒状の製品は両端が無いために判然としないが，小孔はなく手で握るにふさわしいと思われる。やはり祭祀用具の一つで，前記のものと同じ運命を辿ったものであろう。

この２点につけられた動物模様が写実的であることは既にのべた。動物意匠は世界各地にみられるが，写実的に動物そのものを描き出す意匠は，北方民族特有のものである。

オホーツク文化の動物意匠については，すでにいくつかの研究論文がある（名取1941，大塚，1968)。そこには①牙製の丸彫像，②骨製品に彫り出された飾り，③骨・土器に描かれた線刻画，④土器への貼付文の４種が知られ，動物の種類はクマが第１位，シャチクジラ，トド，水鳥などがわずかに見られる。丸彫り牙像がそのなかでも特に写実的であり，土器文様は材質の制限から多少便化されている。

これらの写実的な動物の姿は，後期旧石器時代の人々が洞窟の奥の祭場に残した壁画・彫刻と通じるものがある。19世紀には動物意匠の共通性から，後期旧石器時代の文化の生残りがエスキモーの文化だといわれたことがある（ Hoffman 1897)。たしかにエスキモーの動物意匠は動物を生きたままに，よく観察してとらえている。スウェーデンやオランダにも岩絵はあるが，エスキモーの比ではない。オロッコやチュクチが作るトナカイの丸彫りも写実的である。

このようにオホーツク文化の動物意匠は北方民族の仲間に入るものであり，より南の図案化されたものとは，はっきりとした違いをみとめることができる。それでは北方民族の動物意匠がなぜ写実的なのか。後期旧石器時代を含め，きびしい自然のなかで，動物をよく知ることが先ず要求され，暇があれば，それを反趨するような生活の必要性があったのではなかろうか。エスキモーの動物の丸彫りは子供の玩具で，子供に動物の実体を教えるためのものであった。飾りをつけようと思えば動物の姿が浮かび，また動物の霊を想定したものもあらわれるのは極く自然である。あらわされる動物の種類も宗教的なものを除けば食用との関係が深い。動物を写実的にあらわすのは北方圏の必然性とも見られるのである。

土師器の発見

第１ブロックのＡ・Ｆグリッドから，南との交流を示す土師器を一個発見した。地層はオホーツク文化層であるウニ殻層とその下の魚骨層で，なかには更に下の茶褐色土層中に入り込んでいる破片もあった。この付近の茶褐色土層は比較的堅く，魚骨層とはっきり区別できるので，ここから出る土師器片は上の層からめり込んだものと考えられた。発掘中は特別目にとまることなく，円形刺突文を主とする土器片の一群とともに取り上げられていた。整理の段階で赤色塗料のつけられた土器片が，他の土器片のなかで異彩をはなち，４袋に分括された採集袋から抜き出された同種の土器片は十数片に達した。同一土器の破片ではないかという推測通り，これらの土器片は多少足りない部分もあったが，１個の杯型土器にまとまった（第６図，第五図版)。

口径15.5cm，深さ 6.7cm，丸底で斜めに立ち上がった器壁は口縁部近くで外に少し開いている。直径約８cmの円板を底部とし，外側に粘土紐をつけて巻上げ手法でかたちづくられたものと思う。

外面は底が箆削り調整，口縁下２～３cmは横方向のナデ仕上げ，内面全体にこのナデ調整は続いている。その後，ナデの部分，すなわち内面全体と口縁の外側２～３cmを赤色に色付けして，後焼いたものである。色付けのなされていない部分は淡い茶褐色に焼き上がり，表面にはところどころに小さな砂利や砂が浮いている。胎土は細かな粘土であるが，砂や砂利が混ざっていたらしい。

北海道出土のロクロ使用以前の土師器は，由良遺跡（空知・栗沢），湯ノ川町遺跡（函館・湯ノ川），岩内遺跡（夕張・由仁），紅葉山25号遺跡（石狩・石狩）出土のものが，代表的なものとして知られている。これらの土師器は，８世紀後半に東北地方の第Ⅰ型式（国分寺下層式）の土器をもつ文化の流入によってもたらされたというのが現在の見解である（桑原1976，石附1965，横山他1975）。杯型土器は口縁下，底部との間に段または溝をもち，整形は横方向のヘラミガキ，内面はほとんどが黒色処理されていることを特徴とする。

東北地方の土師器には，国分寺下層式に先立って栗囲式があり，さらに古い和泉式相当の土師器も発見されている。しかし，今回当遺跡で発見されたような杯型土器は今のところ見当らないようである。この土器は形や成形方法でみる限り，関東地方の鬼高式土器末期のものと近似している。ただ鬼高末期には赤色に着色するものが少なくなり，その点も含めて関東地方のもの，それ自体とは思われない。鬼高式土器は古墳時代後期に作られ，その末期は７世紀末から８世紀初頭に位置すると考えられるので，東北地方では栗囲式土器と併行し，北海道の土師器には先立つものと考えることができるであろう．たった１個の発見ではあるが，この土器は鬼高期後半に本州の，おそらくは日本海側の地域からもたらされたものではないかと推測されるのである。土器の遺存状態から，海を流れついたとは思えず，人手によってもたらされたとみるべきであろう。北海道は一見して古墳文化の所産とみられるこの種の土器の類例がまだ知られていないので，関連資料の発見がまたれるが，とにかく石狩低地帯の北東に土師器は無いという通説をくつがえす結果となった。もちろん，土師器をもって生活していた人々の集団がいたということではないが，土師器が，しかも北海道ではまだ使われていなかった土器師が，はるか北の利尻島から発見されたことは注目に値いする。そして利尻島とはるか南の土地が海上の道で結ばれていたことを再確認しなければならない。昭和51年の遺跡分布調査で，石狩低地帯の北には拡がらないといわれていた円筒上層式土器や大洞Ａ′式併行の恵山系土器を発見し（東利尻町教委1952），２時期に南との交流があったことを知ったが，今回の土師器の発見はさらに１時期，交流の資料を加えることになった。

島で漁をする人々は春になると南西の風が吹き，舟は苦労せずに北上して島に帰れるという。また偏形樹の形成要因を調査した田上善夫氏は，初夏を中心とした５～８月に南西の風が特に卓越し，沓形では南南東－南南西の範囲内に偏向方向があると述べている（田上1976）。

さて，私は長い年月関東を中心とする土師器を眺めてきた目で，いささか大担にもこの杯を古墳時代末期の日本海側のものと推定した。それは伴出したオホーツク式土器の年代をあらわすことになりはしないだろうか。杯型土師器はおそらく何かに利用され，オホーツク式と共に捨てら

れた。共伴の土器は，口縁部に外側から内側へ向う円形刺突文をもつ深鉢型土器と，口縁部に刻文をもち，口縁下が多少くびれて甕形になった土器である。口縁部の刻文は肥厚部につけられ，なかには浮文の効果をだしているものもある。胴部に刻文や沈線のつけられたものがあるが，鋭利な施文具を使用しないところが，後にあらわれる沈線文と異っている。胴部には櫛目状の押捺が多い。以上のような特徴があり，器面の磨きはまだ顕著ではない。これらの土器は，円形刺突文をもつ謂ゆる十和田式土器と，刻文をもつ謂ゆる江ノ浦式土器を含んでいると思う。そして，これらの土器は出土状態からセットとして取り上げることが出来る。

十和田式土器の年代は６～８世紀，江ノ浦式土器の年代は９～10世紀との説があるが，伴出した土師器の年代とも大きな狂いはないと思われる。

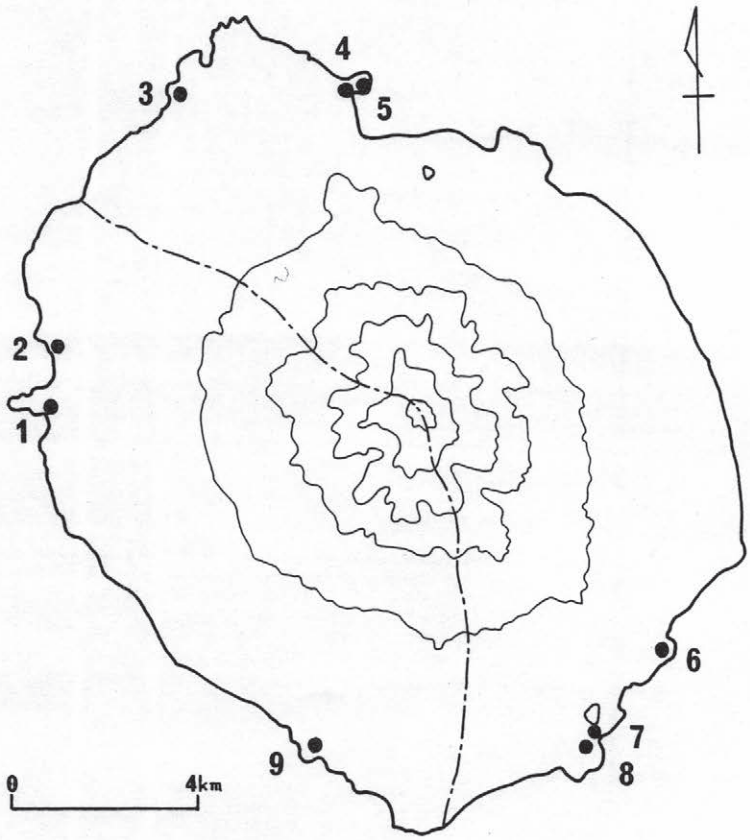
２．島内他遺跡との関係

遺跡の集成

利尻島内では亦稚貝塚を含めて９ヶ所のオホーツク式土器を出土する遺跡が確認されている。多少とも入江になった海に面する地点に占地し，砂浜に近い低砂丘上に遺跡を残すことが多いが，一部では標高10～20ｍの高さまで続いている。

第46図に示したのが，1951年に確認された遺跡の分布図である。先ず図に示した番号順に遺跡の概略を記そう。

1　亦稚貝塚
2　種屯内貝塚
3　大磯Ｂ遺跡
4　ペシ岬Ａ遺跡
5　ペシ岬Ｂ遺跡
6　鬼脇遺跡
7　沼浦Ａ遺跡
8　沼浦Ｂ遺跡
9　政泊遺跡



第46図　利尻島内オホーツク文化の遺跡分布図

1．亦稚貝塚（省略）

2．種屯内貝塚（タネトンナイ）

海岸に近い砂州上の遺跡である。この付近は，なだらかな地形で，遺跡のある場所も平坦な畑や草地となっている。海岸付近は熔岩の盛り上がりで高くなり崖となる部分もある。しかし，魚場としては良い場所で，コンブやウニの採集が盛んである。

この遺跡は昭和25年に早大考古学研究会によって一部発掘調査されているが，現在でも広範囲に遺物の散布がみられる。しかし，遺物の分布密度の濃い部分は，小貝塚の周辺で約 1,000m²程と思われる。テストピットを２ヶ所入れてみた。一ヶ所は草地の中である。攪乱された痕跡はなく，良好な堆積状態であった。Ⅰ層は表土層，砂を含んだ黒色土層である。Ⅱ層は多量に砂を含み，粘土塊が少量混在している。遺物の出土も多く，約33cmの厚さがある。Ⅲ層はⅡ層に入っていた粘土塊の層と思われる。Ⅳ層は黒色土層，Ⅰ，Ⅱ層に比べ色が一段と黒みをもっている。Ⅴ層は褐色の砂層，Ⅵ層は基盤の熔岩である。Ⅵ層まで58cmである。また，貝層の散布がみられる畑にも試掘をしてみた。先の試掘場所とは，さほど離れてはいないが，こちらでは貝層が三枚みられた。Ⅰ層は黒色土層，Ⅱ層はホタテ，アワビを多量に含み，巻き貝も少々みられる混土貝層である。Ⅲ層は魚骨片などを含む砂質の強い黒色土層。Ⅳ層は魚骨層が上面にあり，その下に破砕貝層が入る混土破砕貝層である。Ⅴ層は砂質の強い黒色土層，Ⅵ層は４cm程の薄い魚骨層である。Ⅶ層は赤褐色，Ⅷ層は褐色，Ⅸ層は黒色の砂層である。ここまでの深さは約 1.1mである。

遺物としては，石鏃，銛先，削器，掻器などの石器と，縄文，オホーツク時代の土器片が多数採集できた。この遺跡は，かなり良好な状態で保存されているとみられる。（塩野崎）

3．大磯（オオイソ）Ｂ遺跡

かつてオタントマリ遺跡として報告されたことがあり（1933年名取），その後も北大北方文化研究施設（1968），大場（1968），管（1970），西谷（1976）氏等によって，調査，報告されている。旧大磯遺跡と同一と思われる。

大磯Ａ遺跡（続縄文）の東側に位置し，良好な泊りに面している。隣の礼文島とは最短距離にあるという。標高10～15mの低台地及び砂丘上に立地している。現在は草原となっており，約20,000m²(200×100m)と非常に広範囲に遺物が散布している。

道々より港にのびる道路と平行して細長いトレンチ状の溝が掘られており，作業当時ここより多量の遺物が出土したという。この溝の一部を精査し土層を検討した結果，上下二枚の包含層を確認することができた。下層からは小数であるが縄文時代後期の土器が，上層からはススヤ式土器を主体とする多量の土器片が出土している。一方道路の東側では住居と思われる窪みを発見し試掘したところ，床と思われる面が検出された。このテストピットからは遺物はあまりみられなかった。また北側海岸部の砂丘は大きく砂取りが行われている状態で削平面には土器の散布がみられる。

採集した遺物の量は非常に多く，内容も実に豊富である。小形ドリル・ナイフ・石鏃・削器・掻器，磨製石斧，砥石などの石器類のほか，各時期の土器片が見られる。縄文時代後期・晩期の

土器，オホーツク式土器があり擦文も1片であるが採集している。しかし今回の採集ではススヤ式土器が圧倒的に多く主体となっている。

このように本遺跡はススヤ式期の大規模な遺跡（集落）になる可能性が強いと考えられる。北側砂取り部を除いては比較的良好に包含層が残存していると思われる。（荒牧）

4．ペシ岬A遺跡

鶯泊にあるペシ岬付け根の鞍部に立地する。南北ともに急崖をなして海に面しており，6000m²（200×30m）と非常に細長く狭い傾斜地である。標高10～25mあり西側は緩やかな斜面で食堂街となっており，東は岬への登山道である。現在遺物はこの食堂街から道添いに岬中腹付近まで採集できる。中腹の平坦地にも拡がるらしいが，第2次大戦中監視哨となっていたために削平し，破壊されてしまったのかもしれない。そこで遺跡は最も細くなった付け根部分を中心に存在しており，ここにトンネルを作った際遺物が多量に出土したという。今回採集できた遺物は少量で，石鏃・剝片，小さな土器片などである。これはオホーツク式土器と思われる。1970年に菅氏の報文がある。（荒牧）

5．ペシ岬B遺跡

鶯泊港に面したペシ岬南側斜面の中腹と裾の砂浜の地域である。現在の中腹の畑地，待合所の裏側付近で遺物の散布が見られる。

標高5～20m，約 5,000m²(180×30m）の東西に細長い地域に広がると思われる。

かつてペシ岬の南崖下，渚の部分にはシジミを主とする貝塚があった（昭和7年）という。また築港セメント倉庫建設（昭和25年）の際に多数のオホーツク式土器が，鶯泊駅待合所新設工事（昭和44年）の際には頭蓋骨がそれぞれ発見されている。現在崖下には建物が並んでいるが中腹の畑からも遺物の発見がある。1933年名取，1951年新岡，1970年菅氏等の報文がある。今回の調査では黒耀石，頁岩，メノー等の剝片とオホーツク式土器片が採集できた。中腹の畑地以外は，ほとんど破壊され消滅しているものと思われる。（荒牧）

6．鬼脇（オニワキ）遺跡

この遺跡は利尻島東南部に開けた鬼脇港の南岸台地上に位置する。台地は鬼脇港南岸に突き出た形で張り出しており，標高は約10m程あると思われる。付近に湧水はないが，沢があり鬼脇の町に入っている。しかし枯水期になると水はほとんどない。台地上は林と畑と宅地になっている。林の中は表採不可能でわからず，畑と宅地の表採でも採集遺物は少なかった。ややまとまって採集できたのは港の整備の為削られた崖面からで，土器片，石器，磨面のある軽石などがある。土器片はオホーツク時代のものと思われる。この遺跡は遺物の量も少なく，散布範囲も約 1,500m²程であろうと思われる。崖面からの遺物採集の様子から，台地の際付近から遺跡があったと思われ，一部破壊されているのが残念である。（塩野崎）

7．沼浦（ヌマウラ）A遺跡

利尻島南部に位置し，北にオタドマリ沼，南には島内で唯一の砂浜海岸を有する平坦な砂丘上にこの遺跡はある。この付近の地形は馬蹄形状に開けた低地となり，周囲を小高い山裾の台地で

囲まれている。オタドマリ沼は径 400mで水深は約 1.5mの浅い盆のような沼である。周囲は低湿地となり，葦などの淡水植物が茂っている。この沼から 300m程離れて遺跡があり，砂浜海岸へと続くのであるが，現在この砂浜は防波設備の為，埋立てられている。遺跡の範囲は東側台地の麓から西へ 300m，南北は80m程の広さで道々利尻線を超えた砂丘の端まで続いている。

遺跡の地域は畑と宅地と草地となっており畑での遺物の散布が顕著である。畑の一部にはアワビ，イガイを主とする小貝塚がある。遺物としては鏃，ナイフ，銛先，つまみ付ナイフ，局部磨製石斧，砥石などの石器と土器片多数，その他海陸獣骨などがある。時代は続縄文，擦文，オホーツクの各時代のものが採集された。

昭和７年以来，多くの人々によって採集され報告もされているが，現在でもかなりの遺物が露出しており，大形の土器片もみられる。畑の部分では耕作による破壊がかなり進んでいるものと思われる。（塩野崎）

8．沼浦Ｂ遺跡

沼浦Ａ遺跡から約 100m南へ下った地点で，範囲としては80×80m程度，Ａ遺跡ほど大きくはない。やはり，道々利尻線に分断されており，分布状態は海岸側に集中する。畑，私道，庭先などで遺物の採集ができるが，大きく破壊された形跡はないようである。道路の西側地区は一段低くなっており，遺物の集中する地点はないが，全体に散布している。

遺物はＡ地点ほど多くはなく，ナイフ，剝片多数，土器片が採集できた。数少ない土器片からではあるが，縄文晩期，及びオホーツク系の時期と思われる。（塩野崎）

9．政泊（マサドマリ）遺跡

利尻島南部の港町である政泊に位置する。遺跡の立地場所は，西南部の平坦な海岸線が終わり，やや凹凸をもった入江が始まる，その張り出し部にあたる。道々利尻線が「く」の字形に屈曲している部分である。背後は急斜面で台地がせまっており，遺跡の広がりは20×20mの小範囲である。昭和24年に新岡武彦氏により発見され調査も行われたが，その後，道路，漁業組合の建物，重油タンク，漁組冷蔵庫が次々と建設され，遺跡はかなり破壊されている。現在，道路の両側に貝層が一部残っている。テストピットＡを道路北側の土手の断面に掘った。土手の巾は短く，高さも40～50cmのものだが，遺物は主としてこの付近で採集された。土層の状態はⅠ層は表土層であるが，やや削平されている。Ⅱ層は小さなアワビやウニを主とする破砕貝層であり，厚い部分で６cm程である。Ⅲ層はⅡ層の間に挾まれ，１cmに満たない小さな巻き貝を主体とする薄い貝層である。Ⅳ層は褐色土層であるが，灰や木炭粒を多量に含み，層をなす部分もある。海獣骨なども出土し，遺物の量も多い。その下は，大小様々な円礫の層で，断続的に魚骨層が入る。

テストピットＢは，道路を隔てて南へ下った場所にあけた試掘溝である。表土は削平されたものと思われ，礫層が表面に出ている。Ⅰ層は砂まじりの小ジャリを多く含む礫層で遺物の出土がみられる。Ⅱ層は上部に破砕されたアワビを主とし，ウニ，巻き貝などを含む貝層。下部には獣魚骨層がみられる。Ⅲ層はⅠ層とはほぼ同じ礫層である。

遺物の量は多く，石鏃，砥石，石核，剝片など各種の石器と，江の浦式，十和田式等，オホーツ

ク式，ススヤ式などの土器片，小形土器など，まとまった資料も採集された。

現在，かなり破壊された状態ではあるが，良好な貝層面もみられ，住居址も残っているものと思われる。（塩野崎）

以上の遺跡のうち，4と5，7と8は別個の遺跡として記録した。採集した土器の時期や組合わせに相違があり，また両遺跡の間に遺物を採集できない地域が拡がっていたので便宜的にそうしたのであるが，これらは同一の遺跡とみるべきかもしれない．1，2，4・5，9などは冬の北風をさける地点を上手に利用しているし，6，7・8は風を受けない台地のふところにある。3だけは吹きさらしの砂丘上にあり，あるいは冬は住まない場所だったかもしれない。

遺跡の規模としては，1と7が大きく，ほとんど破壊されてしまってはいるが，4・5も大きかったかもしれない。3も遺跡の範囲は広いが，オホーツク文化の時期に大きかったかどうかは疑問である。2，6，9は小さかったと思われる。このことは，オホーツク期の利尻島には，西の沓形（1）と南東の沼浦（7）の2個所あるいは北東の鴛泊（4・5）を加えた3個所に集落（ベース・キャンプ）があったものと思われる。

これらの遺跡の規模については，昭和51年に行った分布調査の結果をもとにして考えたが，遺跡の細かな時期や内容については，かならずしも明らかではない。昭和24年に新岡武彦氏が政泊遺跡（9）を発見して試掘し，昭和25年には大川清氏が種屯内貝塚を試掘しているが，それ以外の発掘調査は行われたことがなかったからである。昭和7年に名取武光氏が画期的な遺跡の分布調査を実施して以来，何人かの人々によって公私にわたる分布調査が行われてきた。しかし，一度も本格的な学術発掘が行われなかったのは，それだけの魅力ある遺跡がみつからなかったからであろうか。その間に遺跡は次々と破壊されていった。

次に示す表は昭和51年夏の調査によるが，前記の理由により，抜け落ちているものもあるかもしれない。亦稚貝塚では表面採集された遺物はオホーツク期の新しいものばかりであったが，発掘によって多くの古手のオホーツク式土器を得た。このとこでも明らかなように，一般に採集で得たものより新らしい遺物が存在する可能性は少ないが，古いものが埋蔵されている可能性は充分に考え得る。

No.	遺跡名	土器文様			伴出土器		
1	亦稚	円形刺突＋刻文	沈線＋刻文	貼付＋沈線文	続縄文	ススヤ	擦文
2	種屯内	●	●		●	●	●
3	大磯B	●	●		●	●	●
4	ペツ岬A			●		●	
5	ペシ岬B	●		●			
6	鬼脇			●			
7	沼浦A	●	（●）	（●）	●	●	—
8	沼浦B	（●）			●		●
9	政泊	●			●	●	

（●）は同時期，異文様を示す

遺物にみる相対年代

亦稚貝塚の発掘で多少の土器編年に関する資料をえた。攪乱が多く，また北方の気候環境を反映して混在をまぬがれず，伴出する石器を区別することも困難ではあったが，幸い貝層等堆積の明確なものの中に，まとまった土器を３ヶ所で発見した。第二章で述べたように，各ブロックに１ヶ所ずつ復元できる土器のセットをみいだし，３セットの前後関係を地層の堆積から推定することが出来た。

今かりに第１～３ブロックの土器のセットをそれぞれ，亦稚Ⅰ，亦稚Ⅱ，亦稚Ⅲと名付けて説明したい。

亦稚Ⅰは，第６図１・３・８・10・11に示した土器と，同じ層から出土して接合関係にあった，４・５・６・９が含まれると思われる。文様要素としては，第五図版と第十九図版の左上２つと右上３つ，第二十図版左下から２番目などがある。即わち，円形刺突，櫛目状圧痕，斜刻文，沈線（細い植物性の道具使用）である。

亦稚Ⅱは，第16図１・２・４で，第18図３・５の小形土器，土製品を伴う。文様要素は第十九図版右下，第二十図版右上２つが知られる。沈線は亦稚Ⅰより鋭くなり，横刻文，爪型状刻文が見られ，沈線と刻文の組合わせが特徴的である。

亦稚Ⅲは，第22図１～４・７～10・12・13等で，文様要素は第二十図版右下２つと第二十一図版右上２つがはっきりしている。沈線はますます鋭く雑になり，ソーメン状貼付文があらわれる。

また当遺跡では巻上げ成形のあとをそのまま残したものが注目され，無文の土器が数を増す。

オホーツク土器の編年的研究は諸先学によって続けられ，大綱があらわされている。今回の調査ではそれと比較して論評する程の資料はなく，ただ知見を示すにとどめたい。すなわち，古い方から亦稚Ⅰ→亦稚Ⅱ→亦稚Ⅲという順序が知られた。沈線文が，植物性の施文具から金属製の施文具に変るらしいことはすでに述べたが，各時期に存在する文様だけに，今後の指針になるかもしれない。

摩擦式浮文の発見は少なかったが，亦稚Ⅰには伴わないようである。型押文も少ないが，この文様をもつ土器は胎土・焼成とも他のオホーツク式土器とは異っている。粘土が精選されたのか均質で混りものが入らず，器壁には厚みがある。焼成も焼きむらがなく，黄褐色に近い色をみせるものが多い。底部破片のなかに，大形で頑丈なものがあるが，これが型押文をもつ土器の底であろうと思う。亦稚Ⅲに伴うらしい。

骨角器については亦稚Ⅰに伴うものとして第15図３・５，第14図７があり，同じ層から第15図１・２・４・６，第14図２～４・６がでている。亦稚Ⅱ出土層の直上の貝魚骨層から出土したものとして，第15図７・８・12・14・15，第20図６があり，時間的には近いと思われるが伴出したものではない。亦稚Ⅲに伴うものとしては第20図３，第30図１・２，第31図１・６・９・10がある。骨角器は比較的まとまりをもって発見されているが，時期的変化を示すにはいたらない。石器については尚更で，亦稚Ⅰに伴ったもののなかには図示するような製品がなく，亦稚Ⅱでは第

13図11・12，第19図１・２，亦稚Ⅲでは，第26図３・13・19・30，第28図11・12，第29図１・２が確認されただけであった。

以上の遺物の変遷を軸にして，各遺跡採集の土器を三段階に分けて示したのが前掲の表である。亦稚Ⅰの時期には，遺跡４と６を除くすべてに人が住んでいたが，三時期とも住み続けられたのは１と７で，他は途中で棄てられたらしい。ペシ岬は破壊が著しく，４・５については保留したいが，６のように亦稚Ⅲの時期になって初めて住まれるようになったところもある。

オホーツク期以外についてもみると，ススヤ式土器とオホーツク式土器は同じ遺跡でしばしば発見され，占地の同一性を示している。このことは続縄文時代の後半についてもいえることで，縄文時代後一晩期の遺跡と重複する発見がないのが，この島の特徴である。唯一の例外として，ペシ岬の高台地上（灯台付近）にススヤ期の単純遺跡がある。ペシ岬Ａ遺跡で発見されたススヤ式土器片とこれとは関係があると思われる。

亦稚は冬も住みよい場所である。沓形岬の北側と南側では驚くほどの違いがある。動物遺残の証據からも通年の居住が証明されてはいるが，種屯内はここの分村としての役割を果していたのではないかと思う。冬は亦稚の方が住み易いことに加え，種屯内貝塚の規模が小さいことの説明もつくであろう。この考えを推し進めるならば，沼浦と政泊，鬼脇は一組となり沼浦を母村として，前半は沼浦と政泊，後半は沼浦と鬼脇で暮していたのではなかろうか。またペシ岬と大磯も関係をもっていたと思われる。

亦稚貝塚の一部を調査しただけで，いえることはごく限られているが，以上のような可能性を示してこの項を終りたい。

挿図石器対照表

挿図	番号	出土区	層位	形状	全長	重量	石質
11	1	F	3 a 層	鏃	(33) mm	(0.9)g	硬質頁岩
	2	G	2	〃	(26.5)	(1.1)	メノー質硬質頁岩
	3	A	3 a	〃	30.5	0.8	硬質頁岩
	4	G	3 b	〃	32	2.2	〃
	5	G	2	〃	32.5	1.3	〃
	6	F	3 a	〃	36	0.9	〃
	7	G	2	〃	38	1.8	黒耀石
	8	G	2	〃	42.5	2.9	〃
	9	G	3 b	〃	21	0.7	〃
	10	A	3 a	〃	(34.5)	(3.9)	メノー質硬質頁岩
	11	G	3 b	〃	(41.5)	(4.8)	硬質頁岩
	12	F	3 a	〃	37.5	4	〃
	13	F	5	〃	(21)	(3.2)	黒耀石
	14	G	3 b	〃	52	8.6	硬質頁岩
	15	G	3 b	〃	38.5	4	〃
	16	F	5	〃	(38.5)	(9.1)	黒耀石
	17	F	5	ナイフ	80.5	22.2	硬質頁岩
	18	F	5	掻器	40	21.5	〃
	19	F	5	削器	43	3.4	〃
	20	F	3 a	〃	75	34.9	〃
	21	F	5	〃	74.5	37.4	〃
	22	F	5	〃	80.5	38.9	〃
	23	F	5	斧	112.5	163	メノウ
	24	AF	5	削器	29.5	2.4	〃
	25	AF	5	錐	29.5	1.3	〃
	26	F	5	削器	34	4.8	〃
12	1	G	5	鏃	29	1	硬質頁岩
	2	G	3 b－5	〃	27.5	0.9	黒耀石
	3	A	5	〃	31	2.1	〃
	4	F	3 a	〃	(29)	(1.1)	硬質頁岩
	5	F	5	〃	36	3	黒耀石
	6	A	5	〃	(31)	(1.3)	〃
	7	G	5	〃	(35.5)	(3.4)	硬質頁岩
	8	A	5	〃	(26)	(1.7)	〃
	9	F	3 b－5	〃	44	6.6	黒耀石
	10	G	5	削器	45.5	4.6	硬質頁岩
	11	AF	5	〃	30	3.9	メノー
	12	G	5	〃	86.5	34.1	硬質頁岩

挿図	番号	出土区	層位	形状	全長	重量	石質
	13	G	5層	掻器	84.5mm	45.9g	硬質頁岩
	14	G	5	ナイフ	70	23.8	〃
	15	G	5	掻器	86.5	12.3	〃
	16	G	5	削器	83	17.5	〃
	17	G	5	〃	47.5	10.1	メノー
	18	G	5	〃	60.5	10.6	硬質頁岩
	19	A	5	〃	49	12.1	黒耀石
	20	G	5	〃	70	7.2	硬質頁岩
	21	G	5	〃	78.5	14.6	〃
	22	G	5	〃	45	2.3	〃
	23	G	5	〃	(35)	(4.5)	〃
13	1	K	5	垂飾	(52)	(10.2)	砂岩
	2	G	5	斧	73.5	73.8	〃
	3	G	5	〃	69.5	41.8	泥岩
	4	F	3a	〃	82	89.3	〃
	5	G	3b－5	〃	123	600	砂岩
	6	F	3b－5	砲	81.5	191.8	〃
	7	G	5	斧	(112)	(92)	安山岩
	8	G	5	砥	(132)	670	砂岩
	9	F	攪	〃	65.5	160	〃
	10	AF	5	〃	(41.5)	(10.9)	〃
	11	O	2h	〃	84	152	〃
	12	N	2j	〃	109	243.5	〃
	13	O	2m	砲	108	405	泥岩
19	1	O	2l	鏃	30	0.8	硬質頁岩
	2	O	2m	〃	31	1.4	黒耀石
	3	N	2j	槍	(57)	(7.2)	硬質頁岩
	4	O	攪	ナイフ	(52)	(8.8)	〃
	5	N	〃	掻器	83	26.9	〃
	6	M	〃	削器	(57.5)	(10.7)	〃
	7	N	2j	〃	(59)	(12)	〃
	8	N	〃	〃	63.5	12.8	〃
	9	M	攪	〃	79.5	46.7	〃
	10	O	〃	石核	100.1	178.9	〃
	11	N	〃	錐	30.5	3.2	メノウ
	12	H	2a	〃	28	1.7	〃
25	1	H	2	鏃	35	1.5	黒耀石
	2	I	4	〃	34.5	4.1	〃
	3	H	2	〃	27	0.7	〃

挿図	番号	出土区	層位	形状	全長	重量	石質
	4	D	4層	鏃	33.5mm	1.8g	硬質頁岩
	5	D	2	〃	30	1.1	黒耀石
	6	D	2	〃	26	0.9	〃
	7	D	4	〃	29.5	1.6	〃
	8	I	4	〃	31	1.1	メノウ質硬質頁岩
	9	H	2	〃	42	4.9	黒耀石
	10	I	2	〃	19	0.6	〃
	11	I	2	〃	21	0.7	〃
	12	J	2	〃	24	?	?
	13	H	2a－5	〃	31.5	1	硬質頁岩
	14	H	2a－5	〃	49.5	6.4	黒耀石
	15	I	4	〃	(44)	(8.7)	メノウ質硬質頁岩
	16	D	4	削器	(68.5)	(7.2)	硬質頁岩
	17	I	2	ナイフ	49	(8.9)	黒耀石
	18	H	2a－5	錐	47.5	3.2	硬質頁岩
	19	H	2	削器	59.5	7.1	〃
	20	H	2a－5	〃	(39.5)	(4.4)	〃
	21	H	2a－5	〃	88	13.1	〃
	22	H	2a－5	〃	66	11	〃
	23	I	4	〃	62	7.8	〃
	24	H	2a－5	〃	63.5	10.5	〃
	25	H	2a－5	〃	62	8.6	〃
	26	H	2a－5	〃	52	6.7	〃
	27	H	2a－5	〃	88	12.2	〃
	28	H	2a－5	ナイフ	(71.5)	(19.9)	黒耀石
	29	D	4	〃	(45.5)	(9.7)	硬質頁岩
	30	H	2	石核	72	149.6	〃
26	1	H	5	鏃	22.5	0.9	メノウ
	2	C	5	〃	33	1	黒耀石
	3	D	攪	〃	15.5	0.6	〃
	4	J	2	〃	22.5	(0.8)	〃
	5	H	5	〃	30	1.4	〃
	6	H	5	〃	34	2.4	〃
	7	C	5	〃	39	3	〃
	8	I	5	掻器	35	9.8	硬質頁岩
	9	H	5	槍	89.5	28.8	玄武岩
	10	E	5	〃	58.5	8.1	硬質頁岩
	11	J	2	ナイフ	67.5	19.3	〃
	12	J	2	削器	93.5	64.1	〃

挿図	番号	出土区	層位	形状	全長	重量	石質
	13	H	5層	削器	66.5mm	19.2g	硬質頁岩
	14	H	5	〃	75.5	17	〃
	15	C	5	ナイフ	56	5.6	〃
	16	H	5	?	55	3	黒耀石
	17	C	5	錐	48	3.8	メノウ
	18	H	5	削器	82	11	硬質頁岩
	19	H	5	〃	78.5	13.3	〃
	20	H	5	〃	60	6,9	〃
	21	C	5	〃	45.5	2.6	〃
	22	H	5	〃	68.5	11.7	〃
27	1	H	5	斧	59.5	39.1	黒色片岩
	2	J	攪	〃	(35.5)	(12.3)	〃
	3	H	2a－5	〃	(40.5)	(10.7)	〃
	4	H	2a－5	〃	83	112.6	泥岩
	5	I	5	〃	124	320	安山岩
	6	H	2a－5	〃	122.5	285	〃
	7	／	表採	〃	163	495	玄武岩
	8	H	5	〃	143.5	340	緑色泥岩
	9	J	2	〃	138.5	355	玄武岩
	10	H	5	鋸	86	22.6	砂岩
	11	H	2	敲器	(121.5)	(465)	〃
	12	H	2	擦器	113	385	安山岩
	13	／	表採	斧	(92.5)	(255)	玄武岩
	14	／	〃	窪石	77.5	(116.9)	安山岩
	15	／	〃	〃	95.5	(320)	〃
28	1	H	2	砸	160.5	2000	〃
	2	H	5	〃	142.5	1000	〃
	3	H	2	敲器	97	500	〃
	4	／	表採	砸	162	1650	〃
	5	H	5	敲器	66.5	300	メノウ
	6	J	2	砸?	146	1500	安山岩
29	1	H	5	砥	179	1150	砂岩
	2	J	2－5	〃	147.5	1200	〃
	3	J	2	〃	93.5	200	〃
	4	／	表採	〃	79	200	〃
35	1	I	住覆	鏃	29.5	0.9	メノウ質硬質頁岩
	2	D	〃	〃	29	1.1	硬質頁岩
	3	J	〃	〃	20	0.6	〃
	4	I	〃	ナイフ	71.5	17.7	〃

挿図	番号	出土区	層位	形状	全長	重量	石質
	5	J	住覆層	掻器	68.0mm	30.6g	硬質頁岩
	6	J	〃	削器	77.5	11.3	〃
	7	I	〃	石核	97.5	460	〃
	8	I	〃	掻器?	14	6.7	黒耀石
	9	J	〃	錐	86	15.1	硬質頁岩
36	1	D	住床	鏃	34.5	1.4	黒耀石
	2	J	〃	〃	31	1.2	硬質頁岩
	3	E	〃	〃	33.5	1.6	黒耀石
	4	D	〃	〃 ?	60	7.6	硬質頁岩
	5	D	〃	ナイフ	68.5	21.3	〃
	6	D	〃	槍	72	13.5	〃
	7	D	〃	〃	71.5	12.6	〃
	8	E	〃	〃	(58.5)	(7.4)	〃
	9	D	〃	〃	(47)	(7.4)	〃
	10	D	〃	掻器	75	35.7	〃
	11	D	〃	〃	64	16.4	〃
	12	I	〃	ナイフ	(78.5)	(29.4)	〃
	13	I	〃	削器	63	12.6	〃
	14	I	〃	〃	83	10.4	〃
	15	I	〃	〃	91	26.4	〃
43	1	／	表採	鏃	29	1.2	〃
	2	／	〃	〃	(30.1)	(1.3)	〃
	3	I	〃	〃	39.5	(3.7)	〃
	4	／	〃	ナイフ	(66)	(25.7)	〃
	5	／	〃	〃	66.5	(22.4)	〃
	6	／	〃	〃	100.1	(32.1)	〃
	7	E	〃	削器	61	7.2	〃
	8	I	〃	槍	90.5	(29.6)	〃
	9	／	〃	削器	(35)	(3.6)	〃
	10	I	〃	〃	74.5	14.1	〃
	11	Eの西	〃	ナイフ	112	37.8	〃
	12	D	〃	削器	91.5	17.2	〃
	13	／	〃	〃	62	5.8	〃
	14	／	〃	〃	60.5	6.1	〃
	15	／	〃	〃	76.5	12.4	〃
	16	／	〃	〃	69	9.5	〃
	17	／	〃	〃	60	8.9	〃
	18	／	〃	斧 ?	88.5	118.1	泥岩

註　削器は片面加工，ナイフは両面加工として区別した。

引用参考文献

1897 W.J.Hoffman ; The Graphic Art of the Eskimo, Annual Report of Smithsonian Institution 1895.

1901 坪井正五郎　北海道利尻貝塚発見の海獣牙製の人形　東京人類学会雑誌178

1933 名取武光　利尻・礼文両島に於ける考古学的調査報告　史前学雑誌５－３

1936 名取武光　北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相　北大博物館報告

1948 時雨音羽　島物がたり　宗谷観光協会

1949 新岡武彦　利尻郡仙法師村字政泊石器時代住居址に就きて　利礼郷土研究１

1950 新岡武彦　北海道利尻郡仙法師村政泊先史時代遺跡調査概報　利礼郷土研究５

1951 新岡武彦　沓形町亦稚貝塚調査概報　利礼郷土研究６（短報）

1964 M.G.Levin & L.P.Potapov; The Peoples of Siberia, The Univ. of Chicago Press

1965 藤本強　オホーツク土器について　考古学雑誌51－４

1967 泉・曽野　オンコロマナイ　東京大学教養学部人文科学紀要42

1968 大塚和義　オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物　物質文化11

〃 大場利夫　北海道周辺地域にみられるオホーツク文化　北方文化研究３

1970 菅正敏　宗谷地方の先史文化ノート(2)　北海道考古学５

1971 菊地俊彦　樺太のオホーツク文化について　北方文化研究５

1972 大井晴男　礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について　北方文化研究６

1975 Ohyi Haruo; The Okhotsk Culture, a Maritime Culture of the Southern Okhotsk Sea Region. In Prehistoric Maritime Adaptation of the Circumpolar Zone, W.Fitshugh ed.

〃 大塚・加藤・桜井・山口　海獣狩猟民オホーツク文化の源流　どるめん６

〃 横山・直井・石橋　北海道の土師器　考古学研究22－２

1976 大場・大井　香深井遺跡上　東京大学出版会

〃 桑原滋郎　東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について　考古学雑誌61－４

〃 田上善夫　利尻島における偏形樹の形成要因について　地学雑誌85－１

1977 利尻町教育委員会　利尻町の埋蔵文化財

〃 東利尻町教育委員会　埋蔵文化財緊急調査報告書

後　　記

北海道東・北部の海岸地帯にひろがるオホーツク文化の研究は，根室（東京教育＝筑波大学），常呂（東京大学），稚内・礼文地区（北海道大学）を中心として，精密な調査のうえに続けられ，その成果が次々と発表されてきた。特に，「常呂」や「香深井遺跡」として刊行された研究報告は，オホーツク文化研究史上稀にみる大冊として残るものであろう。

今回の調査は，それらと比較にならぬ小さなものであった。遺跡の保存状態も決してよいとはいえない。加えて微力の私には，与えられた資料を完全に生かすことが出来なかったのではないかと怖れている。しかし，利尻町教育委員会の文化財保護に対する熱意の結晶として，ここに小冊子を世におくることとなった。

利尻島は隣りの礼文島で遺跡が次々と調査されたにも拘らず，現在までに学術的調査が行われ，それが報告書の形でまとめられて学会の話題を賑わすことがなかった。利尻島は火山島で，礼文島とはその成立が違うから，しっかりした遺跡は無いのかもしれない。こういう印象が多くの人々に与えられていたことは，必ずしも否めない事実である。その意味でも今回この報告書を刊行することはたいへん意義深いことと思う。利尻島は礼文島と気候環境において殆んど変りなく，同じ時期に同じ文化をもった人々が遂次住み続けたことは，もはや疑う余地のない事実となった。

昭和52年６月上旬に，水洗いを済ませた遺物が札幌に運び込まれ，遺物整理をはじめてから早くも一年が過ぎ去った。攪乱部分が多く，良好な層位が得られなかったにも拘らず，遺物の数量が多く，注目すべき資料も多かった。調査を担当した３人のうち２人が，標津町と利尻町にそれぞれ職を得て，これはたいへん喜ぶべきことであったが，報告書をまとめるには不便になり，充分納得できる報告書というわけにはいかなかったように思う。

整理については，札幌市教育委員会の加藤邦雄氏の御協力が無かったならば，一年ではとうてい出来上らなかったであろう。加藤邦雄氏は終始なれない私に助力を惜しまれなかったし，上野秀一氏は実測図についての指導を，羽賀憲二氏は写真撮影をしてくださった。また北海道開拓記念館の赤松守雄氏には石器の材質鑑定をお願いした。実際の図の作成には横地桂子・高杉順子・岡田知子西条美知子氏が手伝ってくださった。研究室も仕事場も持たない仮住居の私が，曲りなりにも報告書をまとめることが出来たのは，これらの方々の御好意にほかならない。

遠く利尻町や標津町から西谷・椙田両氏は何回も足を運び，北風一憲氏は執筆を分担して下さった。動物遺存体は北大大学院の西本豊弘氏にお願いし，北海道教育委員会の高橋和樹氏と共に整理していただいた。遺跡の集成の項では前回の協力者，塩野崎直子・荒牧美枝子両氏の記録文を掲載している。

昭和25年の調査について問合せたところ，調査者の国士館大学教授大川清氏はお忙しいなかを，御親切にも未発表論文をコピーし御送付下さった。27年も前のものだからと御辞退されたのを是非にとお願いし，御迷惑もかえりみず載せさせていただいた。お蔭で報告書が充実し，亦稚貝塚の理解が深まったことと思う。利尻町からは航空写真を拝借し巻頭図版が飾られたし，第一・第二図版

は北海道大学助教授吉崎昌一氏の手になるものである。

珍らしい鹿角製品の補強・補修には北海道大学助教授林謙作氏と国立奈良文化財研究所の沢田正昭氏のお力をお借りした。印刷に際しては北海道図書企画の国見熙氏に我儘をかなえていただきたいへんお世話になった。

今，つくづく思うことは，一つの小さな調査の記録を残すのに，いかに多くの人々の力が必要かと云うことである。これは調査が特定の個人のものではなく，文字通り万人の財産であることを示している。上記の方々には心からの感謝を捧げたい。

執筆分担について細かくは文末に名前を記したが，第二章を椙田光明氏と西谷栄治氏，第三章を西本豊弘氏，第一章と四章のほとんどを岡田が分担した。とくに椙田光明氏は今回の調査の中心になって働いてくれたことを付記したい。

今日も丘珠空港をとびたったトウインオッターが，赤と白の機体を青空に浮かべて飛んで行く。利尻空港まで稚内経由で2時間の飛行，利尻島がひときわ身近に感じられるようになった。

（岡田　淳子）

1977年4月に亦稚貝塚の発掘調査が行なわれ，今その発掘調査報告書が刊行されることになって，一年前の発掘調査当時が想い出されます。私が教育委員会に勤務して丁度一年が経った時でした。埋蔵文化財の重要さというのは，教育委員会に勤務した年に国・道の補助を得て行なわれた分布調査により認識していましたが，いざその発掘調査となった時，初めてのことだけに，大変なことになったものだと思ったものでした。というのは，発掘箇所が誰にも利用されていない空地というのならともかく，一年の内限られた期間しかない利尻の観光の拠点ともいうべき宗谷バスの営業所の改築工事箇所だったからです。しかし，そのまま見すごすことはできません。早速，所有者の宗谷バス株式会社利尻営業所々長，建築業者の惣万組社長に事情を説明，工事の一時停止を要請する一方，北海道教育委員会へ状況を報告するとともに，調査員の要請とあわただしい日が続きました。幸い土地所有者・建築業者の理解を，調査員は分布調査を担当された岡田淳子先生に依頼することになり，準備を急ぎました。

そして，1977年4月16日から現場の調査が始まったのでした。4月とはいえ，寒い日が続きました。みぞれ混りの雨の日には，現場にテントを張り，ストーブを持ち込み，ふるえながら調査を続けたり，被せたシートが夜中に風雨に飛ばされたりして大変な日もありましたが，完形の土器が三個並んで出てきた日など嬉しい日もありました。正直なところきつい毎日が続きましたが，初期の目的を達成して発掘調査を終了できました。これは，岡田先生はじめ調査員の先生方は勿論，北海道教育委員会，宗谷バス株式会社，株式会社惣万組など関係者の皆さんのご理解とご協力によるものと，改めて感謝するものです。そしてこの発掘調査により地元町民の皆さんの埋蔵文化財に対する認識がさらに深まったことも大きな成果と思います。

この報告書が利尻の先史文化の解明に，更には，オホーツク文化の解明の資料となるものであれば，これ以上の成果はないと思います。　（利尻町教育委員会　保野洋一）

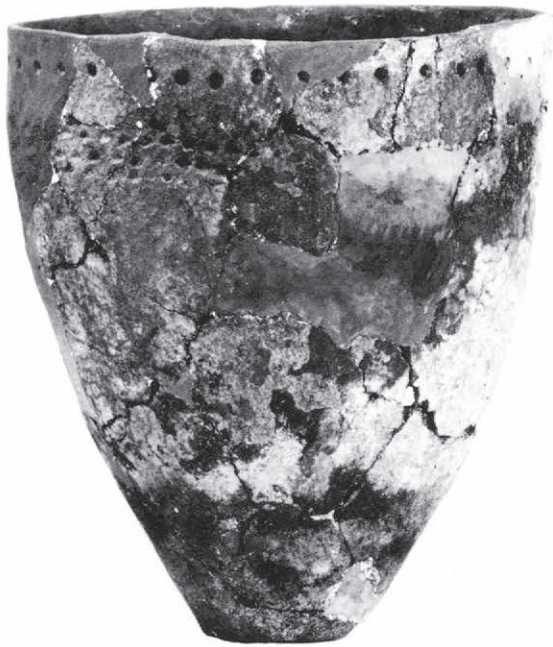
図　　版

第一図版　海獣線刻文土器

第二図版　ソーメン文（貼付式浮文）土器

第三図版　発掘区域全景（土）・貝層断面（下）

第四図版　住居址（上）・焼骨付近土器出土状態（下）

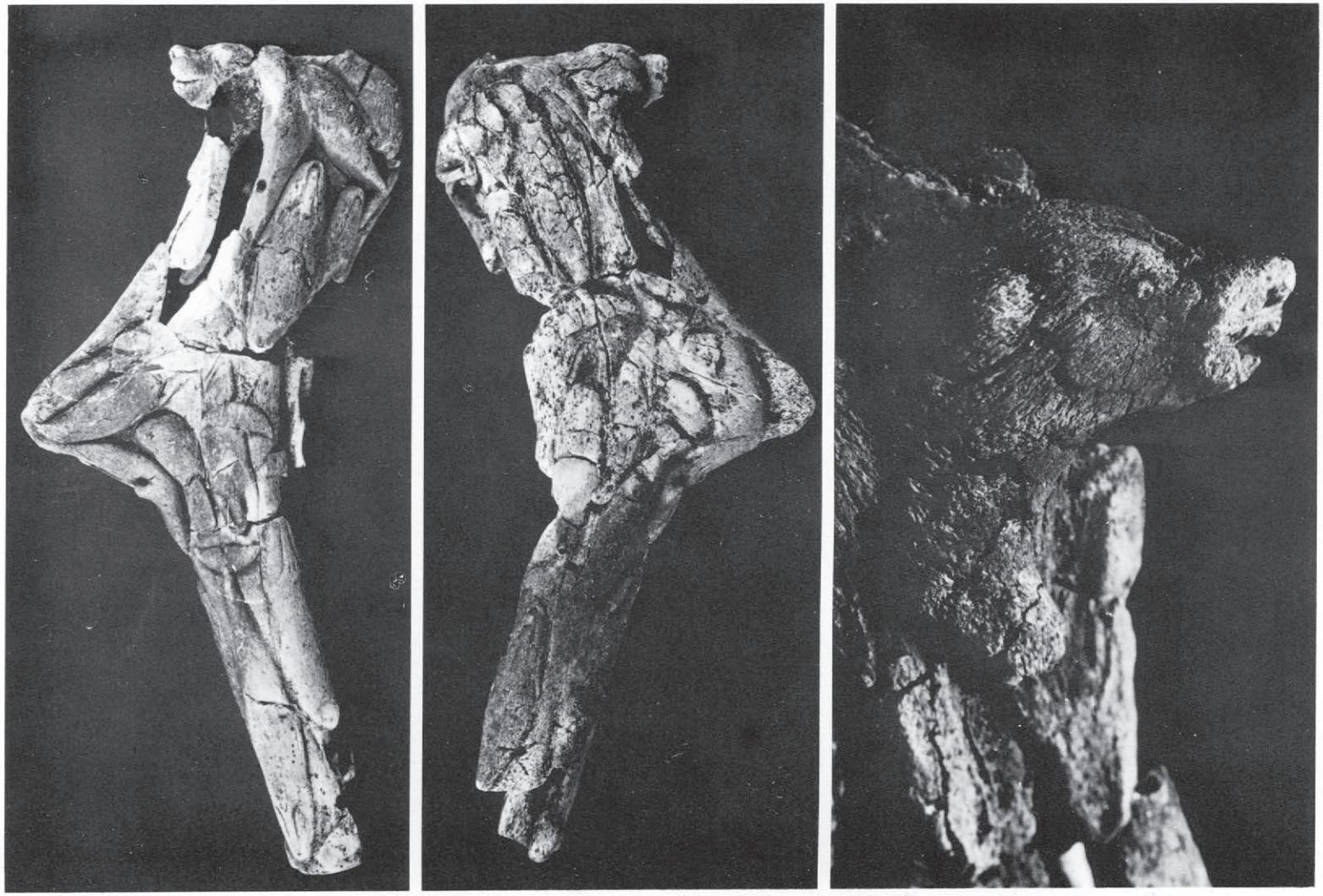


第五図版　第Ⅰブロック出土土器（1/3）

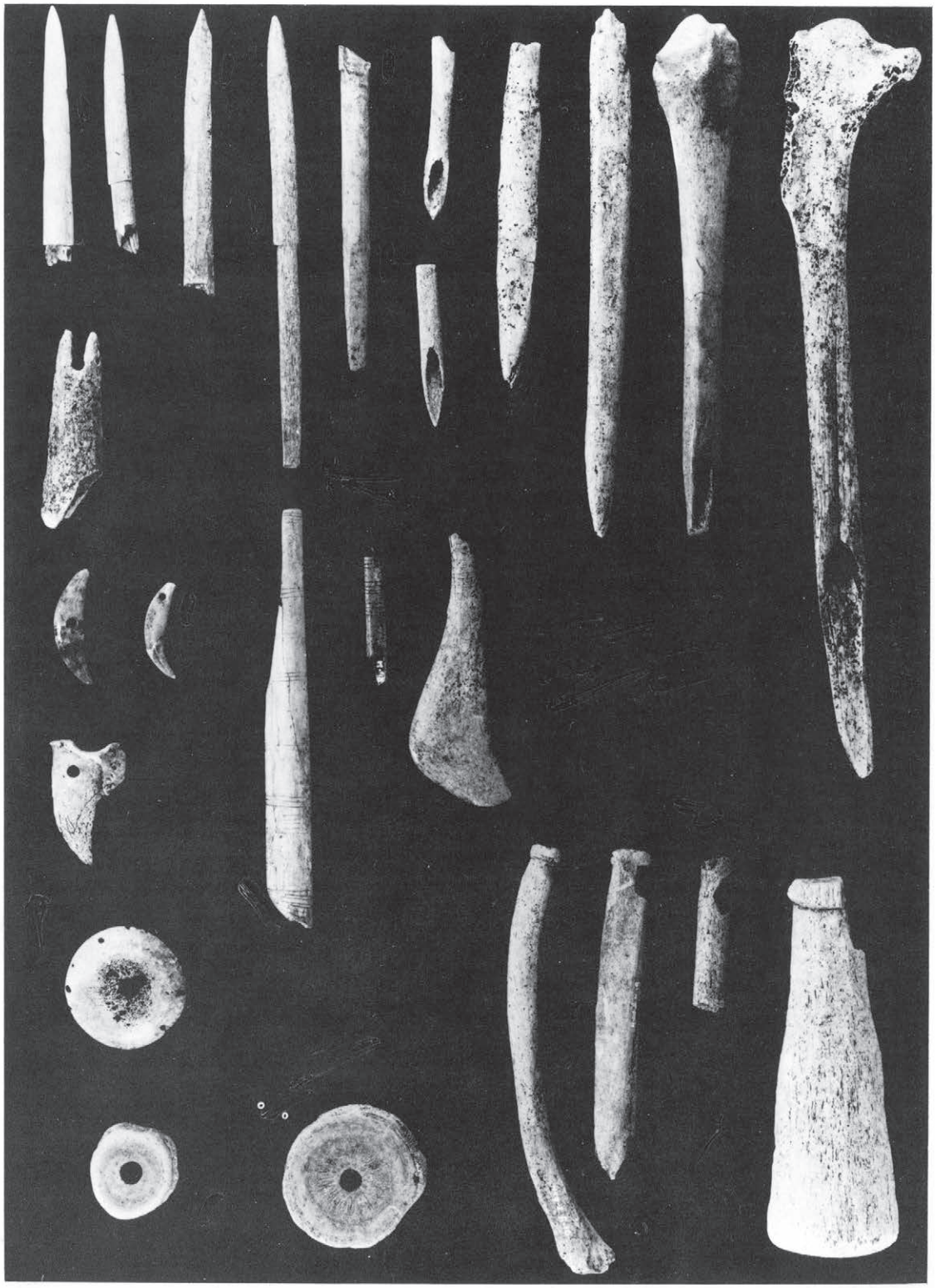
第六図版　第２ブロック出土土器（⅓）

第３ブロック出土土器（1/3）

第八図版 小形土器・土製品（1/1）

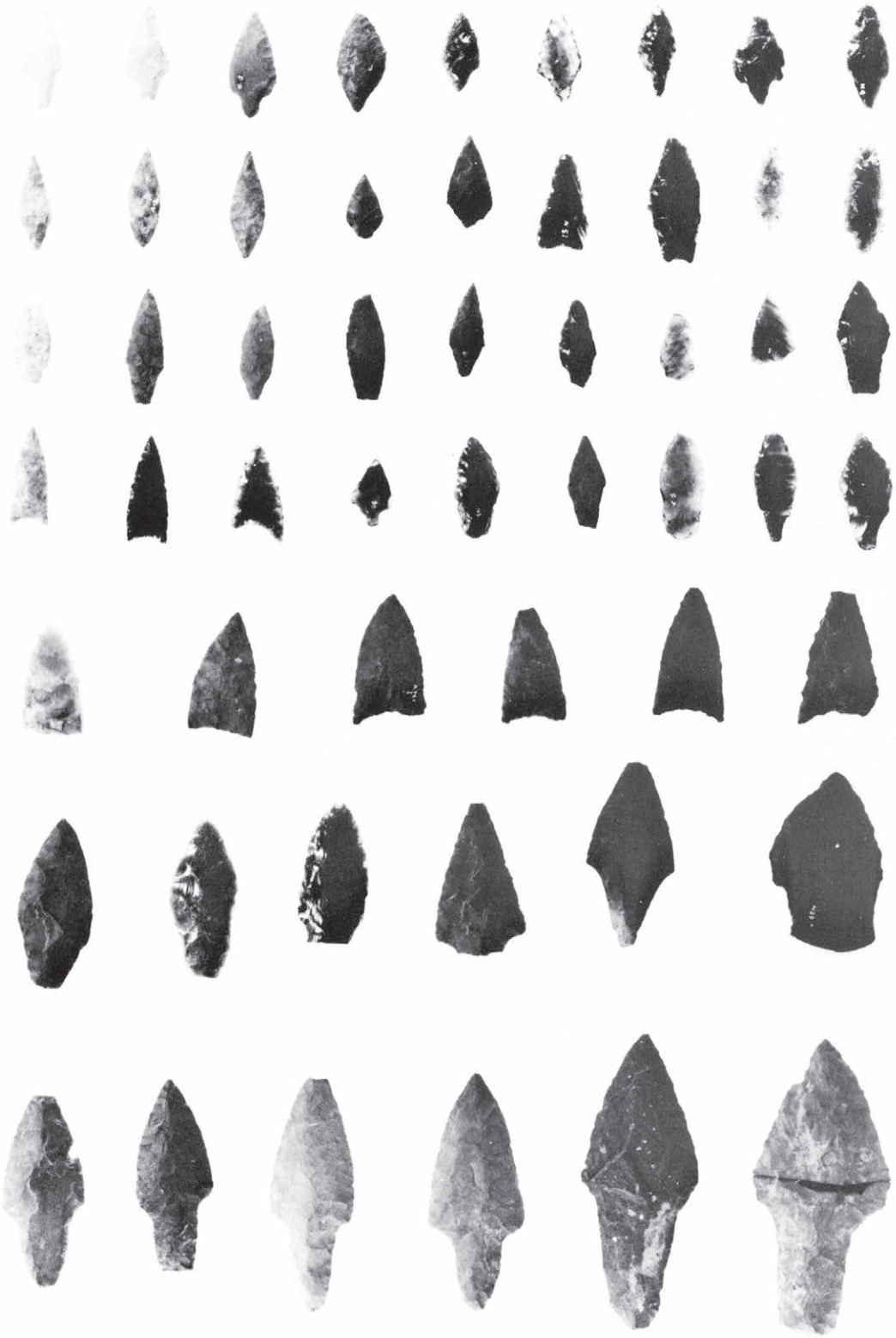


第九図版　彫刻ある鹿角製品（A）



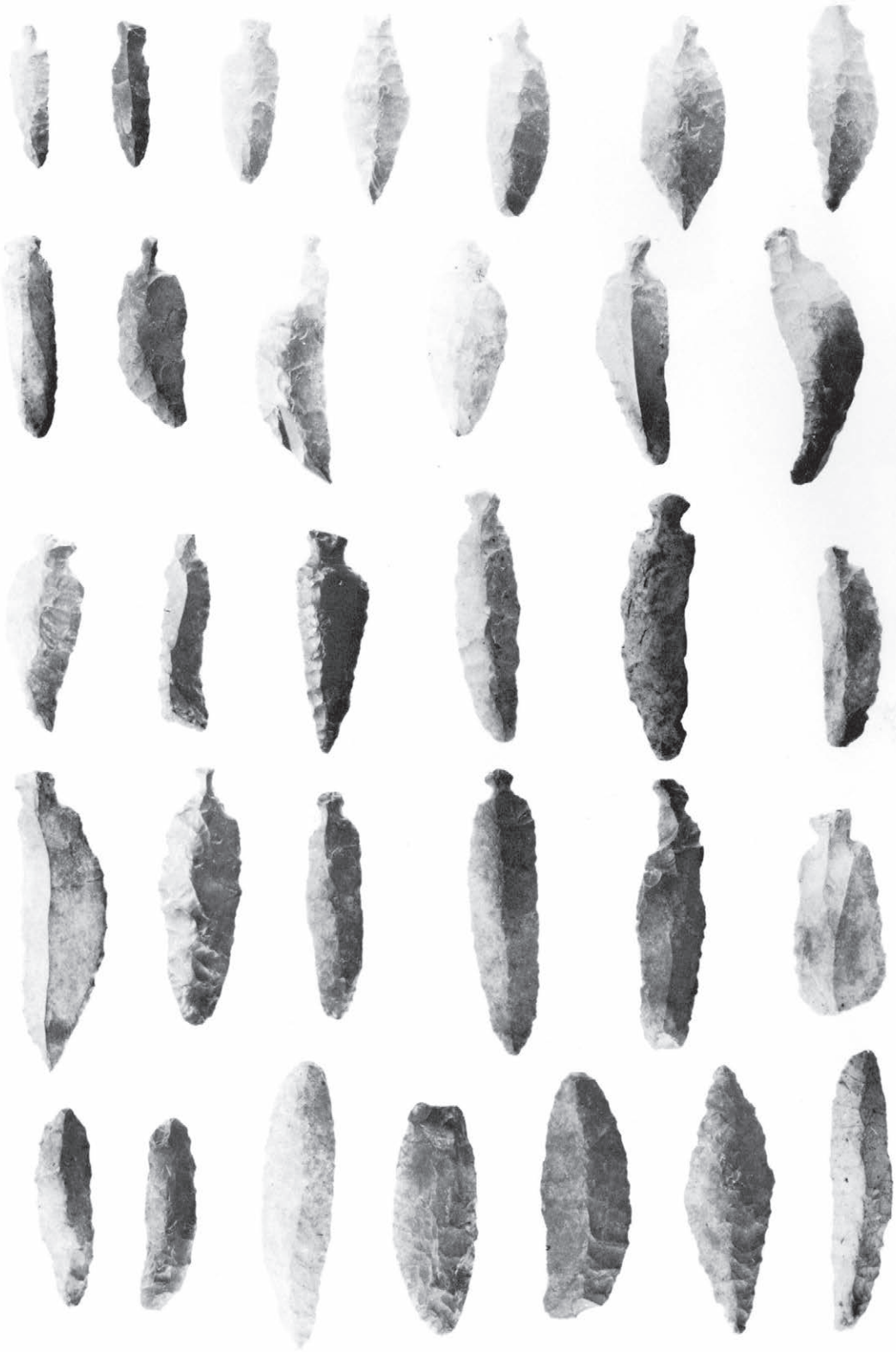
第十一図版　骨角器－尖頭具等（½）

第十二図版　骨角器―骨斧等（1/3）



第十三図版　打製石器―鏃・槍先（½）

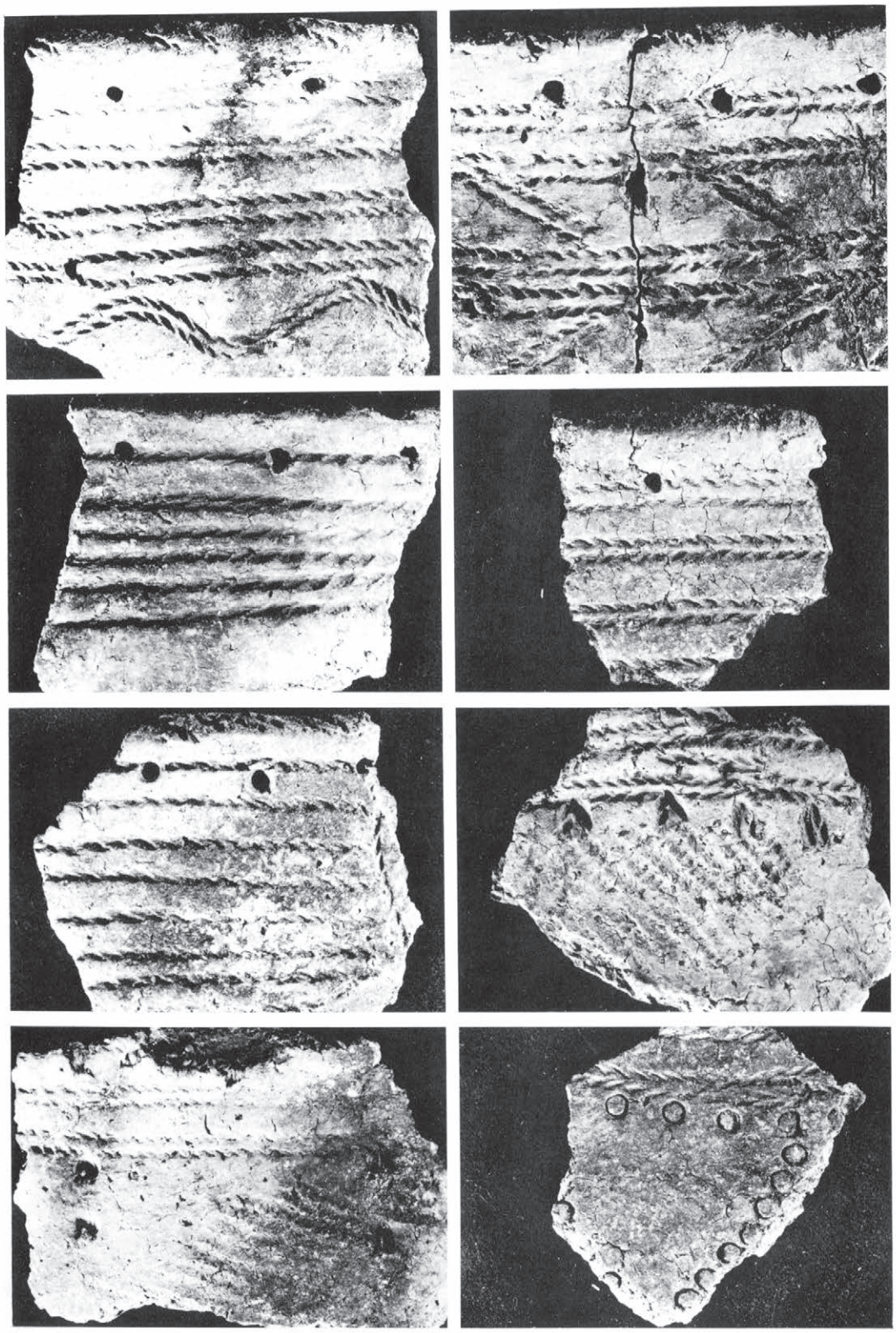
第十四図版　打製石器―ナイフ・スクレイパー・錐（½）



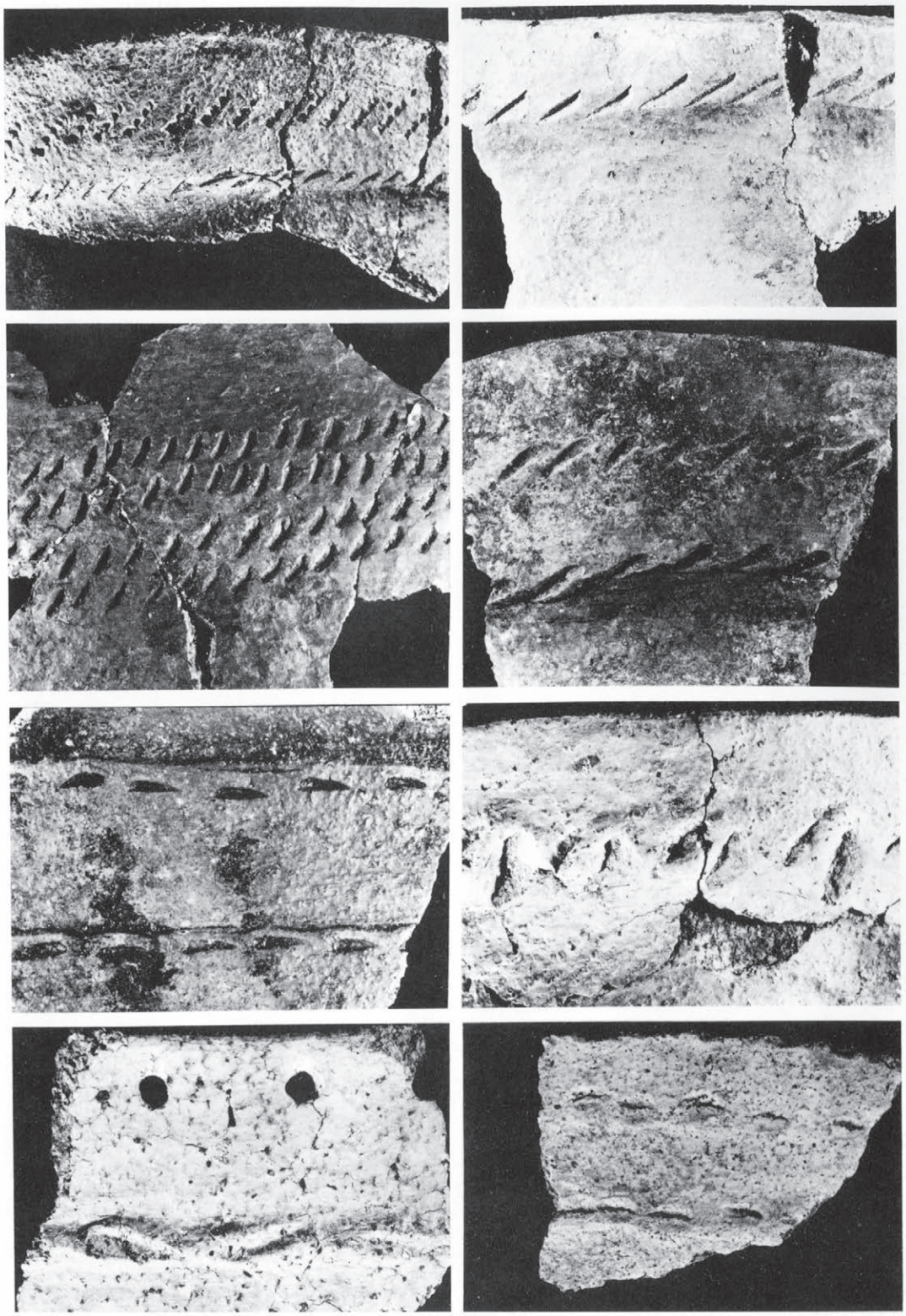
第十五図版　打製石器―つまみ付ナイフ（石匙）（½）

第十六図版　磨製石器―石斧（½）

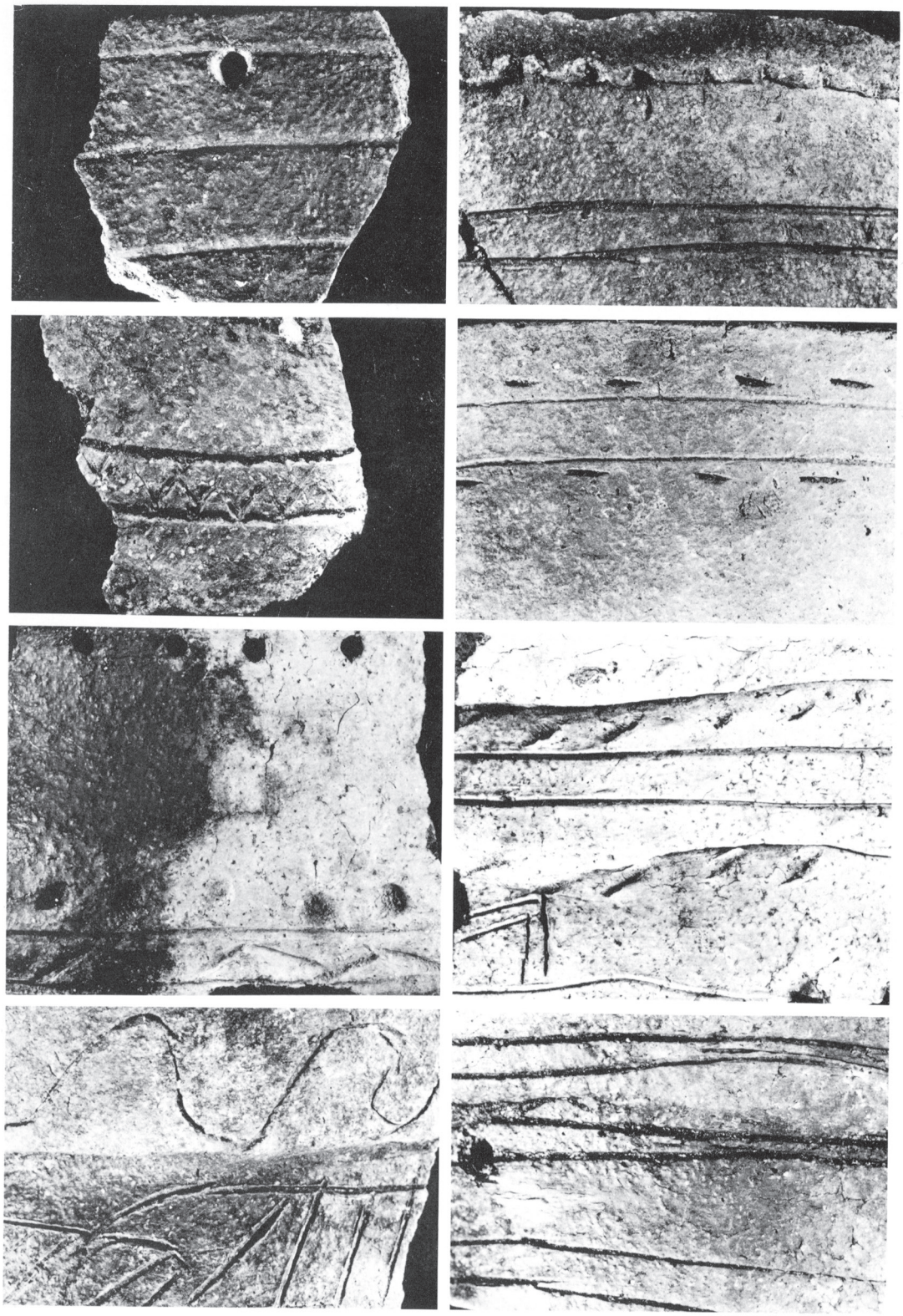
第十七図版　磨製石器―砥石・石錘（1/3）



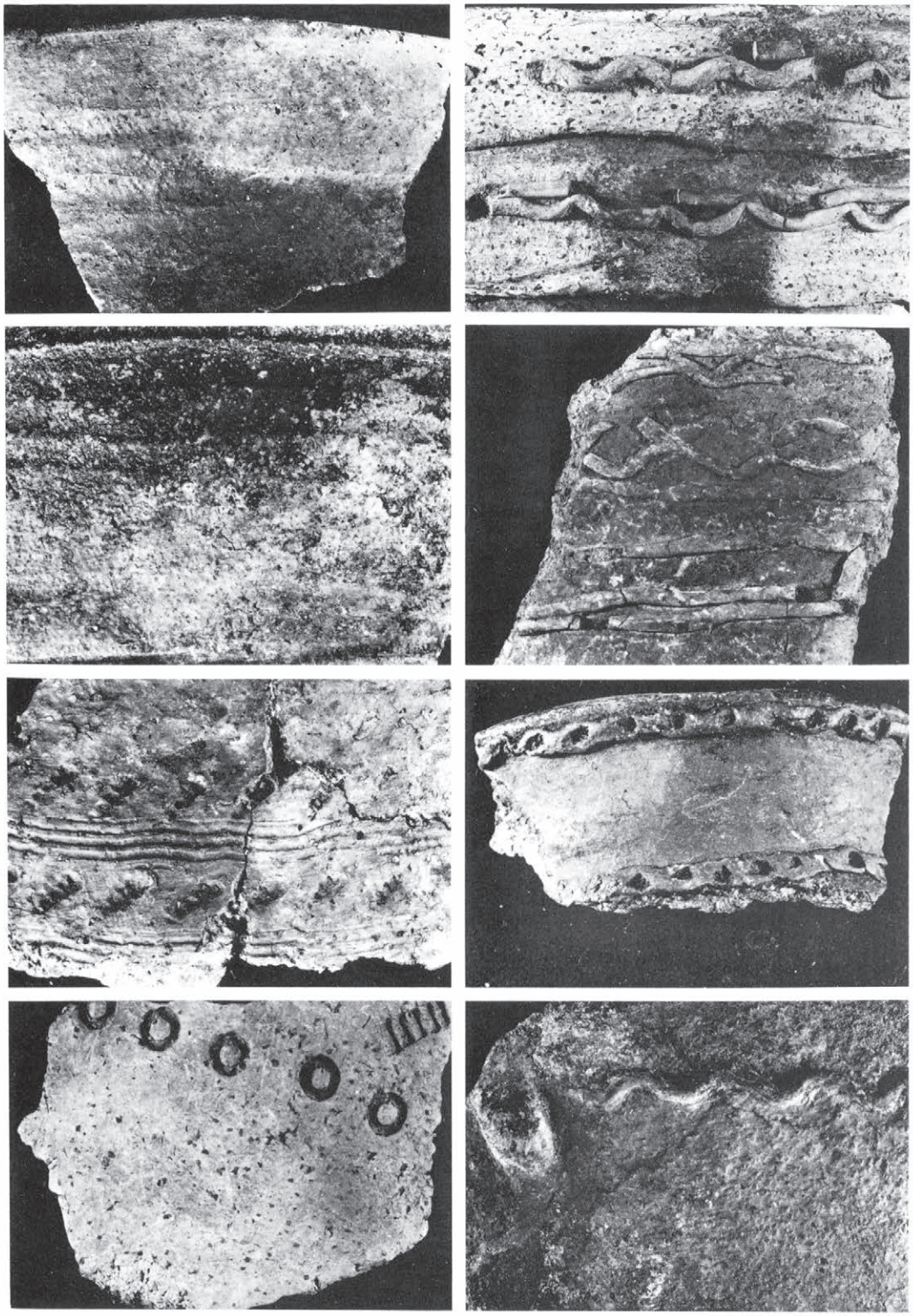
第十八図版　土器片文様―縄線文（1/1）



第十九図版　土器片文様―刻文（1/1）



第二十図版　土器片文様―沈線文（1/1）



第二十一図版　土器片文様―浮文・型押文（1/1）

亦稚貝塚　MATAWAKKA

昭和53年８月５日　印刷

昭和53年８月10日　発行

発行　利尻町教育委員会

利尻郡利尻町沓形字富士見町

(01638)４－２４４５

印刷　北海道図書企画

亦稚貝塚

Matawakka Site

Rishiri-cho, Hokkaido 1978

北海道利尻町教育委員会

北海道利尻町教育委員会

1978